

高松市内遺跡発掘調査報告書

# 相作馬塚

2015年3月

高松市教育委員会



## 例 言

- 1 本報告は、農地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（相作馬塚）の報告書である。
- 2 調査地は高松市鶴市町地内に所在する。調査期間は平成 25 年（2013 年）6 月 3 日～6 月 13 日である。
- 3 本遺跡の確認調査は、高松市創造都市推進局文化財課文化財専門員高上拓及び同課埋蔵文化財担当職員池見渉が担当した。また、平成 23 年度に実施した工事立会は高上が担当した。本調査および整理作業は池見が担当した。
- 4 本書の執筆・編集は池見が担当した。

第 1 表 調査・整理作業分担表

| 作業内容 | 実施期間                 | 担当者   |
|------|----------------------|-------|
| 確認調査 | H23. 5. 25～6. 23     | 高上・池見 |
| 工事立会 | H23. 9. 26～10. 7     | 高上    |
| 発掘調査 | H25. 6. 3～6. 13      | 池見    |
| 整理作業 | H26. 4. 1～H27. 3. 31 | 池見    |

- 5 本発掘調査の費用（発掘・整理）は国宝重要文化財等保存整備費補助金の交付を受け、費用の 1/2 を国が負担し、残り 1/2 を高松市が負担した。
- 6 第 7 図および第 32 図は国土地理院 2.5 万分の 1 の地図をもとに作成し、一部改変した。
- 7 高度はすべて標高を表す。方位は座標北を示す。
- 8 発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。
- 9 発掘調査及び整理作業にあたっては、以下の方々からの御教示を賜りました。記して感謝申しあげます。  
松田朝由氏（大川広域行政事務組合）、  
松浦昌氏（善通寺市教育委員会生涯学習課）

## 目 次

|       |                                    |
|-------|------------------------------------|
| 第 1 章 | 調査の経緯と経過                           |
| 第 1 節 | 調査の経緯 ..... 1                      |
| 第 2 節 | 調査の経過 ..... 4                      |
| 第 2 章 | 地理的・歴史的環境                          |
| 第 1 節 | 地理的環境 ..... 4                      |
| 第 2 節 | 歴史的環境 ..... 5                      |
| 第 3 章 | 調査の成果                              |
| 第 1 節 | 調査区の設定 / 基本層序 ..... 14             |
| 第 2 節 | 遺構 ..... 15                        |
| 第 3 節 | 遺物 ..... 25                        |
| 第 4 章 | 総括                                 |
| 第 1 節 | 検出遺構について ..... 32                  |
| 第 2 節 | 相作馬塚出土円筒埴輪の位置付けと古墳建築時期の検討 ..... 33 |
| 第 3 節 | 相作馬塚の中世墓としての評価 ..... 57            |

## 挿 図 目 次

|        |                               |
|--------|-------------------------------|
| 第 1 図  | 平成 23 年度調査及び本調査箇所位置図 ..... 2  |
| 第 2 図  | 平成 23 年度調査時出土遺物実測図(1) ..... 5 |
| 第 3 図  | 平成 23 年度調査時出土遺物実測図(2) ..... 6 |
| 第 4 図  | 平成 23 年度調査時出土遺物実測図(3) ..... 7 |
| 第 5 図  | 調査地位置図(1) ..... 8             |
| 第 6 図  | 調査地位置図(2) ..... 8             |
| 第 7 図  | 周辺遺跡地図 ..... 9                |
| 第 8 図  | 中世以前遺構配置図 ..... 16            |
| 第 9 図  | 古墳墳墻・段築推定ライン ..... 17         |
| 第 10 図 | 中世遺構配置図 ..... 19              |
| 第 11 図 | 基壇状石積み平面図・立面図・断面図 ..... 20    |
| 第 12 図 | 集石墓平面図・断面図 ..... 22           |
| 第 13 図 | 近世遺構配置図 ..... 23              |
| 第 14 図 | 近世土留め状石積み平面図・断面図 ..... 24     |
| 第 15 図 | 出土遺物実測図(1) ..... 27           |
| 第 16 図 | 出土遺物実測図(2) ..... 28           |
| 第 17 図 | 出土遺物実測図(3) ..... 29           |
| 第 18 図 | 県内出土円筒埴輪事例① ..... 40          |
| 第 19 図 | 県内出土円筒埴輪事例② ..... 41          |
| 第 20 図 | 県内出土円筒埴輪事例③ ..... 42          |
| 第 21 図 | 県内出土円筒埴輪事例④ ..... 43          |
| 第 22 図 | 県内出土円筒埴輪事例⑤ ..... 44          |
| 第 23 図 | 県内出土円筒埴輪事例⑥ ..... 45          |
| 第 24 図 | 県内出土円筒埴輪事例⑦ ..... 46          |
| 第 25 図 | 県内出土円筒埴輪事例⑧ ..... 47          |
| 第 26 図 | 県内出土円筒埴輪事例⑨ ..... 48          |
| 第 27 図 | 県内出土円筒埴輪事例⑩ ..... 49          |
| 第 28 図 | 県内出土円筒埴輪事例⑪ ..... 50          |
| 第 29 図 | 県内出土円筒埴輪事例⑫ ..... 51          |

|                            |    |                            |
|----------------------------|----|----------------------------|
| 第 30 図 県内出土円筒埴輪事例①         | 52 | 写真図版 3-19 調査区南壁断面(1)(北西から) |
| 第 31 図 弦打王墓古墳出土円筒埴輪実測図     | 53 | 写真図版 3-20 調査区南壁断面(2)(北から)  |
| 第 32 図 中期後葉～後期後葉の古墳埴造状況の動態 | 54 | 写真図版 4-21 古墳埴丘断面(1)(北東から)  |
|                            |    | 写真図版 4-22 古墳埴丘埴造状況(北から)    |
| 第 33 図 青木 1 号塚出土円筒埴輪実測図    | 55 | 写真図版 5-23 平成 23 年度調査時出土石造物 |
| 第 34 図 中世墓 a 類事例(1)        | 58 | 写真図版 5-24 軟質凝灰岩製五輪塔        |
| 第 35 図 中世墓 a 類事例(2)        | 59 | 写真図版 6-25 集石墓出土藏骨器(1)      |
| 第 36 図 中世墓 a 類・b 類混合事例     | 60 | 写真図版 6-26 集石墓出土藏骨器(2)(内面)  |
| 第 37 図 中世墓 b 類事例           | 61 | 写真図版 6-27 集石墓出土藏骨器(2)(外面)  |

## 挿 表 目 次

|                          |    |
|--------------------------|----|
| 第 1 表 調査・整理作業分担表         | 卷頭 |
| 第 2 表 平成 23 年度調査時出土遺物観察表 | 3  |
| 第 3 表 整理作業工程表            | 4  |
| 第 4 表 相対年代～絶対年代対照表       | 25 |
| 第 5 表 円筒埴輪変遷表            | 39 |
| 第 6 表 香川県内中世墓形成状況模式図     | 57 |
| 第 7 表 出土遺物観察表            | 66 |

## 本 文 図 版 目 次

|                        |   |
|------------------------|---|
| 写真 1 土留め状石積み検出状況(北西から) | 4 |
| 写真 2 贴石状遺構検出状況(1)(西から) | 4 |
| 写真 3 贴石状遺構検出状況(2)(北から) | 4 |
| 写真 4 集石墓検出状況(北西から)     | 5 |
| 写真 5 集石墓筒状土器出土状況(北から)  | 5 |

## 写 真 図 版 目 次

|                               |  |
|-------------------------------|--|
| 写真図版巻頭-1 調査地遠景(北東から)          |  |
| 写真図版 1-2 土留め状石積み検出状況(1)(北西から) |  |
| 写真図版 1-3 土留め状石積み検出状況(2)(東から)  |  |
| 写真図版 1-4 基壇状石積み検出状況(1)(北から)   |  |
| 写真図版 1-5 基壇状石積み検出状況(2)(北西から)  |  |
| 写真図版 1-6 基壇状石積み検出状況(3)(西から)   |  |
| 写真図版 1-7 基壇状石積み検出状況(4)(北から)   |  |
| 写真図版 1-8 基壇状石積み検出状況(5)(東から)   |  |
| 写真図版 1-9 基壇状石積み断面(北東から)       |  |
| 写真図版 2-10 集石墓検出状況(1)(北西から)    |  |
| 写真図版 2-11 集石墓検出状況(2)(北から)     |  |
| 写真図版 2-12 藏骨器検出状況(1)(北から)     |  |
| 写真図版 2-13 藏骨器検出状況(2)(北から)     |  |
| 写真図版 2-14 藏骨器完掘状況(1)(北から)     |  |
| 写真図版 2-15 藏骨器完掘状況(2)(北から)     |  |
| 写真図版 2-16 古墳埴丘検出状況(1)(北から)    |  |
| 写真図版 2-17 古墳埴丘検出状況(2)(北西から)   |  |
| 写真図版 3-18 古墳埴丘検出状況(3)(東から)    |  |

# 第1章 調査の経緯と経過

## 第1節 調査の経緯

### 調査に至る経緯

調査対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地「相作馬塚」内に位置する。当該包蔵地内において、農地整備工事の一環として、一部の削平が計画されたことから、埋蔵文化財保護と開発工事との調整を行う必要が生じた。

協議の基礎データを得ることを目的に、埋蔵文化財の包蔵状況を確認するための「確認調査」を行いう必要がある旨説明したところ、平成23年2月17日付けで、確認調査依頼文が事業者より提出されたことから、同年5月25日～6月23日の日程で確認調査を実施し、削平を受けている箇所を除くほぼ全域に中世～近世の遺構・遺物が包蔵されている状況を確認した。その後、上記工事の一部が施工されることから、工事着手に先立ち、平成23年8月11日付けで、文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘届出が事業者より香川県教育委員会教育長へ提出された。それに対し、工事による削平箇所が極めて狭小であるとの理由から、同日付けで、香川県教育委員会教育長より事業者あてに「工事立会」の行政指導がなされた。これに従い、高松市教育委員会は平成23年9月26日～10月7日に工事立会を実施し、中世～近世の遺構を検出した。またこの時、工事範囲内に包蔵されていた近世の遺構の一部についてのみ保護措置を完了し、他は事業者の協力のもと現地保存した。

平成25年度、当該農地整備工事の進展に伴い遺跡北面の大部分が削平されることとなった。そこで、工事着手に先立ち、平成25年4月19日付けで、埋蔵文化財発掘届出が事業者より香川県教育委員会教育長へ提出された。それに対し、地下の埋蔵文化財が掘削され、破壊される恐れがあり、且つ掘削範囲が広大であるとの理由から、同年5月2日付けで、香川県教育委員会教育長より事業者あてに「発掘調査」の行政指導がなされた。これに従い、高松市教育委員会は平成25年6月3日～6月13日に発掘調査を実施し、当該工事範囲内の保護措置を完了した。なお、本発掘調査は国庫補助金の交付を受けて実施し、費用の1/2を国が、残り1/2を高松市が負担した。

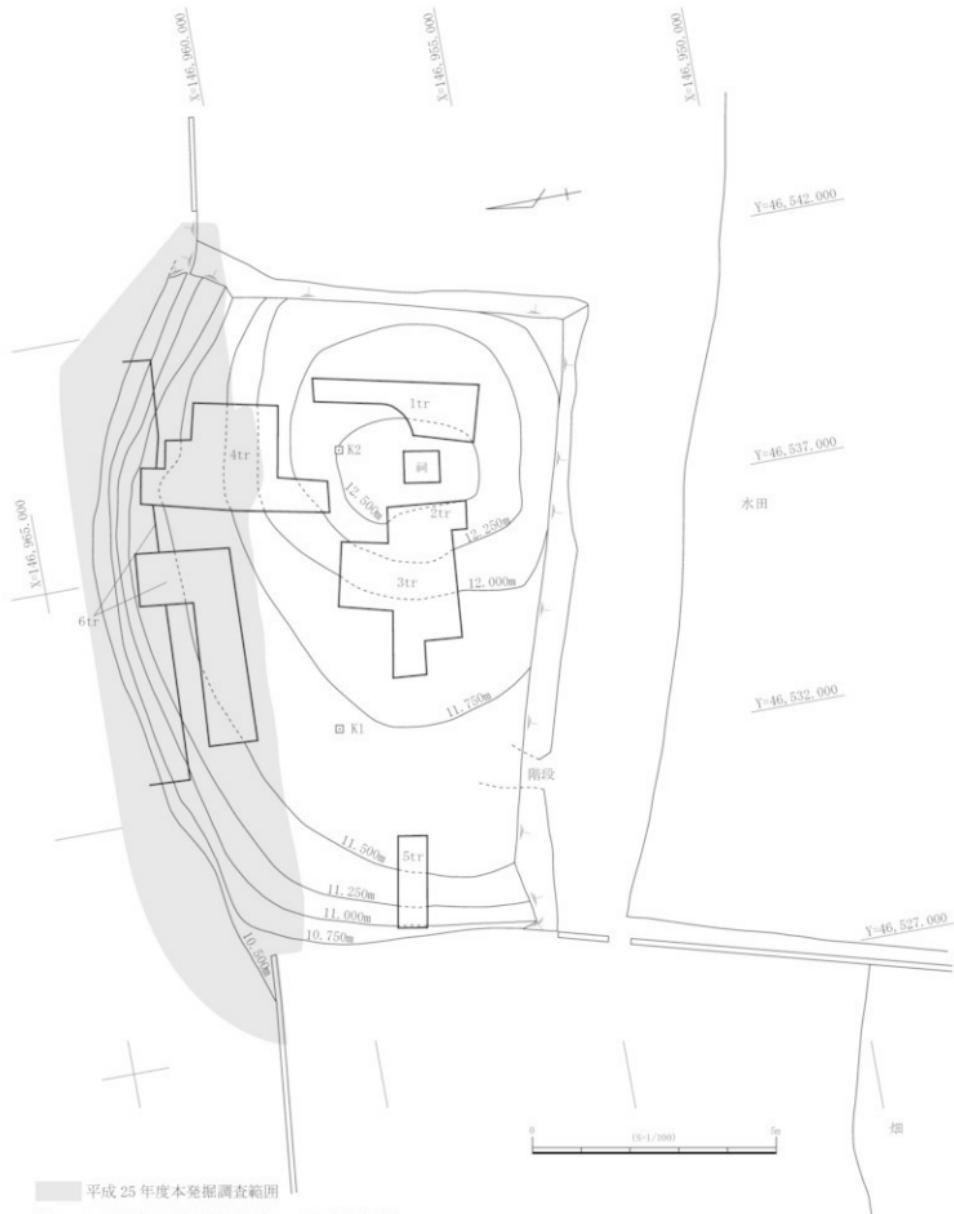
本報告では、平成25年度に実施した発掘調査と平成23年度に実施した確認調査及び工事立会の結果を総括して報告する。なお、確認調査及び工事立会時

に作成したトレンド断面図については、平成23年度に刊行した市内遺跡発掘調査概報を参照されたい（高松市教育委員会 2012）。

### 確認調査／工事立会の概要

確認調査では、遺跡の性格及び遺構の広がりを確認するため、計6本のトレンドを設定した（第1図）。トレンドの設定箇所は塚頂部、塚北・西裾部である。確認調査の結果、塚東寄りの高まり部斜面に安山岩板石及び砂岩円礫を貼り付けた状況（「貼石状遺構」）とその前面に「テラス面」を形成した状況を確認した（写真2・3、第9図）。遺構の検出のみにとどめたため形成時期を特定する遺物を得ていないが、後述する中世の遺構群との関係から、調査当時は中世に属する遺構であると考えた。また、上記テラス面上で、約50cm四方の凝灰岩2石及び多量の砂岩円礫の集積、磯骨器と筒状土器により形成された「集石墓」を確認した（写真4・5、第10・12図）。出土遺物から中世に属する遺構であると考えた。塚裾部付近には盛土が施され、砂岩円礫が多量かつ不規則に盛り上げられた状況を確認した（「土留め状石積み」）（写真1、第13・14図）。当該遺構は出土遺物から、近世に形成されたものであると考えた。一方で、出土遺物中に多量の円筒埴輪片及び須恵器が含まれ、円筒埴輪の形状から川西編年V期（川西1978）に属するものであると考えた（第2図1、第3図12・13、第4図37・38・44～47）。この結果は、当該遺跡が本来古墳であった可能性を示唆する。

工事立会は、塚北面の一部削平に際して実施した。工事立会の結果、前述の近世の「土留め状石積み」が遺跡北面を中心非常に良好な状態で残存することが判明した（写真1、第13・14図）。また、「土留め状石積み」を除去した段階で、長径40cm前後の砂岩円礫を多用し、石壙状に組み上げた「基壙状石積み」を確認した（第10・11図）。「基壙状石積み」は近世に形成された「土留め状石積み」に覆われるようにな存している点、石積間や石積裏込め土から近世の遺物を得ていない点から、中世に形成されたものであると考えた。当該工事立会によって、遺跡北面に形成された「土留め状石積み」の一部の記録保存を完了した。一方、「基壙状石積み」の存在は確認調査では認識しておらず、その存在は想定外であった。そこで、改めて詳細な記録作業を行う必要があることから、事業者の協力のもと現地で保存した。



第1図 平成23年度調査及び本調査箇所位置図

第2表 平成23年度調査時出土遺物観察表

| 番号 | 出土位置(トレンチ/層位)      | 種別        | 器種       | 部位      | 調整                |               | 備考                       |
|----|--------------------|-----------|----------|---------|-------------------|---------------|--------------------------|
|    |                    |           |          |         | 外面/文様等            | 内面/文様等        |                          |
| 1  | 6トレンチ/4層           | 灰質土       | 円筒埴輪     | 突部部     | (安藤謙)ヨコナダ、タテハケ    | タテナダ          | 円形透かし有り。                 |
| 2  | 3トレンチ/1・2層         | 土師質土器     | 釜        | 口縁部から脚部 | タテハケ(鉢底下凹)工具孔?    | ナダ            | —                        |
| 3  | 3トレンチ/1・2層         | 土師質土器     | 焼炉       | 上縁部     | ナダ/浮き蓋あり          | ヨコナダ、ヨコハケ/突起  | —                        |
| 4  | 3トレンチ/1・2層         | 土師質土器     | 釜?       | 底部      | ナダ                | ヨコナダ、指標E      | 底部(口内外部ともに未調整で粗い仕上げ)。    |
| 5  | 3トレンチ/1・2層         | 土師質土器     | 便        | 頭部      | ナダ、タタキ            | —             | —                        |
| 6  | 3トレンチ/1・2層         | 土師質土器     | 甕        | 口縁部     | 凹輪E/ナダ            | 凹輪ナダ          | —                        |
| 7  | 3トレンチ/1・2層         | 陶器        | 灯明皿      | 底部      | 凹輪ナダ、底部糸切跡        | 凹輪ナダ、施釉       | —                        |
| 8  | 3トレンチ/1・2層         | 陶器        | 瓶        | 底部      | 凹輪ナダ、施釉(透明釉)/付付有力 | 凹輪ナダ、施釉(透明釉)  | —                        |
| 9  | 3トレンチ/1・2層         | 陶器        | 小豆       | 底部      | ヨコナダ、施釉           | 施釉            | —                        |
| 10 | 3トレンチ/1・2層         | 土師質土器     | 輪削口または高杯 | 脚部      | —                 | ナダ            | 人形埴輪腹部の可能性有り。            |
| 11 | 3トレンチ/1・2層         | 土師質土器     | 釜        | 脚部      | タテハケ、ヨコナダ         | —             | —                        |
| 12 | 3トレンチ/表土           | 土師質       | 円筒埴輪     | 突部部     | (安藤謙)ヨコナダ、タテハケ    | タテナダ、指標E      | 円形透かし有り。                 |
| 13 | 2トレンチ/表土           | 土師質       | 円筒埴輪     | 突部部     | (安藤謙)ヨコナダ、タテハケ    | 指標E           | 円形透かし有り。                 |
| 14 | 頂部斜面の北側)付近         | —         | 宝鏡印跡     | 相輪      | —                 | —             | 転写泥岩(大霧ヶ製)。              |
| 15 | 2・3トレンチ/1層         | —         | 五輪塔      | 空輪      | —                 | —             | 転写泥岩(大霧ヶ製)。              |
| 16 | 3トレンチ/1層           | —         | 五輪塔      | 空風輪     | —                 | —             | 転写泥岩(大霧ヶ製)。              |
| 17 | 2・3トレンチ/1層         | —         | 五輪塔      | 空風輪     | —                 | —             | 転写泥岩(大霧ヶ製)。              |
| 18 | 2・3トレンチ/1層         | —         | 五輪塔      | 空風輪     | —                 | —             | 転写泥岩(大霧ヶ製)。              |
| 19 | 2・3トレンチ/1層         | —         | 五輪塔      | 六輪      | —                 | —             | 転写泥岩(大霧ヶ製)。              |
| 20 | 表探                 | —         | 五輪塔      | 地輪      | —                 | —             | 転写泥岩(分合型)。               |
| 21 | 4トレンチ集石場           | 土師質土器     | 筒状土器     | —       | ナダ、タテハケ、指標E       | ヨコナダ、指標E      | 籠織形容ではなく、重みの目立つ丸い形。底部有り。 |
| 22 | 4トレンチ/1層(集石場上部)    | 土師質土器     | 筒状土器蓋    | —       | ナダ、指標E            | ナダ、指標E        | 手捏ねによる粗い作り。              |
| 23 | 4トレンチ/内蔵骨器内部底      | 土師質土器     | 小豆       | —       | ヨコナダ、底部へア切り       | ヨコナダ          | —                        |
| 24 | 4トレンチ/2層(骨片出土位置)   | 土師質土器また甕? | 甕?       | 口縁部     | ヨコナダ              | ナダ            | —                        |
| 25 | 4トレンチ/(集石場跡付近)     | 土師質土器     | 甕        | 口縁部     | ヨコナダ、指標E          | ナダ            | —                        |
| 26 | 4トレンチ/(集石場跡付近)     | 土師質土器     | 便?       | 体部      | タタキ               | —             | —                        |
| 27 | 4トレンチ/2層           | 陶器        | 林?       | 口縁部     | ヨコナダ、施釉/凹輪有り      | ナダ、施釉         | —                        |
| 28 | 4トレンチ/1層           | 陶器        | 網?       | 刃部      | —                 | —             | —                        |
| 29 | 5トレンチ/4層           | 土師質土器     | 鍋        | 口縁部     | ナダ                | ヨコナダ          | —                        |
| 30 | 5トレンチ/4層           | 土師質土器     | 鍋        | 口縁部     | ナダ                | ヨコナダ          | —                        |
| 31 | 5トレンチ/4層           | 土師質土器     | 釜        | 口縁部から脚部 | ナダ                | ナダ            | —                        |
| 32 | 5トレンチ/4層           | 土師質土器     | 釜?       | 口縁部から脚部 | ヨコナダ、指標E          | ヨコナダ、タテハケ、指標E | —                        |
| 33 | 5トレンチ/4層           | 土師質土器     | 釜        | 口縁部から脚部 | ナダ、指標E            | ナダ、指標E/爪痕有り   | —                        |
| 34 | 5トレンチ/4層           | 土師質土器     | 釜?       | 口縁部から脚部 | ヨコナダ、指標E/爪痕有り     | ヨコハケ、指標E/爪痕有り | —                        |
| 35 | 5トレンチ/4層           | 土師質土器     | 釜?       | 口縁部から脚部 | ヨコナダ、指標E          | ナダ            | —                        |
| 36 | 5トレンチ/4層           | 土師質土器     | 釜?       | 脚部凹窓部   | タテナダ              | (解説)ヨコハケ      | —                        |
| 37 | 5トレンチ/4層           | 陶器        | 杯身       | 口縁部     | 凹輪ナダ              | 凹輪ナダ          | —                        |
| 38 | 5トレンチ/(土留め嵌石積み)    | 陶器        | 高杯       | 口縁部     | 凹輪ナダ              | 凹輪ナダ          | —                        |
| 39 | 5トレンチ/(土留め嵌石積み)    | 土師質土器     | 釜?       | 口縁部から脚部 | 凹輪ナダ              | ナダ、指標E        | 三方向長方形透かし有り。             |
| 40 | 5トレンチ/(土留め嵌石積み)    | 土師質土器     | 釜?       | 口縁部から脚部 | ナダ                | ナダ            | —                        |
| 41 | 5トレンチ/(土留め嵌石積み)    | 土師質土器     | 釜?       | 口縁部から脚部 | ヨコナダ、ヨコタテハケ       | ヨコハケ          | —                        |
| 42 | 5トレンチ/(底座状石積み前面の裏) | 土師質土器     | 釜?       | 口縁部から脚部 | ヨコナダ              | ナダ            | —                        |
| 43 | 5トレンチ/(底座状石積み前面の裏) | 土師質土器     | 足柄       | 脚部      | タテナダ、指標E          | —             | —                        |
| 44 | 5トレンチ/(底座状石積み前面の裏) | 陶器        | 高杯       | 口縁部     | ヨコナダ              | ヨコナダ          | 透かし有り。                   |
| 45 | 5トレンチ/4・6・7段のうち    | 土師質       | 円筒埴輪     | 突部部     | (安藤謙)ヨコナダ、タテハケ    | タテナダ          | 円形透かし有り。                 |
| 46 | 5トレンチ/(土留め嵌石積み)    | 陶器        | 円筒埴輪     | 突部部     | (安藤謙)ヨコナダ、タテハケ    | ナダ、指標E        | —                        |
| 47 | 5トレンチ/(底座状石積み前面の裏) | 土師質       | 円筒埴輪     | 底部      | タテハケ              | タテナダ          | —                        |
| 48 | 5トレンチ/(土留め嵌石積み)    | 石造物       | 五輪塔      | 空風輪     | —                 | —             | 花崗岩(六甲)製。                |
| 49 | 5トレンチ/(土留め嵌石積み)    | 石造物       | 五輪塔      | 空風輪     | —                 | —             | 花崗岩(八甲)製。                |
| 50 | 5トレンチ/(土留め嵌石積み)    | 石造物       | 五輪塔      | 地輪      | —                 | —             | 転写泥岩(大霧ヶ製)。穴を穿つ透の工具痕有り。  |
| 51 | 5トレンチ/(土留め嵌石積み)    | 石造物       | 五輪塔      | 地輪      | —                 | —             | 転写泥岩(分合型)。               |

## 第2節 調査の経過

### 発掘作業の経過

発掘作業は平成25年6月3日～6月13日の日程で実施した。

＜調査区の設定＞6月3日（第1図）

工事により削除される遺跡北面の約30mを調査範囲とした。

＜掘削／記録＞6月3日～6月13日

掘削は人力により実施した。まず、表土を掘削して近世の「土留め状石積み」を検出し、記録（写真・平面図）を作成した。次に、「土留め状石積み」を除去し中世の「基礎状石積み」及び盛土を検出するとともに、「集石墓」を検出し、記録（写真・平面図・断面図・立面図）を作成行った。中世の遺構は堅くしまった粘土層上面に形成されていたことから、これらを完全に除去し、完掘状況の記録（写真・平面図・断面図）を作成した。最後に、上記の粘土層の性格を判断するため、ミニエンボによる断面割り調査を行い、必要な記録（写真、調査区縦断面図）を作成し、調査を完了した。なお、主要な遺構の平面図は手測りにより行い、調査地に近在する基準点を用いて国土地標にはめ込む方法をとった。また、断面図・立面図等作成時に必要な標高も上記基準点の標高をもとに算出した。

### 整理作業の経過

整理作業は平成26年度に実施した。

具体的には、平成26年4～6月に出土遺物の実測作業および拓本作業を行い、その後、遺物実測図のアナログトレース及び遺構図のデジタルトレースを実施した。平成26年8月から報告書原稿執筆を本格的に開始するとともに編集作業を実施した。

第3表 整理作業工程表

|          | 平成26年4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 | 4月 |
|----------|---------|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|----|----|----|----|
| 遺物実測     |         |    |    |    |    |    |     |     |     |    |    |    |    |
| 拓本作業     |         |    |    |    |    |    |     |     |     |    |    |    |    |
| アナログトレース |         |    |    |    |    |    |     |     |     |    |    |    |    |
| デジタルトレース |         |    |    |    |    |    |     |     |     |    |    |    |    |
| レイアウト    |         |    |    |    |    |    |     |     |     |    |    |    |    |
| 遺構取扱     |         |    |    |    |    |    |     |     |     |    |    |    |    |
| 出発・搬出    |         |    |    |    |    |    |     |     |     |    |    |    |    |

### 参考文献

川西宏幸 1978『円筒埴輪総論』『考古学雑誌』第64巻 第2号』

日本考古学会

高松市教育委員会（編）2012『高松市内遺跡発掘調査概報－平成23年度国庫補助事業－』高松市教育委員会

## 第2章 地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

相作馬塚が所在する香川県高松市は四国北東部の瀬戸内海に面した地域に属する。高松市域の大部分を占める平地は高松平野である。香川県内には、山塊に画された小規模な平野が複数存在し、いずれも一様に北方の瀬戸内海へと下る状況を呈する。高松平



写真1 土留め状石積み検出状況（北西から）



写真2 貼石状遺構検出状況(1)（西から）



写真3 貼石状遺構検出状況(2)（北から）



写真4 集石墓検出状況（北西から）



写真5 集石墓筒状土器出土状況（北から）

野も例外ではない。西を五色台・勝賀山、南を阿讚山脈、東を立石山塊により画され北方に開けた状況を呈する。市内を縱断する主要な河川として、平野南部の丘陵地帯・山地帯を源流とする香東川や春日川、本津川等を挙げることが可能である。高松平野は、これらの河川活動により形成された河成堆積平野であると言える。

高松平野の微地形や形成過程については、高橋氏により詳細な分析がなされている（高橋 1992）。高松平野は、大局的には周縁部から山地帯・丘陵地帯・平野域の順に地形を分類することが可能であるとされる。ただし、平野中央部や北端の海岸部付近にも独立丘陵が複数みられる（石清尾山塊、星島、由良山等）。さらに、詳細に見ると、山地・丘陵地縁辺部に更新世の河床低下により形成された段丘面がみられ、さらに海浜部に向かって、沖積面（扇状地帯・自然堤防帶・三角州帯）が広がる。なお、沖積平野では通常、山地・丘陵地から沖積面へと移行する部分に扇状地帯が、海浜部近くに三角州帯が形成され、扇状地帯・三角州帯の中間に自然堤防帶が形成される。しかし

ながら、高松平野をはじめとする瀬戸内地域の多くの平野では、山から海までの距離が短く、河川規模が小さいため、扇状地帯の上に自然堤防帶が重複する現象がみられると指摘されている。

完新世以降の地形面である沖積面についてみると、その変遷の歴史は平準化の過程として読み取ることができよう。沖積面は当初、上記の主要な河川の本流から細かく枝分かれした複数の自然流路や旧河道、それらの埋没が進んだ低地帯、自然堤防をはじめとする微高地等の存在により、比較的起伏に富んだ地形面を呈していたことが、微地形分析や既往発掘調査の成果等から判明している。これらの起伏は、河川の冲積作用により徐々に埋没・平準化したが、時代が下るにつれて、人間の生活活動に伴う開墾や開削により、一層加速化されたと考えられる。そして、このような地形環境の変化が、そこに住む人々の土地利用形態にダイレクトに反映されたと考えられる。

#### 参考文献

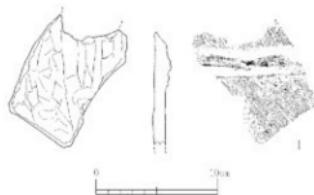
高橋一学 1992「高松平野の地形環境—弘福寺領山田郡田団比定地付近の微地形環境を中心に—」『讃岐国弘福寺領の調査—弘福寺領讃岐国山田郡田団調査報告書一』高松市教育委員会

日下雅義 1998『日本を知る 平野は語る』大巧社

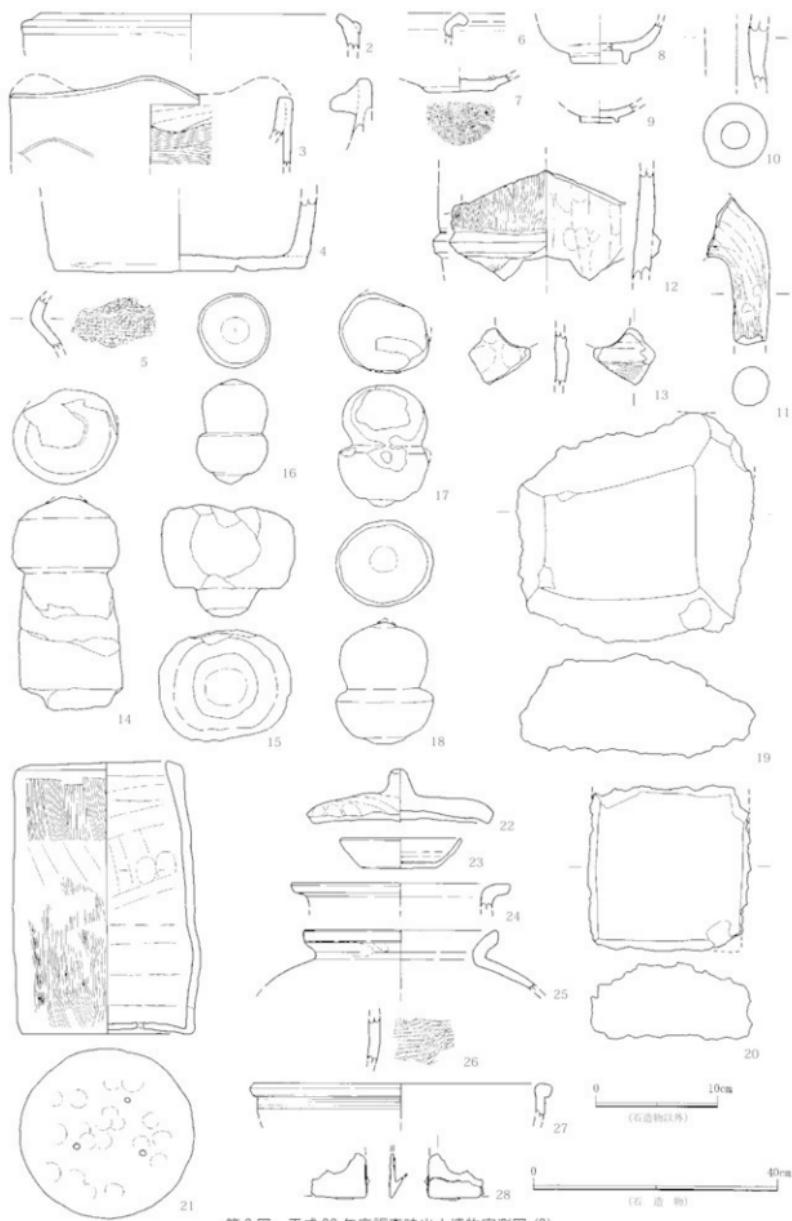
## 第2節 歴史的環境

### <原始>

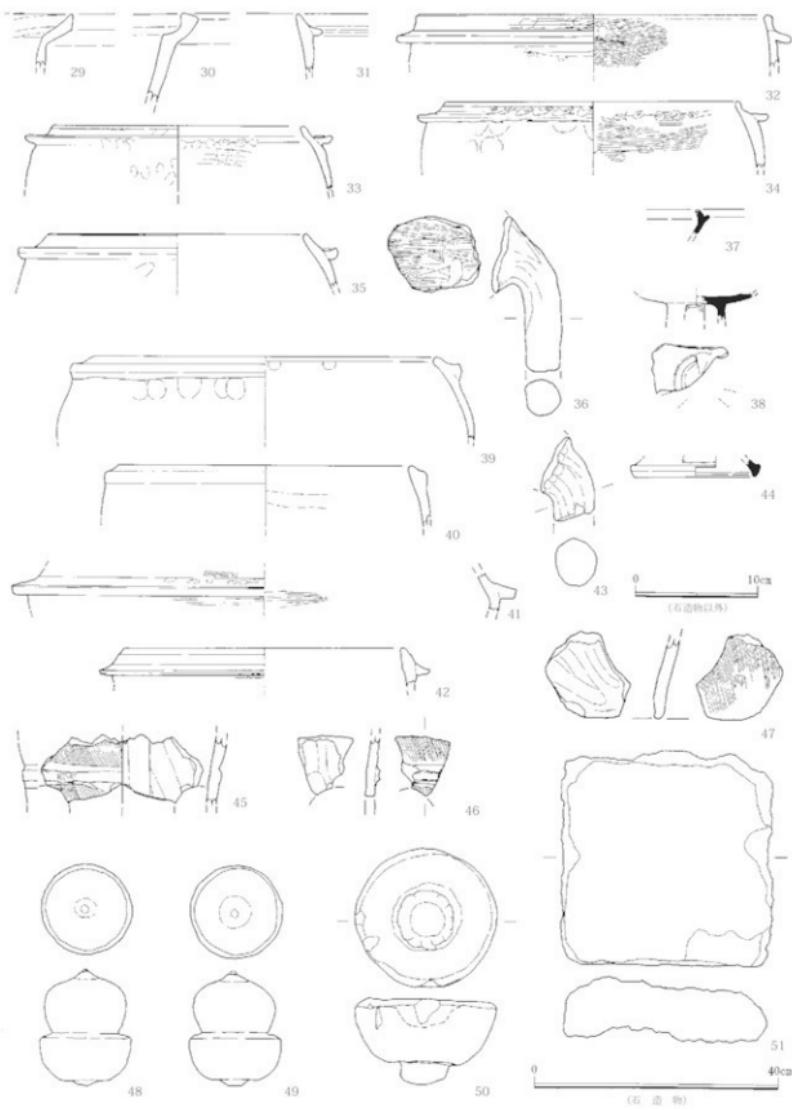
高松平野における人間活動の痕跡は、後期旧石器時代までさかのぼる。主に、高松平野周縁の丘陵据部付近を中心に、繩文時代以降のベース土である黄褐色系粘土層中等から、旧石器時代の遺物が出土している。本津川流域では、香西南西打遺跡において西に位置する勝賀山から東へ伸びる尾根先端付近の微高地上で、部分的に当該期の文化層が確認されている。土層観察及び火山灰分析の結果から、AT火山灰層下後の文化層であるとされている。六ツ目山北麓の低丘陵上に位置する中間西井坪遺跡では複数の石器ブ



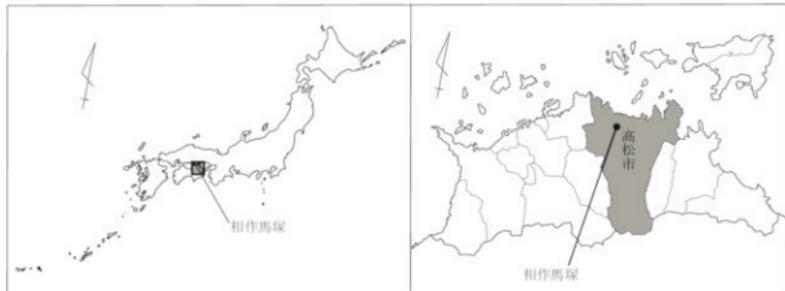
第2図 平成23年度調査時出土遺物実測図(1)



第3図 平成23年度調査時出土遺物実測図(2)

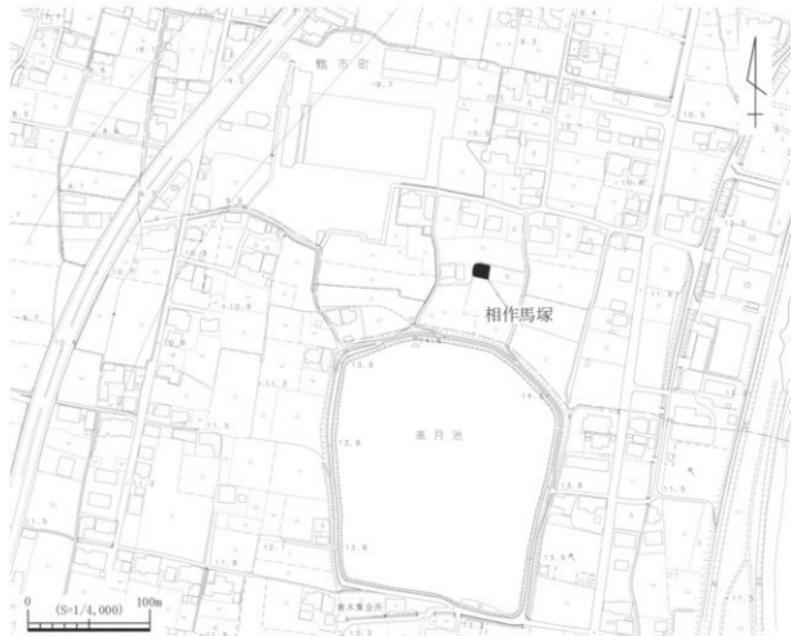


第4図 平成23年度調査時出土遺物実測図(3)



第5図 調査地位置図(1)

幸左園アミ部を右に拡大

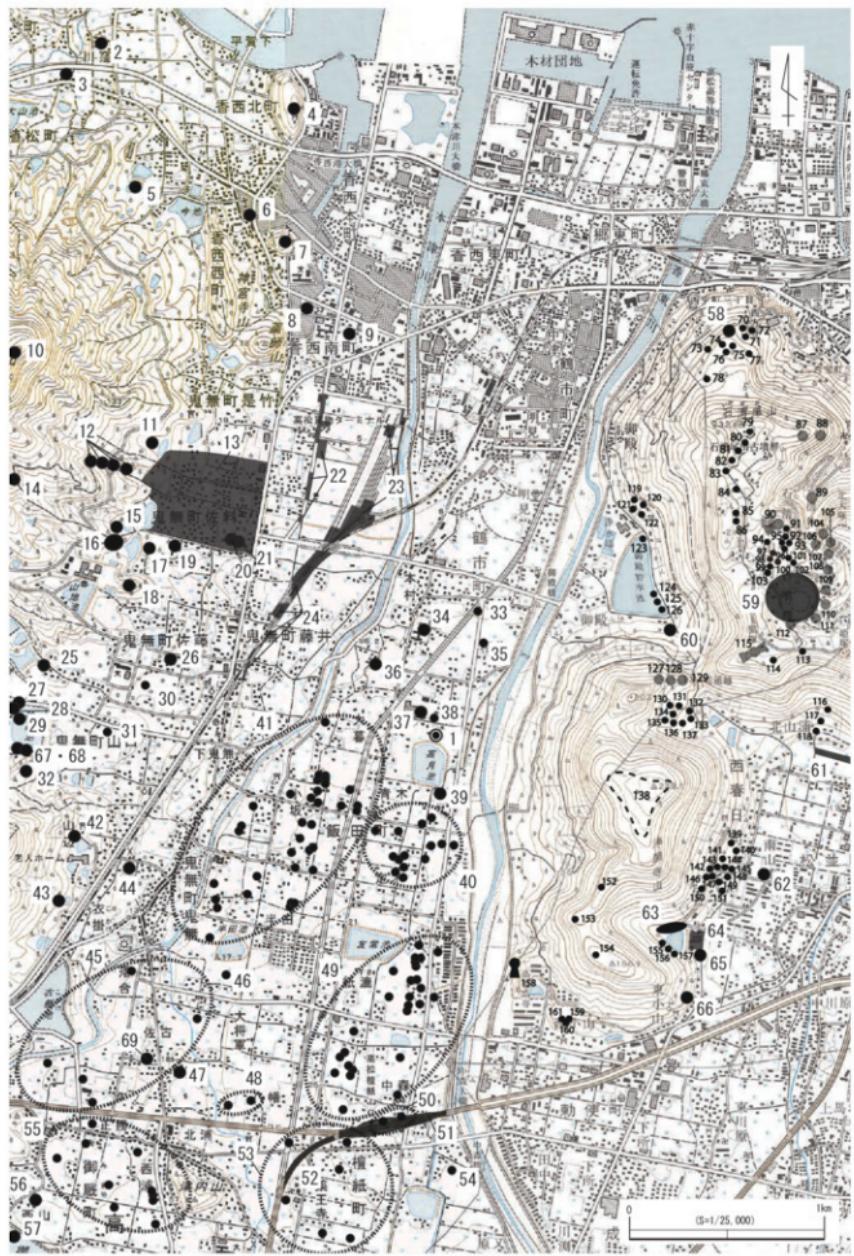


第6図 調査地位置図(2)

ロックが確認された。使用石材の多くは、近接する五色台・金山・城山等で採取されるサヌカイトであるが、ごく少量、二上山産及び冠山産が含まれるとされる。また、チャート（四国南部産又は中国地方産）製及び頁岩（愛媛県西南部又は東部産）製の石器、流紋岩製、ハリ質安山岩製の石器も少量みられる。

縄文時代には、未だ沖積面の平準化は進んでおらず、自然流路や低地帯、自然堤防等の存在によりかな

り起伏のある地形面を呈していたと考えられる。そのような土地において、縄文時代後期～晩期を中心とする遺物が扇状地帯又は自然堤防帶の微高地上や旧河道埋土から出土している。このうち、林・坊城遺跡では縄文時代晩期の土器とともに、木製農具が複数出土している。高松市内において、当該期の水田構造の確実な事例は未だ認められていないが、初期的な灌溉水田型稲作の存在を示唆する遺物として



第7図 周辺遺跡地図(S=1/25,000)

1 相作馬塚 2 植松城跡(1) 3 植松城跡(2) 4 芝山城跡 5 勝賀廃寺 6 平賀下遺跡 7 藤尾城跡 8 作山城跡 9 香西南西打遺跡(1) 10 勝賀城跡 11 沢池西古墳 12 かしが谷1～4号塚 13 佐料遺跡 14 山の神1号塚 15 虎池西古墳 16 善師垣古墳群 17 木舟池下古墳 18 今岡古墳 19 香西五郎塚 20 佐料城跡 21 植松吉兵衛時蔵碑 22 香西南西打遺跡(2) 23 西打遺跡 24 鬼無藤井遺跡 25 鬼無大塚古墳 26 佐藤城跡 27 神高池西古墳 28 め塚古墳 29 神高池北西古墳 30 鬼無小学校東塚 31 (塚) 32 山口遺跡 33 あきやま塚 34 筑城城跡 35 中所地神社前塚 36 王墓古墳 37 相作牛塚古墳 38 (塚) 39 版田町東青木遺跡 40 青木1～14号塚 41 飯田西1～4・7～37号塚 42 桃太郎神社西遺跡 43 袋山古墳跡 44 鬼塚古墳 45 御眠1～5号塚 46 半田池南小塚 47 御眠大塚 48 大將軍1・2号塚 49 紙漉1～26号塚 50 中森1・2号塚 51 中森遺跡 52 八幡遺跡 53 檻紙南部1～5・7・12号塚 54 成合1号塚 55 御眠南部1～10号塚 56 御眠天神社古墳 57 御眠池古墳 58 下ノ山遺跡 59 摺鉢谷遺跡 60 御殿貯水池南遺跡 61 北山浦遺跡 62 南山浦遺跡 63 片山池窓跡群 64 坂田廃寺・坂田廃寺下層遺跡 65 坂田廃寺南窓跡 66 小山窓跡 67 神高池南西1号塚 68 神高池南西2号塚 69 小比賣家住宅

#### 【石清尾山塊所在の古墳】

70 西方寺4号塚 71 西方寺5号塚 72 西方寺6号塚 73 木里神社2号塚 74 木里神社3号塚 75 木里神社5号塚 76 木里神社4号塚 77 木里神社6号塚 78 木里神社1号塚 79 石清尾山13号塚 80 石清尾山17号塚 81 石清尾山18号塚 82 石清尾山12号塚 83 石清尾山11号塚 84 石清尾山19号塚 85 石清尾山20号塚 86 石清尾山10号塚 87 石清尾山14号塚 88 石清尾山15号塚 89 石清尾山23号塚 90 石清尾山9号塚 91 摺鉢谷西斜面5号塚 92 石清尾山7号塚 93 石清尾山8号塚 94 摺鉢谷西斜面4号塚 95 石清尾山21号塚 96 石清尾山6号塚 97 摺鉢谷西斜面3号塚 98 摺鉢谷西斜面1号塚 99 石清尾山3号塚 100 摺鉢谷西斜面2号塚 101 石清尾山5号塚 102 石清尾山4号塚 103 石清尾山2号塚 104 摺鉢谷東斜面1号塚 105 摺鉢谷東斜面2号塚 106 摺鉢谷東斜面3号塚 107 摺鉢谷東斜面5号塚 108 摺鉢谷東斜面7号塚 109 摺鉢谷東斜面10号塚 110 摺鉢谷東斜面12号塚 111 摺鉢谷東斜面13号塚 112 摺鉢谷東斜面15号塚 113 石清尾山1号塚 114 石清尾山22号塚 115 猫塚古墳 116 北山浦3号塚 117 北山浦1号塚 118 北山浦2号塚 119 御殿神社2号塚 120 御殿神社3号塚 121 御殿神社1号塚 122 御殿神社4号塚 123 御殿貯水池4号塚 124 御殿貯水池1号塚 125 御殿貯水池2号塚 126 御殿貯水池3号塚 127 野山10号塚 128 野山11号塚 129 野山3号塚 130 野山9号塚 131 野山1号塚 132 野山5号塚 133 野山6号塚 134 野山2号塚 135 野山8号塚 136 野山4号塚 137 野山7号塚 138 淨願寺山古墳群 139 南山浦12号塚 140 南山浦13号塚 141 南山浦11号塚 142 南山浦6号塚 143 南山浦9号塚 144 南山浦10号塚 145 南山浦8号塚 146 南山浦4号塚 147 南山浦5号塚 148 南山浦7号塚 149 南山浦3号塚 150 南山浦2号塚 151 南山浦1号塚 152 淨願寺山56号塚 153 淨願寺山57号塚 154 小山山頂古墳 155 片山池1号塚 156 片山池2号塚 157 片山池3号塚 158 め塚古墳 159 め塚2号塚 160 め塚3号塚 161 め塚4号塚

石清尾山塊所在の古墳地図表記



位置付けられる。相作馬塚周辺部では、香西・鬼無地域において当該期の遺構・遺物が確認されている。これらの地域では当時、西方の勝賀山から本津川へとつながる複数の低地帯が存在したことが判明しているが、これらに挟まれた微高地毎に当該期の居住域が形成されていた可能性が考えられる。

弥生時代には、低地や旧河道等凹地の平準化が比較的進行し、当該期に最終埋没段階を迎えるものも市内では数多くみられる。しかしながら、未だ起伏に富んだ地形面を呈していたと考えられる。

弥生時代の居住域については、調査事例が多く時期的傾向が読み取れる。弥生時代前期～中期前葉には、扇状地帯から自然堤防帶にかけての微高地上や丘陵谷部等において居住域が形成される。当該期には、鬼無藤井遺跡や天満・宮西遺跡において環濠集落の可能性が想定可能な円弧状に巡る溝に囲まれた居住域が確認されている。扇状地帯から自然堤防帶については、低地に挟まれた微高地毎に周囲の低地から取水するための基幹的な水路が開削され、そこから支水路を通して配水する仕組みが整っていたと考えられ、集落が微高地単位で形成されていた可能性が指摘されている（大久保 1995）。また、このような形態が弥生時代を通して一般化していたと考えられる。また、高松平野における弥生時代の確実な水田遺構は、前期後葉のものが最も古く、地形の制約を受けた不定形な水田区画がほぼ埋没を遂した谷や旧河道、後背湿地に形成されていたことが判明している。ただし、前述のように灌漑水田型稻作に伴う木製品そのものは縄文時代晚期から事例があることから、弥生時代前期前葉までさかのぼる水田が存在した可能性は極めて高い。

中期後葉～後期前葉には、平野周縁部又は平野中央部に散在する丘陵頂部や斜面部、谷部等に居住域が集中する。屋島山頂部、峰山山頂部の摺鉢谷遺跡、久米山山頂部の久米池南遺跡等が典型例として挙げられる。これらは、いわゆる「高地性集落」との関連が指摘されるが、集落の占地理由、社会背景等について慎重な検討を要する。

後期中葉以降、山上の集落は激減し、再び平地部の集落が増加するとともに、香東川及び春日川の中・上流域等においても集落が形成される。また、高松城跡では、平野北端部の砂州上において後期後葉の建物群が確認されるとともに、周辺部でも当該期の遺物が多数出土していることから、この時期には比較的海岸線に近接したエリアにまで居住域が拡大し

た可能性を指摘することが可能である。

弥生時代の墓域については、中期末～後期初頭には林・坊城遺跡や太田原高州遺跡において周溝を伴う墳丘墓が確認されている。後期には、居住域に近接して土器棺墓群が形成される事例が多くみられるとともに、後期末には空港跡地遺跡で方形又は前方後方形を呈する周溝を伴う墳丘墓が確認されている。

高松平野における古墳時代の集落域の調査事例は弥生時代と比較して少数であるが、近年調査事例が蓄積されつつある。古墳時代前期初頭の居住域は、平野中央部の空港跡地遺跡周辺等、弥生時代後期末葉の居住域が引き続き、利用される場合が多くみられる。中期以降の居住域は平野中央部等で断片的に確認されたが、平野中央部から南部を中心に、近年事例が増加傾向にある。中でも、萩前・一本木遺跡では中期後葉～後期後葉にかけての堅穴建物、掘立柱建物等が累積的に形成され続けた状況が確認されている。特に、堅穴建物は90棟近く確認されており、いずれも造り付け竈を有する。また、最大幅約2.0m、深さ1.4～1.7mの断面V字状を呈する大溝が確認されている。調査区内で90°に屈曲し、方形に区画する意図を持って掘削された溝であると推測できるとともに、当該溝に囲まれる範囲内では、やや大型の堅穴建物が複数棟確認されている。これらの状況から、いわゆる「豪族居館」の一部である可能性が高い。相作馬塚南方約300mの地点に位置する飯田東青木遺跡では、古墳時代のものと考えられる溝状遺構や柱穴が多数確認されており、詳細な時期は不明ながら、周辺が居住域として利用されていた可能性を指摘可能である。

高松平野においても3世紀中葉前後に、古墳が出現する。高松平野でも古墳築造状況の時期的変遷の概略が把握されつつあり、その在り方により各期の政治秩序の状況が議論されている。前期には、平地部を見下ろす丘陵尾根頂部や尾根先端付近に古墳が築造される。全長40～90m前後の規模を有する前方後円墳（又は双方中円墳）が複数築造されるると同時に、小型の前方後円墳、小型で低平な墳丘をもつ円墳等も多数築造される。後者の事例として、本遺跡の所在する平野西部では、勝賀山東側に延びる尾根上に築かれた、かしが谷古墳群を挙げることができる。ここでは、前期前葉に築かれた4基の円墳が確認されているが、いずれも外護列石と周溝を持つ長径20m程度の低平な墳丘であり、堅穴式石櫛又は箱式石棺を主体部としている。なお、当該期の前方後円墳で

は、①墳丘裾部への在地座壺形埴輪の配置、②埋葬施設の東西主軸配置、③円丘部頂部平坦面への円礎の敷詰め等の特徴がみられ、高松平野にとどまらず、四国北東部を中心とする広い範囲で共有されている。中でも際立った特徴として、峰山・稻荷山の尾根頂部等では多くの積石塚が築造されており（石清尾山古墳群）、前期を通して全長40mを超える前方後円墳（又は双方中円墳）が築造され続ける。

前期後葉には、古墳全体の築造数が減少し、小型前方後円墳・円墳等はほぼ見られなくなる一方、全長50m以上の前方後円墳の割合が増加する。また、全長50m以上の前方後円墳に限って、国分寺町鷺ノ山産凝灰岩を用いた削抜式割竹形石棺が主体部に採用される。このような現象は、前期前葉の大小様々な古墳が乱立する状態と対比して、「築造系譜が淘汰」されるとともに、各系譜間の格差が拡大した状態であるとの指摘がある（大久保2004）。その延長上の現象として、中期前葉に畿内の特徴をもつ（又は兼ね備えた）大形前方後円墳が数基築造される。平野西部では今岡古墳を事例として挙げることができる。今岡古墳は勝賀山から東へ張り出した尾根頂部に築かれた全長60m程度の前方後円墳であり、墳丘外面は葺石及び円筒埴輪、形象埴輪により装飾されていたと考えられる。また、主体部として、畿内の長持形石棺を模した土師質陶棺が用いられたと考えられており、外堀施設・内部施設とともに畿内の特徴を備えていると言える。なお、今岡古墳で使用された埴輪・陶棺は、当古墳から南へ4kmほど離れた六ツ目山北麓付近に所在する中間・西井坪遺跡で製作されたことが判明している。この段階をもって、中小様々な古墳の築造停止及び前期を通しての墓域であった、石清尾山古墳群における造墓行為も停止する。

中期前葉～後葉には古墳数が激減する。本津川流域では、堂山南東麓の本免寺裏山古墳群や六ツ目山北麓の中間西井坪遺跡で複数基の円墳又は前方後円墳が築造される。また、伽藍山東麓付近で全長約38mの帆立貝式古墳である御殿天神社古墳が築造されるとともに、石清尾山塊南端の丘陵上に全長25m程の帆立貝式古墳であるがめ塚古墳が築造される。

後期前葉～中葉にも引き続き、平地部で複数の古墳が築造されている。本遺跡が所在する香東川と本津川に挟まれた地域においても、弦打王墓古墳や相作牛塚古墳が確認されている。弦打王墓古墳では、円筒埴輪や形象埴輪が採取されている。相作牛塚古墳については、昭和48年に当時の高松市文化財保護

委員会であった小竹氏による調査成果があり、多量の円筒埴輪や形象埴輪（人・家形埴輪等）、須恵器、金銅製馬具（杏葉、鞍金具等）、鉄製品（太刀、鐵等）、挂甲小札が出土している。小竹氏の記録から、直径1m以上の円墳であったと考えられるとともに、円筒埴輪の形態から川西編年V期に属するものであると考えられる。主体部は堅穴式石室である可能性が指摘されている。

後期中葉、MT15型式並行期以降、讃岐地域において一部で横穴式石室が採用されはじめ、後期後葉以降埋葬施設の主体となる。外表の装飾としてみられた埴輪や葺石は横穴式石室導入初期段階に一部みられるが、以降用いられなくなるとともに、周濠等墳丘周縁部の施設も簡略化する。墳丘規模も石室を被覆する程度の最低限の規模となる。外表施設の衰退と軌を一にして前方後円墳の築造も停止する。高松平野においても同様であり丘陵裾部・谷部・頂部を中心に、中小多数の古墳が築造される。TK209型式並行期前後からは、玄室床面積10m<sup>2</sup>前後の規模を有する大形横穴式石室がみられるが、その築造エリアは極めて限定的である。平野西縁部・勝賀山東麓では古宮古墳や山野冢古墳が同一谷筋に相次いで築造されるとともに、隣接する谷筋でも平木1号墳・鬼無大塚古墳が築造される。平野東縁部では久本古墳・山下古墳・小山古墳が比較的近接して築かれる。後期後葉には、墳丘外見よりもむしろ、内面・すなわち埋葬儀礼の充実化・莊厳化により社会的帰属関係や社会的地位を表現する手法に移行したと考えられる。また、大形横穴式石室を持つ古墳の分布の在り方から、この時期に再度高松平野内の政治秩序が再構築された可能性が指摘されている。

#### ＜古代＞

6世紀中葉～後葉に仏教が伝来し、7世紀初頭前後から畿内を中心に仏教寺院が建立され始めた。相作馬塚が位置する当時の香川郡においても海岸線付近に勝賀庵寺・石清尾山南麓に坂田庵寺・平野中央部付近に百相庵寺といった寺院跡がみられる。

弥生時代前後まで残存した旧河道や低地部、後背湿地の多くは、古代には平準化を達し、一定の土地区画の規則に基づいて、掘立柱建物群や水田、道路等が整備されたことが判明している。古代の土地区画は、一定の方位性と規格性をもつ条里地割としてまとめられる。「条里制」が施行された7～8世紀は、天皇により制定された諸法令や制度、行政区画の設

定等を基軸として政権運営及び地方支配が実施された段階に対応し、「条里制」も当初は上記のような統治体系の在り方の中から制度化された国家的事業であったと考えられている。高松平野においても未だ残存する平野部の旧河道、後背湿地等を避けるように、遅くとも7世紀後葉には条里地割が施工されたことが、平野西端部の香西南西打遺跡や平野中央部の松綱下所遺跡の事例から推測可能である。香西南西打遺跡では、坪界線に合致する溝状造構が検出されている。本遺構からは10～11世紀の遺物を中心に、底部からは7世紀後半～8世紀前半とみられる遺物も出土している。また、当該溝と並行して（一部重複するように）、10～11世紀以降の溝状造構が検出されており、長期間にわたる維持管理が想定できる。また、当該地の地山層である黄褐色粘土を採掘した痕跡である粘土探査土坑が多量にみられる。いずれも不定形な平面形を呈し、埋土り現存状況の良好な土師質大形甕や羽釜等の煮沸用土器が複数個体分出土している。胎土分析の結果や出土状況から、当該地周辺で平安時代後半に土師質の煮沸用土器を作製していた可能性が高いとされる。高松平野では、新田町付近の一部を除くほぼ全域で正方位から10°前後東へ傾いた方向で条里地割が設定されており、建物配置や土地面積は少なからず条里地割りの制約を受けることとなる。ただし、未だ理沒途上の旧河道等凹地部付近では、地形に制約されて条里地割の方向性から逸脱した土地区画が局所的にみられる場合があり、平野中央部の空港跡地遺跡や林宗高遺跡等で確認されている。

本遺跡周辺では、前述の香西南西打遺跡の他に、西打遺跡でも10～12世紀に属する「屋敷地」が確認されている。また、平成25年度に実施した工事立会により中世城館である筑城城跡下層から7～8世紀の柱穴や溝が見つかっており、本津川下流域两岸に当該期の集落城が広がっていた可能性が考えられる。

#### ＜中世＞

中世には、古代に整備された条里地割がほぼ踏襲されるとともに、地形の平準化や土地利用範囲の拡大に伴い平野の広い範囲に条里地割が拡充される。また、平野各所に端的な土地区画の明示を図る「屋敷地」が相次いで形成される。本遺跡が所在する平野西端部においても、西打遺跡・香西南西打遺跡において13～16世紀にかけての「屋敷地」が確認されている。なお、西打遺跡・香西南西打遺跡では、古代末にも同

様の「屋敷地」が形成されている。これらは、1/4坪(50～60m四方)の規模を有する平面方形を呈し、坪界に「屋敷地」の二辻を合致させている。四周は幅2～3mの溝に囲まれ、当該溝の内側には幅1m前後の溝が一定の空白地帯を保ちながら平行して掘削されており、溝間の空白地に壠等の構造物が設けられていた可能性が考えられる。「屋敷地」内は小規模な溝で区画され、建物等が配置されている。

平野西端部の本津川流域は香西氏の本拠地であり、標高360m程の勝賀山山頂部に勝賀城が築城されるとともに、勝賀山北側から東側に延びる丘陵尾根先端部や点在する独立丘陵上に相次いで香西氏に関連する城館が形成された。藤尾城や作山城、本津城、佐料城、筑城城等がこれにあたる。前述の勝賀城では山頂部や尾根線上に良好な状態で曲輪が残存しており、その構造と立地から戦闘時の詰城であった可能性が考えられる。また、勝賀山東麓に位置する佐料城は四周に幅4m前後の堀を有するいわゆる居城であったことが『南海治乱記』の記載から読み取れる。本津川右岸の印濃原に接する筑城城付近では、発掘調査が実施されており、13～16世紀に属する条里地割に合致する溝跡や井戸跡が確認されている。また、出土遺物には輸入磁器や輸入銅錢、十一面觀音懸持仏が含まれており、出土遺物からは当遺跡のやや特異な性格を推測可能であるとされている。

#### ＜近世＞

戦国時代には三好氏に属し、長宗我部元親による四国統一を機に長宗我部氏に属した香西氏であったが、天正13年(1585)の豊臣秀吉による四国征討を機に滅亡した。その後、天正15年(1587)に豊臣秀吉の家臣であった生駒親正が入封し、翌年の天正16年(1588)から高松城が築城され始めるとともに、城下町も整備された。その後、寛永17年(1640)に生駒家騒動により生駒氏は出羽国矢島に転封となり、代わって寛永19年(1642)に御三家の一つである水戸藩出身の松平頼重が城主となった。松平氏は東ノ丸造成や新たな櫓台の建設等、城の改修を行なうとともに、城下町でも上水道の整備等を行った。

平野西部では寛永14年(1637)に現在の香川町付近で東西二股に分かれていた香東川の流路が、讃岐の治水に大きく貢献した西嶋八兵衛により石清尾山西側の流路に一本化された。また、当該期の集落跡は香西南西打遺跡や西打遺跡、鬼無藤井遺跡において確認されており、溝や掘立柱建物、井戸、耕作地

等が確認されている。なお、溝や建物の方向は条里地割に合致しており、古代以降の土地割りがほぼ踏襲され続けてきたことがわかる。本津川下流域に形成された平地部における近年の確認調査では、近世の耕作土を面的に確認できる事例が多くみられることから、当該地帯に農村地帯が広がっていた可能性が考えられる。

#### ＜鶴市・飯田・檀紙地域の塚群について＞

本津川と香東川に挟まれた鶴市町、飯田町、檀紙町周辺部では、農地内に多数の塚が残されている。径1m程度の小規模なものから、全長10～20mの比較的大形のものまでみられる。また、外見上、盛土で構築されているとみられるものと、礫の集積により構築されているものに分かれる。

文化庁は、昭和35年～37年にかけて全国的な遺跡分布調査を実施し、全国遺跡図が作成された。その後、香川県教育委員会は昭和47年度にも詳細な分布調査を実施し、その成果が昭和52年に刊行された『全国遺跡図 県37香川県』に記されている。相馬塚をはじめとする鶴市町、飯田町、檀紙町でみられる塚群は、前述の遺跡図に既に記載されており、昭和30～40年代に実施されたこれらの分布調査により把握されたものであると考えられる。

これらの塚群については、中世～近世の土器片や埴輪片が出土する場合が見られるが、遺跡であるか否かの判断も含めて性格が判然としないものがほとんどである。県内他地域の事例では、下位に中・近世の墓壙が存在し明らかに墓であると言える場合や、銅錢・土師質杯等が多数出土し地鎮遺構の名残であると推測できる事例、古墳の名残であると考えられる事例が見られる。一方で、旧河道沿いに形成された自然堤防が土地の平準化を免れて痕跡的に残存したとみられる事例や近世以降の単なる集石又は盛土である事例も多數みられる。これらの塚群の性格については、今後の調査の進展を待ち、評価する必要があろう。

#### 参考文献

- 文化庁文化財保護部(編)1977『全国遺跡図 県37香川県』  
高松市教育委員会(編)1986『かしが谷2号墳・3号墳発掘調査報告書—高松市鬼無町は竹所在の円墳の調査一』高松市教育委員会  
大久保徹也 1995「基幹的灌漑水路と灌漑単位」『高松東部道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 上天神遺跡』香川県教育委員会

香川県教育委員会区委員会(編)1996『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第25冊 中間西井坪遺跡I』

香川県教育委員会

高松市教育委員会(編)1999『高松市立弦打公民館改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 筑城城跡』高松市教育委員会

高松市教育委員会(編)2000『高松港頭地区再開発連携事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 香西南西打遺跡』高松市教育委員会

香川県教育委員会(編)2001『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第37冊 中間西井坪遺跡III』香川県教育委員会

大久保徹也 2004『讃岐の古墳時代政治秩序への試論』『古墳時代の政治構造—前方後円墳からのアプローチ』青木書店

大久保徹也 2006『讃岐の前期古墳』『香川考古 第10号特別号』香川考古刊行会

## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査区の設定 / 基本層序

#### 調査区の設定

前述のように、削平が予定されている遺跡北面の約30mを調査区とした。

#### 基本層序

ここでは、本調査時に確認した土層の堆積状況について記述し、平成23年度に実施した確認調査及び工事立会時の所見との対応関係を確認する。なお、平成23年度トレンチ断面図については、市内遺跡発掘調査概報を参照されたい(高松市教育委員会2012)。

土層堆積構造は、概ね5層(I～V層)に分類することが可能である。I層(第14回1層)は腐植土及び近・現代の盛土層であると考えられ、後述するII層及び「土留め状石積み」上面を完全に覆う堆積層である。調査区全域で確認した。平成23年度1Tr表土～1層、2・3Tr表土～3層、5Tr表土～2層、6Tr表土～1層に対応する。I層には古墳時代・中世～現代の遺物が混在している。

II層(第14回3～6層)は近世の盛土層であり後述するIII層及び「基壇状石積み」上面を完全に覆う堆積層である。調査区全域で確認した。平成23年度5Tr3層、6Tr2・3・8層に対応する。II層には、古墳時代・中世～近世の遺物が混在している。なお、平成23年度4Tr2層はIII層に対応するものであると理解していたが、礫を含むとともに「基壇状石積み」上面に堆積したものであることから、II層に対応するものである可能性が高い。また、平成23年度5Tr3層もIII層に対応すると考えていたが、礫を多量に含

むことからⅡ層に対応するものである可能性が高い。さらに、平成23年度6Tr4・5層からは中世の遺物のみが出土することからⅢ層であるとしていたが、今回の調査時に検出した5層に対応する堆積層であると考えられることから、Ⅱ層である可能性が高い。

Ⅲ層（第14図7～12層）は中世の盛土層であり後述するIV層上面に形成された段状のカット面を平準化するように堆積している。平成23年度4Tr3～4層、5Tr4層、6Tr6層に対応する。Ⅲ層には、古墳時代・中世の遺物が混在している。なお、詳細は第2節で記述するが、施工時期を2時期に分けられる可能性がある。

IV層（第14図13層）は中世以降の遺構群のベース層である。平成23年度1Tr3層、2・3Tr4層、4Tr5層、6Tr7層に対応する。遺物は皆無である。地山ブロック等を含む人為的な盛土層であると考えられ、後述するように古墳の墳丘である可能性が考えられる。

V層は地山（第14図15層）である。平成23年度5Tr5層に対応する。なお、V層上面には、黃灰色シルト～粘土層（第14図14層）が一定の層厚で水平に堆積している。

#### 参考文献

高松市教育委員会（編）2012『高松市内遺跡発掘調査概報－平成23年度国庫補助事業－』高松市教育委員会

## 第2節 遺構

本遺跡における平成23・25年度の調査において、「土留め状石積み」「基壇状石積み」「集石墓」を確認しており、他に塚東端部付近の高まり部斜面における「貼石状遺構」及び「貼石状遺構」前面に形成された「テラス面」を確認している。本節では、今回の調査時に検出した「土留め状石積み」「基壇状石積み」「集石墓」及び中・近世の遺構下位で検出した盛土の所見を中心に記載する。また、「貼石状遺構」及び「テラス面」の評価についても平成23年度概報作成時の見解から若干の変更があることから、必要に応じて触れることとする。なお、平成23年度トレンチ断面図については、市内遺跡発掘調査概報を参照されたい（高松市教育委員会2012）。

### ＜古墳時代＞

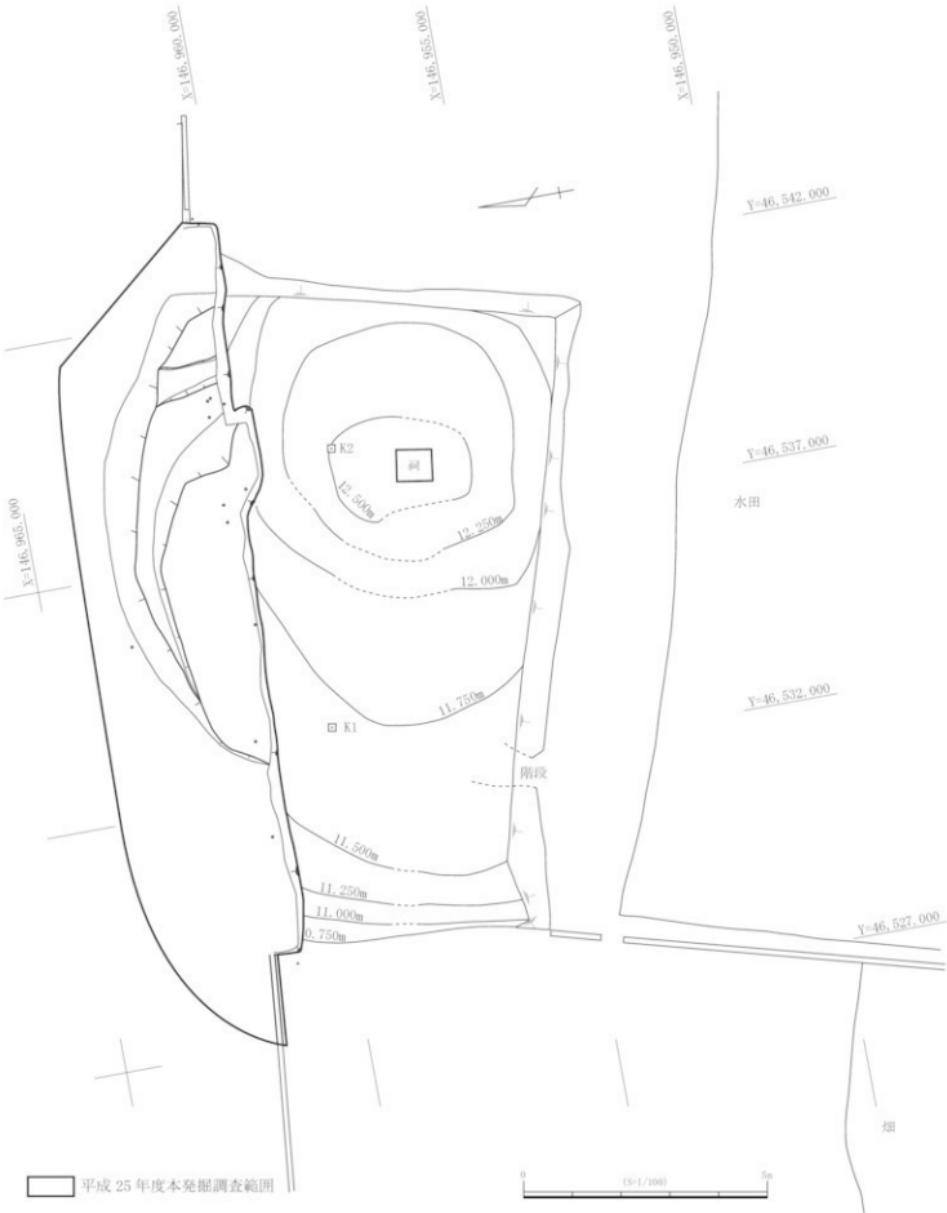
中世以降の遺構ベースとなる土層を確認した（第8図）。調査時には本土層が地山であると考えていたが、調査後の断ち割り時に撮影した写真を再確認した結果、本来の地山である15層や地山上面の水平堆積層

（土壤化層か）である14層をブロック状に含む堆積構造を確認したことから、人為的な盛土層であると判断した。なお、調査時には地山面であると考えていたため、詳細な土層図を作成していないが、調査時の写真をもとに調査区縦断面図に、14層上面及び15層上面のラインを破線で追加している（写真図版2-16～4-22、第14図）。

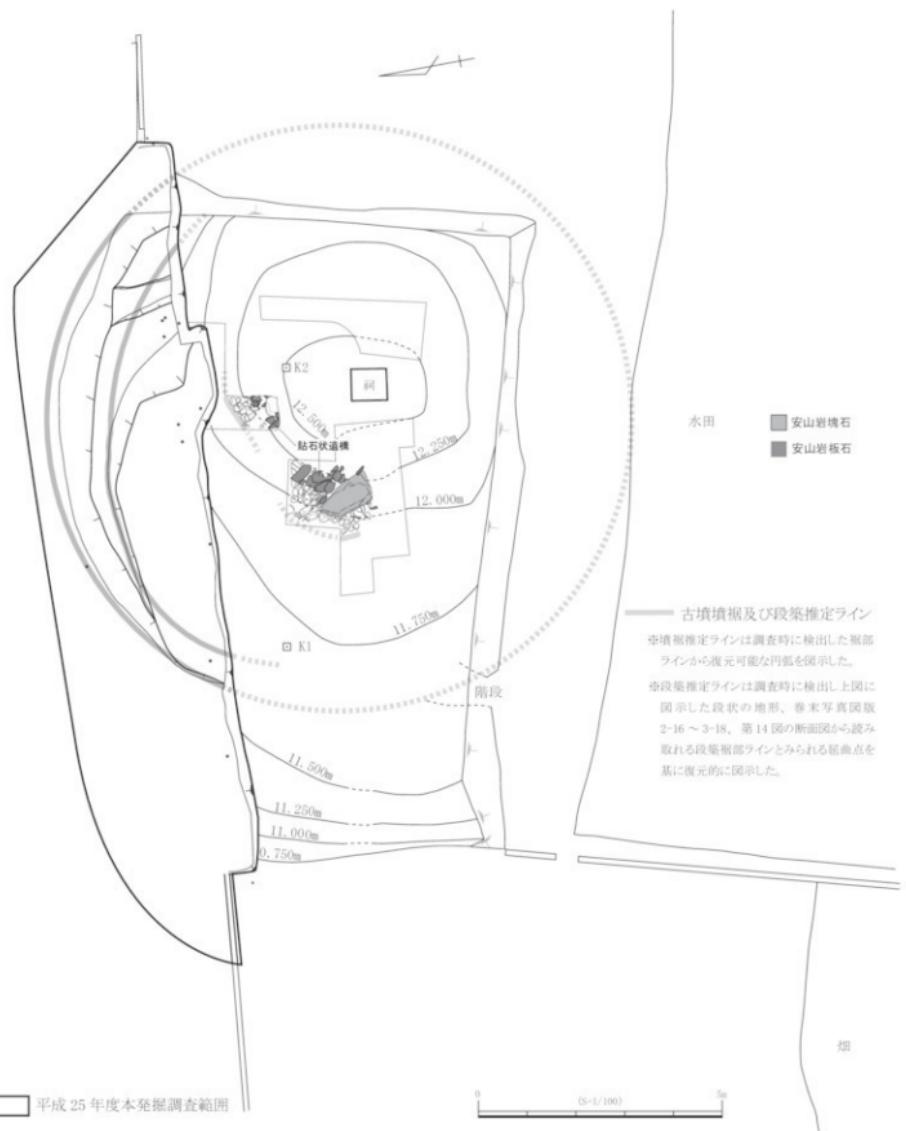
盛土層は下方に径20～30cm程度の地山ブロックを多量に含む盛土がみられ、その上位に黄褐色土と暗褐色土が下位盛土の傾斜に沿って互層状に堆積する状況を呈する（写真図版4-21・22）。このような特徴から、盛土構築技法として版築技法が採用されたと考えられる。さらに踏み込むならば、下位盛土により大まかな輪郭を形成したのち、それを「芯」として版築技法により上位盛土を形成した可能性が考えられる（以下、当該期の盛土を便宜上「版築盛土」と記述する）。

版築盛土層直下、地山直上の水平堆積層は当該地がかつて露出し、生活面となっていたことを示す土壤化層であると考えているが、古墳の墳丘盛土直下でしばしばみられる「黒色帶」である可能性もある。ただし、炭化物等は含まれない（写真図版4-21・22）。地山面は極めて平坦であるが、西端付近でやや下降する（第14図）。東端については、後世の擾乱が著しく、水平面がそのまま連続しているのか、西端付近で見られたように下降するかは判断できない。ここで、版築盛土層下位で確認した地山層と後述する中世盛土層の関係に注目すると、特に遺跡西端部に向かつて地形が傾斜している状況を読み取ることができる。調査区断割り後、遺跡西端付近についてのみ、地山を取り巻くように中世盛土層が残存する状況を確認し、当該部分についても古墳時代～中世の遺物が包含される状況がみられた。よって、当該地周辺は元来、起伏に富んだ地形面を呈していた可能性があり、そのうち相対的に高くなった部分に版築盛土を形成した可能性が考えられる。

版築盛土層は現在の塚最高所付近（現有祠から北西1m地点付近）を中心とする約12m、高さ約0.8mの円形状を呈する（第9図）。現況ではほぼ径12mの正円を描くように版築盛土が残存している点、及び後述する中世の基壇状石積みにより明示された墓域の範囲とも平面プランが異なり、版築盛土の範囲を無視するように石積みが構築されている状況から、少なくとも中世の墓域造成に際して、墓域の平面プランに合わせて大きく削り込むような削平は受けてい



第8図 中世以前遺構配置図(S=1/100)



第9図 古墳墳裾・段築推定ライン(S=1/100)

ないと考えられる。版築盛土中位付近ではテラス状の平坦面が不明瞭ながらわずかに確認でき、2段築成された状況を呈する（第8・9・14図）。当該平坦面は中世以降の変更である可能性も考えられるが、中世盛土が当該段状のカット面を平準化するように形成されていることから、中世盛土形成以前から存在した可能性が考えられる。加えて、版築盛土中央付近はさらに1段高くなっていることから、3段築成であった可能性も想定でき、そのように仮定すると、版築盛土の高さは最大約2.0mとなる。この部分では平成23年度調査時に「貼石状遺構」を確認している（写真2・3、第9図）。当該「貼石状遺構」が版築盛土形成当初から存在したものか、中世以降に形成されたものか否かは未調査であるため判断が困難である。しかしながら、石材は版築盛土に食い込むように設置されるとともに、後述する中世の集石墓形成以前の中世盛土層が当該「貼石状遺構」上面を覆う箇所が部分的にみられたことから（平成23年度調査4トレンチ）、可能性として、当該期の版築盛土に伴う葺石状の外表施設であった可能性を指摘することが可能である。

さて、中世以前の版築盛土の性格であるが、中世盛土下位で確認した点、版築盛土中に遺物が皆無である一方で、版築盛土直上に形成された中世盛土層から古墳時代の須恵器片や比較的多くの円筒埴輪片が出土している点、盛土築造技法として版築技法が採用され比較的丁寧に構築されている点から古墳の墳丘である可能性が極めて高いと言える。このように仮定したとき、墳丘は径12m程度、高さ2.0m以上の規模を有する3段築成の円墳であった可能性が指摘できる。なお、少なくとも版築盛土が北方・東方・西方へ張り出するような状況はみられないことから、円丘部に張り出し部が取り付くいわゆる「帆立貝式古墳」のような墳丘形態を呈する可能性は極めて低いと言えよう。

### ＜中世＞

前述の版築盛土上面に形成され、後述する近世盛土等に全体を覆われる遺構である。ここでは、形成時期の異なる2単位の中世盛土（「中世盛土I・II」）及び「中世盛土I・II」形成時期にそれぞれ対応すると考えられる「集石墓」・「基壇状石積み」について所見を記載する。

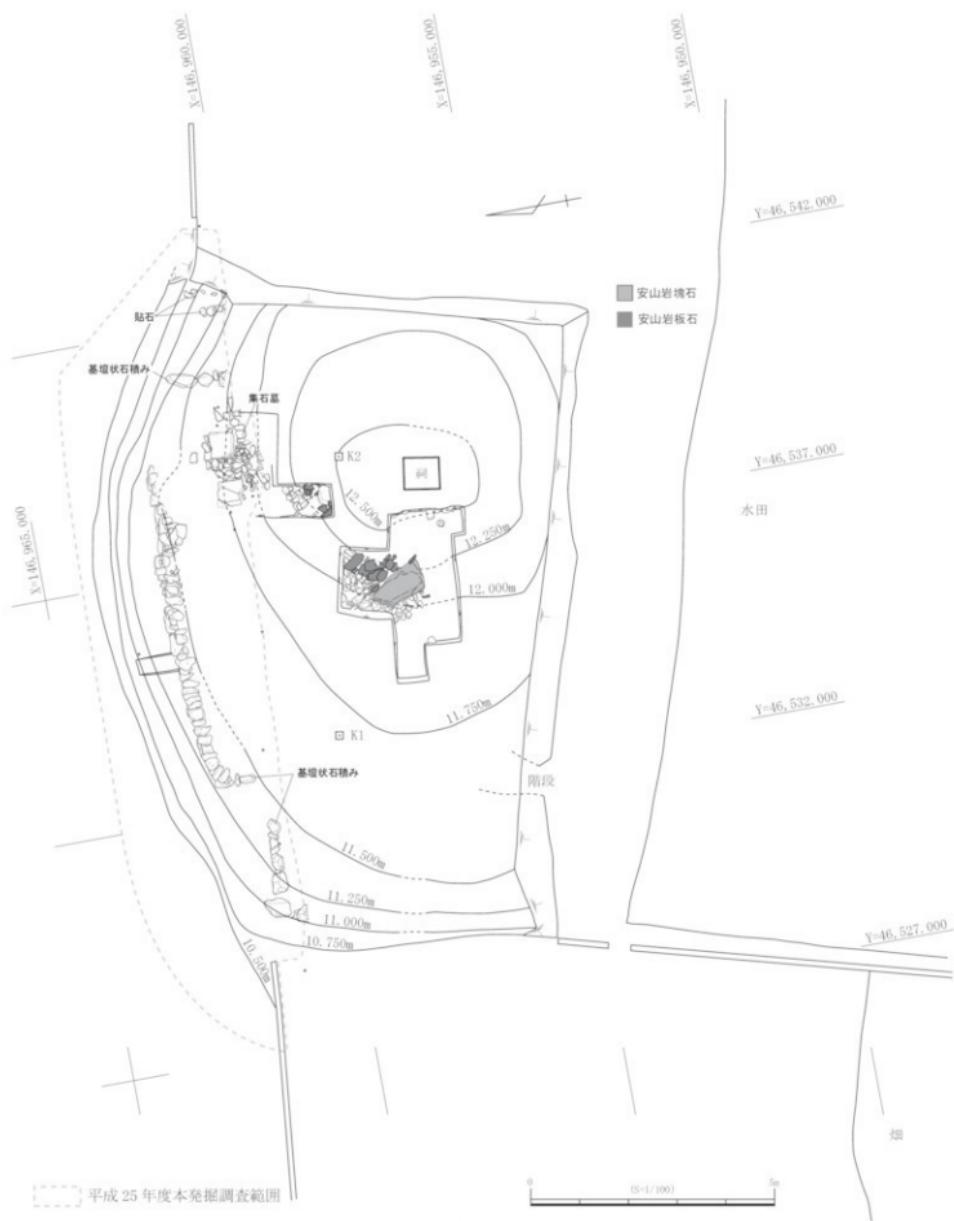
**中世盛土** 古墳の墳丘とみられる版築盛土に形成された段状のカット面を埋めるように中世盛土が施

工されるとともに、版築盛土西側にも中世盛土の範囲が広がる。中世盛土の主体となる土壤は褐色又は黄橙色系シルトで、地山ブロックや炭化物・焼土を部分的に含む比較的均質な土壤を用いて施工されている。上記中世盛土は後述する集石墓を構成する地輪設置後に形成されたものであることが、調査時の所見で判明していることから、集石墓形成後の盛土層であると考える。また、平成23年度調査時には、集石墓形成面となる黄色系の粘性の強いシルト層を確認しており、西端掘部付近のトレンチ（5Tr）においても地山直上で同様の粘性の強い土壤を確認している。よって、集石墓形成以前に施工された中世盛土（中世盛土I）と集石墓形成後に施工された中世盛土（中世盛土II）（第14図7～12層）に分けることが可能である。また、今回の調査時に実施した基壇状石積み部の断ち割りによる断面観察でも施工時期に差を想定可能な2単位の中世盛土がみとめられた（第11図断面1・2層）。詳細は後述するが、出土遺物の点でも後者に新相の遺物が含まれることから、施工時期に一定のずれを想定することは妥当であろう。

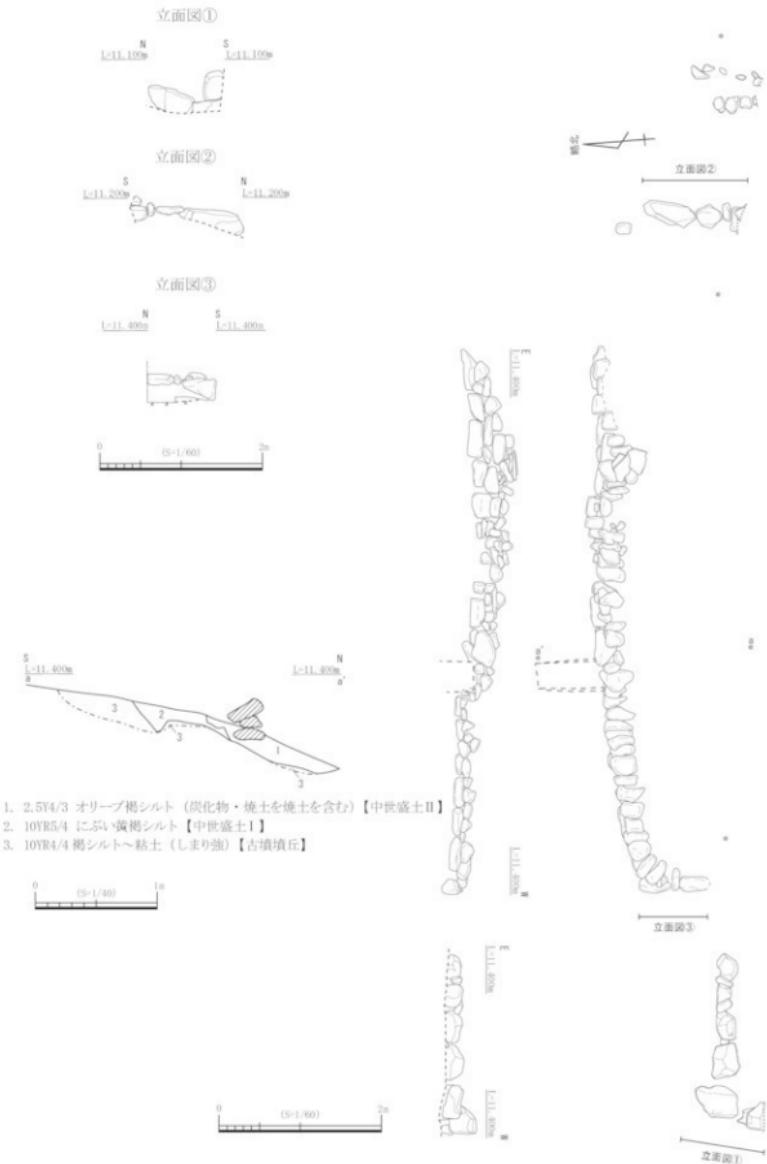
**基壇状石積み** 東西約11mの範囲に形成された石積み遺構である（第10・11図）。石積みの平面形は極めて直線的であり、正方位にはほぼ合致する。調査区内で屈曲点が4か所みとめられることから、調査区中央から東部にかけての北辺約8.5mの空間と西端部の北辺約3mの空間に分けることができる。また、東部と西部において1箇所ずつ石材の欠落する部分がみられ、東部で約1.5m、西部で約0.7mの隙間がみられる。後世の抜き取り等の可能性も想定可能であるが、いずれも石材の抜き取り痕は確認していないことから、当初から石積みが形成されなかつた可能性も想定可能である。東側の欠損部については、後述する「集石墓」付近の屈曲部に位置し、西側の欠損部については、東側区画との境界にあたる屈曲点に位置することから、進入路等の存在を想定可能である。

使用される石材は、長径30～60cm程度の砂岩円礫が主体であり、石垣状に少なくとも2～3段、ほぼ垂直に積み上げていたと考えられる。最下段にやや大振りの長径60cm前後の石材を含む砂岩円礫を横長に据え、上部に長径30cm以下の砂岩円礫を小口積みしている。一部で安山岩板石も混ざる。

元来、中世盛土Iによる傾斜地を呈していた部分に垂直に立ち上がる石積みを形成するため、石垣裏面及び前面にオリーブ褐色シルトの中世盛土IIが施工されている。また、東辺部の石積みについては、ペー



第10図 中世遺構配置図 (S=1/100)



第 11 図 基壇状石積み平面図・立面図・断面図 (S=1/60・1/40)

ス層である版築盛土を幅 0.5 ~ 0.7m の溝状に掘削して石材据え付け用掘方とし、当該掘方内に基底の石材を据え付けた状況が読み取れる。

石積み構築面のレベルは揃っていない。前述の版築盛土の範囲外にあたる西半部は地山直上に据えられているが、版築盛土の範囲内にあたる東半部は円丘裾部付近に乗り上げるように石積みが構築されている。地形に沿って石積みを構築するよりも直線的・企画的な区画を整備する点を優先した結果であると考える。また、基壇状石積みによる墓地の区画造成に際して、版築盛土を大幅に削平したような状況もみとめられない。

上記の方形を指向した石積みの東側、塚東端部の斜面裾部付近に長径 20cm 以下の砂岩円礫を数石貼り付けた状況を確認した（第 10・11 図）。上記石積みとは離れた位置にあるとともに、「積石」ではなく「貼石」状を呈し、施工方法に極端な差異がみとめられる。また、一部しか残存しないため全体像を推測し難いが、正方位に合致させて直線状に施工するよりも、地形に合せて施工した状況が読み取れる。よって、「基壇状石積み」形成以前に施工された貼石であるとも考えられ、可能性の 1 つとして、「集石墓」形成以前の中世盛土 I 形成時に貼り付けられたものであると推測することができる。ただし、このような貼石は東端部のみで確認したにとどまる。後世の削平も想定可能であるが、「基壇状石積み」形成に伴う中世盛土 II は中世盛土 I 上面を覆うように施工されており、大きな削平は考えにくい。よって、中世盛土 I 全面に貼り付けたと考えるよりは、部分的な施工にとどまったと考え方が妥当であろう。

**集石墓** 調査区東寄りの高まり部から北へ下り、テラス状にやや平坦化した部分に形成された遺構である（第 10・12 図）。当該平坦地は、版築盛土の 2 段目テラス面に由来するやや平坦化した箇所にあたる。平成 23 年度調査時に全体を検出した。検出時の所見では、径 1.5m 程度の範囲内に長径 10 ~ 30cm 大の砂岩円礫を集積するとともに、1 辺約 50cm の方形に加工された凝灰岩 2 石（五輪塔地輪）を中央付近で東西に並べ、地輪間、言い換えば集石墓のほぼ中央に円筒形の土師質土器を 1 点、2 石の地輪の南辺にそれぞれ接するように土師質甕 2 点を据える状況を呈する。南側には版築盛土及び中世盛土 I により形成された高まり部があることから、北側が正面であったと推測可能である。なお、円筒形の土師質土器については、平成 23 年度確認調査時のトレレンチ埋戻し

に際して土圧で破損する恐れがあったことから、記録を作成した後に先行して取り上げを行った。

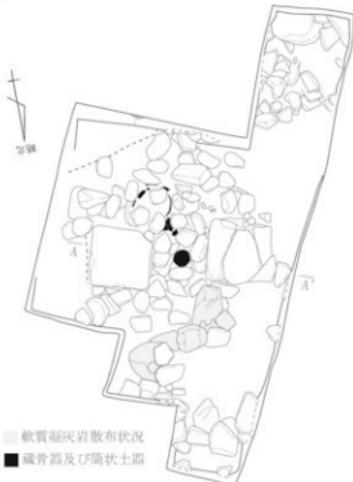
今回の調査時には、下位に土砂が多量に介する等、明らかに原位置をとどめていないと考えられる石材及び石材配置状況に明らかに規則性を見出すことができない石材を除去し、基底となる比較的整然とした並びを呈する一定の規則性に基づいて配置された可能性が高い石材のみを検出した上で、平面形及び具体的な構築方法の検討を行った。まず、平面形について、原位置をとどめると考えられる砂岩円礫は、外周付近で直線状に並ぶ箇所がみとめられることから、方形を呈する集石墓であると考えられる。

次に具体的な構築方法について記載する。2 基の地輪周辺の砂岩円礫は、地輪にもたれかかるように据えられている。また、地輪下位で砂岩円礫はみとめられなかった。よって、構築に先立ち、2 石の地輪を東西に並べ、その後砂岩円礫が集積されたと言える。南東隅部付近の状況から、石材を時計回りの方向に、一部重なり合うよう設置した状況が読み取れる。また、2 基の甕（第 16 図 19・20）に接する砂岩円礫は、平坦面を甕の輪郭に沿って内に向け、円形に巡って甕を支持するような状況を呈する。さらに、円筒形の土師質土器（第 3 図 21）が据えられていた箇所では、砂岩円礫を並べ、東西約 30 cm、南北約 20 cm の方形の空間が設けられ、中央に砂岩円礫を平置きして土台を設ける状況を呈する。砂岩円礫は容易に並び替え可能であることから、集石墓形成当初から 2 基の甕及び筒状土器の据え付けを想定していたか否かは不明であるが、少なくとも甕及び筒状土器を据え付ける際には、一定の目的意識に基づく意図的な石材配置が指向されたと考えられる。

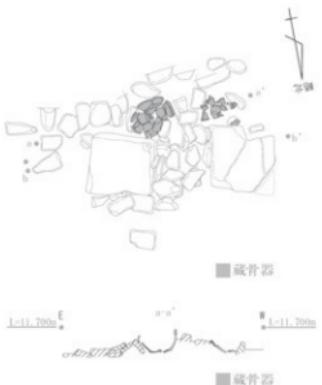
集石墓を構成する 2 基の五輪塔地輪は軟質の凝灰岩製であり、1 辺 50cm 前後の規模を有する（第 17 図 33）。同様の石材を用いて製作された五輪塔空輪（第 17 図 31）や摩耗した石材は、後述する近世の盛土中にも含まれているが、特に集石墓北側の斜面下方に集中している。よって、本来地輪上位に空輪・風輪・火輪・水輪が載せられていたと考えられ、上記のような出土状況から、少なくとも近世の盛土形成直前期までは残存していた可能性が高い。なお、同一石材、同一形態でやや小振りな地輪が他に 1 点出土していることから、前述の 2 基の五輪塔とは別個体の五輪塔が集石墓付近に建立されていた可能性が高い（第 17 図 32）。

最後に、2 基の甕及び筒状土器について記載する。

平成23年度確認調査4トレンチ平面図(集石墓検出状況)



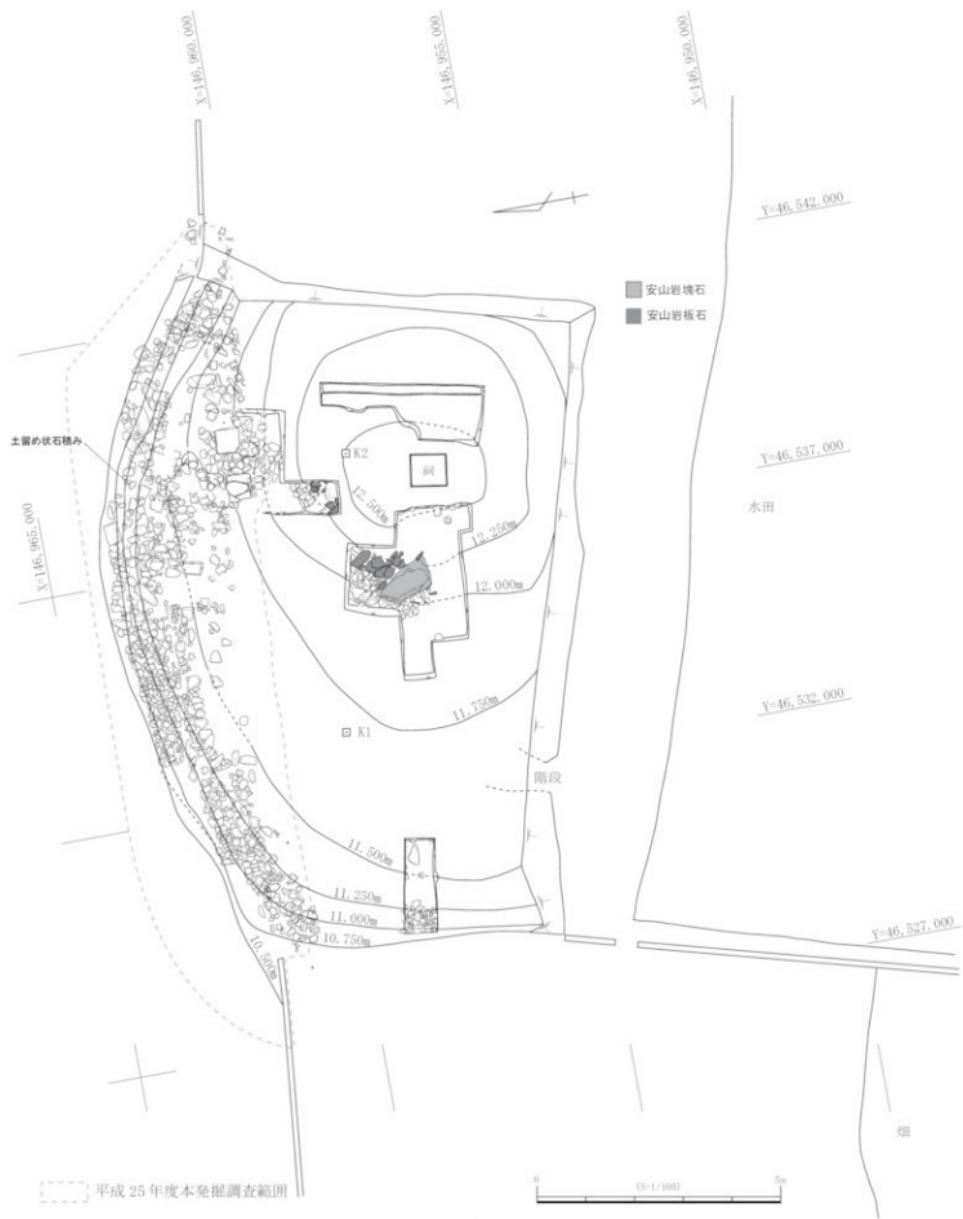
平成25年度集石墓基部検出状況



第12図 集石墓平面図・断面図(S=1/40)

2基の甕は底部を除き上位は後世の削平により破碎された状況で出土した。このため甕内部からは多量の細かな人骨が、破碎された甕片や流入した土砂と混合するように出土した。甕内部に骨片が多量に含まれることから、当該甕は藏骨器であると考えられる（第16図19・20）。なお、人骨は細かく破碎されていることから火葬骨である可能性がある。前述のとおり、2基の甕は集石墓中央付近に東西方向に並べられた地輪の南辺にそれぞれ接するように埋納されている。一方、筒状土器は集石墓のほぼ中央、2基の地輪間に埋納されている。経簡に類似した形態を呈し、内部から人骨等は出土しておらず、底部に土師質皿が1点はめ込まれていた。筒状土器の埋納位置及び経簡に似る形態、

他2基の藏骨器や地輪との位置関係から、筒状土器は藏骨器ではなく、供獻用の土器であった可能性が高い。なお、平成23年度調査時には集石墓の集石上面付近で筒状土器の蓋と考えられる円盤型の土師質土器が出土している（第3図22）。これも筒状土器と同様、経簡の蓋に類似するものである。同様の蓋は本遺跡内で上記の資料を含み2～3個体分出土していることから、同様の筒状土器が集石墓周辺部に複数個体埋設されていた可能性が考えられる。このことは、軟質の凝灰岩を用いた五輪塔地輪が藏骨器を伴うもの以外に少なくとも1基は存在したこととも関連し、当該期に五輪塔及び供獻用土器のセットが複数単位存在した可能性が推測可能である。ただし、集石墓のような難の集中箇



第13図 近世遺構配置図 (S=1/100)



第14図 近世土留め状石積み平面図・断面図(S=1/60)

所や藏骨器は他に認められないことから、集石及び主体部を作わない五輪塔が建立されていた可能性も考えられる。

以上のような状況から、本遺構の本来の構造を推測可能である。2基の主体部それぞれに対応するように2基の五輪塔が建立されていた可能性が高い。主体部は五輪塔下位に設けられず、言わば裏側に埋納される。また、主体部の埋納に合わせて砂岩円礎の集積がなされたと考えられる。2基の五輪塔間には供献用の簡状土器が据えられたと考えられる。

#### ＜近世＞

前述の中世の遺構を覆うように形成され、近・現代の盛土及び腐植土等に表面を覆われる遺構である。塚西側から北側の裾部を中心に調査以前から部分的に露出していた。「近世盛土」「土留め状石積み」に分けて所見を記載する。

**近世盛土** 中世の遺構上面を覆うように近世盛土が施工されている(第14図4~6層)。塚西端付近については、非常に厚く近世盛土が施工され、中世の状況から大きく改変されている。近世盛土は、褐色系シルト~粘土で、径5~20cm大の砂岩円礎を含む比較的均質な土壤を用いて施工されている。近世盛土の施工により、大規模な改変を作らる墓域の再造がなされたと考えられる。

**土留め状石積み** 前述の近世盛土層の上面を覆う遺構であり、現状地形に沿って、円弧を描くように形成されている(第13図、第14図3層)。塚上部の平坦面では見られず、西・北・東側の斜面部においてのみ確認した。近世盛土層の崩落・流出防止を主たる目的として外周斜面部に形成された石積みであると考えられる。

使用された石材は、長径20~40cm大の砂岩円礎が主体であり、長径50cmを超えるものも含まれる。また、平成23年度調査時には、砂岩円礎に混ざって、五輪塔空風輪や地輪等が転用されている状況を確認した(第14図)。一見すると、石の積み方に顕著な規則性はみとめられない。褐色系粗砂~シルトとともに盛り上げられたような状況を呈し、石垣状に積み上げられた構造とは異なるものである。傾向として、表面に近いほど多量の石材が含まれ、最も外側の石材は広い面を外に向けて貼り付けられたような状況を呈する。また、第14図の断面図の所見から、土留め状石積み東端部では、特に傾斜のきつい裾部から約60cmの高さまでは、長径30cm程度のものを含む石材を斜面に直行するように積み上げ、それより上方の

やや傾斜が緩くなる部分については、長径20cm以下の比較的小振りで薄い石材を斜面に平行するように平積み状に盛り上げている状況を指摘できる。以上のよう所見から、少なくとも傾斜の比較的急な裾部付近については大振りの自然石や転用石等を積み上げて極めて乱雑な石垣状の構造を呈していたと考えられる。

#### 参考文献

高松市教育委員会(編)2012『高松市内遺跡発掘調査概報－平成23年度国庫補助事業－』高松市教育委員会

### 第3節 遺物

本遺跡では、主として13世紀~近・現代の遺物が多量に出土するとともに、少量古墳時代の遺物も含まれる。遺物は、既往の確認調査及び工事立会の成果から想定された盛土単位ごとに取り上げを行い、各盛土単位の形成時期の特定を試みた。また、盛土以外の個別の遺構として認識できる集石墓や石積みに伴う遺物(藏骨器、石積み裏込め土出土遺物等)については、別途取り上げを行い、各遺構の詳細な時期比定を試みた。以下では、出土遺物の概略を記述する。

第4表 相対年代~絶対年代対照表

| 佐藤編年<br>(2000) | II-1 | 12世紀/第3四半期~12世紀/第4四半期              |
|----------------|------|------------------------------------|
|                | II-2 | 13世紀/第1四半期                         |
|                | II-3 | 13世紀/第2四半期~13世紀/第3四半期              |
|                | II-4 | 13世紀/第3四半期~13世紀/第4四半期              |
|                | II-5 | 13世紀/中葉~14世紀前葉                     |
| 佐藤編年<br>(1995) | I    | 13世紀/中葉~14世紀初頭                     |
|                | II-1 | 14世紀前葉(片桐(1992)のⅢ-①)に対応)           |
|                | II-2 | 14世紀/中葉(後葉)<br>(片桐(1992)のⅢ-②③)に対応) |
|                | II-3 | 15世紀前葉(片桐(1992)のⅢ-④)に対応)           |
| III            |      | 15世紀/中葉~16世紀                       |
|                |      | (片桐(1992)Ⅲ-⑤以降)に対応)                |

13世紀~15世紀の遺物の分類は佐藤竜馬氏の分類案(佐藤2000)に準拠する。13世紀~15世紀の土器編年案は佐藤氏や片桐孝浩氏により提示されているが(片桐1992)、ここでは、高松平野を含む地域の編年案を示した佐藤氏による編年案(佐藤1995、2000)に準拠する。ただし、本遺跡で主体となる14世紀~15世紀の編年案(佐藤1995)については、各型式の時間幅が比較的長く設定されており、詳細な時期比定を行うことが困難であることから、より短い時間幅毎に型式設定された片桐氏の編年案を援用する。

両者の対応関係は上記第4表のとおりである。時期毎の形態変化の特徴を捉えやすい土師質足釜及び土師質土鍋を指標として、両者の対応関係を整理した。まず、土師質足釜を指標として考察する。佐藤

(1995) 編年II-1には鈙端部に面が形成されるが、鈙端部へのハケ調整は見られなくなり、代わってナデ調整が加えられるとともに、底部叩き成形の範囲が広く底部から胴部まで緩やかに渦曲する形態を呈する資料がみられる。これは、片桐編年III-①(14世紀前葉)に比定される資料と同様の形態的特徴を有する資料であることから、佐藤(1995)II-1は片桐III-①(14世紀前葉)に対応する土器型式であると考えられる。続く、佐藤(1995)II-2以降、底部叩きの範囲が狭くなり、底部と胴部の境に明瞭な屈曲部を有する資料がみられるが、これは片桐III-②③(14世紀中葉～後葉)から見られる特徴であると考えられる。よって、佐藤(1995)II-2は片桐III-②③(14世紀中葉～後葉)に対応する土器型式であると考えられる。足釜鈙部はやがて形骸化が進み、佐藤(1995)II-3では鈙基部の器壁が厚くなるとともに口縁部・鈙部とともに短くなり、より一体化が進行するとされているが、同様の特徴は片桐III-④(15世紀前葉)からみられる。よって、佐藤(1995)II-3は片桐III-④(15世紀前葉)に対応する土器型式であると考えられる。統いて、土師質土鍋に目を転じると、際立った変化として鍋B類の出現が挙げられる。当該画期は、佐藤編年(1995)ではII-2に、片桐編年ではIII-③(14世紀後葉)に比定されており、ここでも佐藤(1995)II-2と片桐III-③との対応関係を追認することができる。

17～19世紀の遺物については、松本和彦氏による高松城跡(西の丸町地区)における様相編年案(松本2003)に準拠する。また、少數ながら出土した古墳時代の円筒埴輪片及び須恵器片については、それぞれ川西宏幸氏による編年案(川西1978)及び陶邑窯跡における編年案に準拠する。

1～7・10・11は中世盛土層からの出土遺物である。中世盛土層からの出土遺物は極めて少量であったが、塚北西裾部付近から比較的多くの遺物が出土した。当該部分の盛土層は中世における2段階の盛土のうち、基壇状石積み形成と一連の作業工程の中で形成された中世盛土IIに対応すると考えられる。

1・2は土師質甕であり、佐藤氏による分類の甕A類にあたる。1は口縁端部上下ともに肥厚した形態を呈することから甕A I類に分類可能であり、体部外面に格子状叩き目が見られることから、佐藤(1995)II-2に属するものであると考える。2は口縁端部を下方向へのみ肥厚させた形態を呈することから甕A II類に分類可能であり、1よりも新相である。摩耗により読み取りにくく、図示していないが、体部外面には格子状

叩き目が残存する。2は佐藤(1995)II-3に属するものであると考える。

3～7は土師質足釜であり、いずれも佐藤氏による分類の足釜B類にあたる。摩耗の影響も考えられるが、いずれも外外面にハケ目は見られない。このうち、4・6・7は口縁部長さが鈙部よりもやや長く、口縁基部の肥厚化も進んでいない。また、特に6・7では鈙部基部に爪痕が顕著に残存する。以上の特徴から、4・6・7は足釜B III類に分類可能であり、佐藤(1995)II-2～3に属するものであると考える。一方、3・5は口縁基部の肥厚化が進行した形態であることから、足釜B IV類に分類可能であり、佐藤(1995)II-3に属するものであると考える。

10・11は土師質足釜脚部であるが、足釜脚部は時期毎の形態変化に乏しいことから、詳細な時期比定は困難である。

以上、中世盛土層出土遺物の概要を示したが、下限は佐藤(1995)II-3であることから、基壇状石積み形成に伴う中世盛土IIは当該期に形成されたものである可能性が高い。

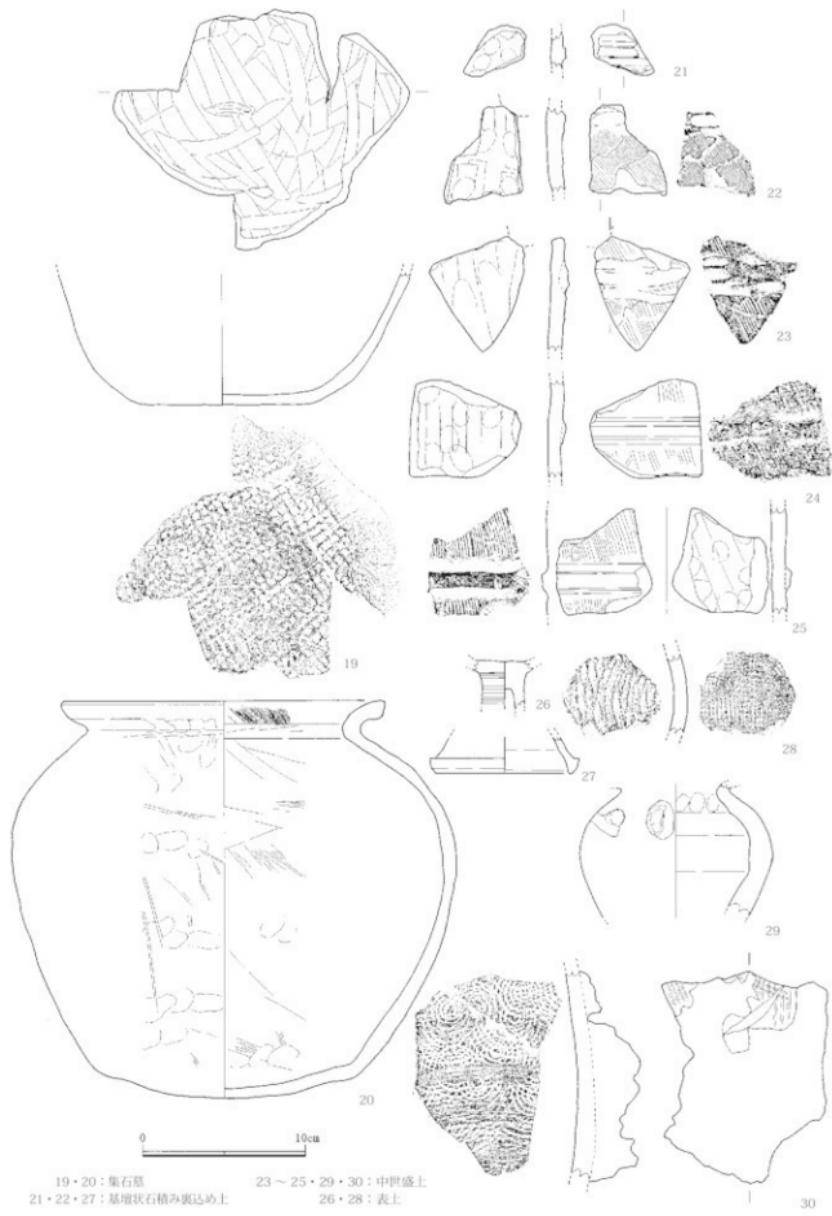
8・9・12～18は近世盛土層及び土留め状石積み中からの出土遺物である。このうち、8・9・15は中世の遺物であり、後述する近世の遺物と同一層位で出土したことから、二次的な混入品であると考える。8・9は土師質足釜である。8は口縁端部及び鈙端部に平坦面が形成されるものの、鈙部長が口縁部よりも短い点、鈙端部がナデ調整により仕上げられている点から、佐藤氏の分類による足釜A II類に分類可能であり、佐藤(1995)II-1に属するものであると考える。一方、9は口縁基部の肥厚化が進行した形態であることから、足釜B IV類に分類可能であり、佐藤(1995)II-3に属するものであると考える。15は土師質鍋である。内溝して大きく立ち上がる口縁部を呈し、端部にはナデ調整による平坦面が形成されている。以上の特徴から佐藤氏の分類による土師質鍋B IV類に分類可能であり、佐藤(1995)II-3～IIIに属するものであると考える。

統いて、12～14・16～18は近世の遺物である。12は須恵質の蓋であり、小壺の蓋である可能性が考えられる。13・14は肥前系磁器の碗である。両者ともに高台断面はU字状を呈する。14は体部外面に直線又は曲線による筋状の染付がみられるとともに、口縁部内部にも圓錐状の染付がみられる。見込みには蛇の目釉剥ぎがみられる。形態的特徴及び文様から様相7に属するものであると考える。16～18は土師質土



1~7・10・11:中世盛土  
8・9・13:上留め状石積み  
12・14~18:近世盛土

第15図 出土遺物実測図(1) (S=1/3)

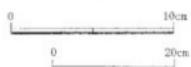


第16図 出土遺物実測図(2) ( $S=1/3$ )



31・32：土留め状石積み  
33：集石基

※33のみS=1/8



第17図 出土遺物実測図(3) (S=1/3, 1/8)

器である。焰烙・植木鉢がみられるが、これらも様相7前後に属するものであると考える。18は土鍤であり近世に属する可能性があるが、詳細な時期は不明である。

以上、近世盛土層及び土留め状石積みには、中世～近世の遺物が包含されていることが判明したが、出土遺物の下限はいずれも様相7前後であると考えられ、近世盛土層及び土留め状石積みが当該期以降に形成された可能性が考えられる。

19・20は集石墓主体部である土師質甕である。20は主体部のうち、東側に設置されたものであり、ほぼ完形に復元可能な資料である。比較的長く緩やかに外反する頸部を有し、口縁端部にはナデ調整による平坦面が形成され、下方へのわずかな肥厚がみとめられる。よって、佐藤氏の分類による甕C類に分類可能である。体部には粘土帶接合痕が確認でき、「輪積み」により概形の成形が行われたと言える。底部付近には、成形時の素地の自重によるたわみが確認できる。また、底部は丸みを帯びている。体部外面の大部分に粘土帶積み上げ・接合時の指項圧痕が確認できるとともに、断続的なハケ調整・ナデ調整痕がみされることから、ロクロ又は回転台の回転力を利用せずに成形・調整されたものであると考える。外面には概形成形後、ハケ調整が施され、後にナデ調整により平滑にされている。叩き成形の痕跡は残存しないことから、叩き成形されなかった、あるいは叩き痕が丹念に撫で消された可能性が高い。調整の方向であるが、体部最大径付近より下位ではほぼ下から上へとハケ・ナデ調整が施される。体部最大径付近では右下から左に向かう調整痕がみられる。体部最大径付近より上位ではハケ・ナデ調整の痕跡が水平方向に延びている。内面についてもハケ調整後にナデ調整が施され、ハケ目がナデ消された状況を確認できる。体部最大径付近より上位では右下から左上、又は水平方向へ延びるハケ目が比較的良好に残存しているが、下位ではほぼ完全にナデ消され、痕跡的に下から上又は右下から左上へ延びるハケ目を確認できるのみである。甕C類に分類可能であることから、佐藤(1995)II-1に属するものであると考える。

19はわずかに残存する体部下端付近の状況から20と同様、成形時の素地の自重によるたわみが確認できる。ただし、20とは異なり底部に格子状叩きが明瞭に残存しており平坦な面が形成されている。部分的な観察による推測であるが、体部外面には叩き目

がおよばず、底部のみ叩きにより成形された、あるいは体部の叩き痕が丹念に撫で消された可能性を考えられる。内面は板ナデが入念に施されている。残存状況が不良であり口縁部の状況が確認できないことから分類・時期比定は困難である。前述の20と同様の形態・時期を想定することも可能であるが、厳密な意味で共伴関係にあるとは言い難く、底部調整・底部形態の差異からも同時期に製作されたものであるとは言い難い状況にある。しかし、付随する五輪塔地輪の石材・形態の特徴から、20と同様に佐藤(1995)II-1に属するものであるとしておきたい。

上記19・20が出土した集石墓からは平成23年度の確認調査の際に土師質の筒状土器が出土し、内面底部から完形の土師質甕が1点出土している(第3図21・23)。このうち、土師質甕は直線的に外傾する体部を持ち、底部切り離し手法にヘラ切りを採用していることから、佐藤氏の分類による杯Dに分類可能であり、体部外傾の度合いが強く、器高が低いことに加え、口径が10cm弱と矮小化していることから杯D II-8又は杯D II-9に分類可能であると考える。このような形態の土師質甕は佐藤編年(2000)II-5にみられる。

21～30は主として中世盛土及び基壇状石積み裏込め土から出土した中世以前の遺物である。このうち21～28・30は古墳時代に属するものであると考える。なお、26・28のみ表探資料である。21～25は円筒埴輪である。いずれもタガの形状は低平化が進んだ断面M字形、またはM字に近い台形を呈する。タガ上・下・側面に明確な「面」を形成するとともに、タガ上下基部が明確に屈曲した、基部が明瞭な資料は皆無であり、タガの上下基部がナデ調整により押しつぶされたような状況、すなわち緩やかなスロープ状を呈し間延びした極めて不明瞭な資料のみ見られる。外面調整は一次調整のタテハケのみであり、二次調整は見られない。外面には右下から左上方向へと施された、断続的なハケ調整の痕跡がみられる。内面は指ナデが施されている。タガ側面にも横方向のナデ調整が加えられ、極めて低平化したM字形のタガを形成する。22・23では円形透かしを確認している。

これらの特徴から、本遺跡出土の円筒埴輪はいずれも川西編年V期に属するものであると考える。川西編年V期は畿内の古墳から出土した円筒埴輪と須恵器との関係から陶邑編年TK23～209型式に対応するとされている(川西1978)。詳細は次章で検討を加えるが、本遺跡で出土した円筒埴輪はTK10型式並行

期に属するものである可能性が高いと言える。

26 ~ 30 は須恵器である。26 は高杯脚部の基部付近である。基部は 1/2 程度残存しているが、透かしが見られないことから、透かしは形成されていなかつた可能性が高い。また、外面にはカキ目が施されている。口縁部や脚端部等が残存しておらず時期比定が困難であるが、脚部基部径が 3 cm 程度と極めて細い点、透かしは形成されていない可能性が高い点から、高杯の長脚化が顕著にみられる MT85 ~ TK43 型式並行期に属するものであると考える。27 は高杯脚端部である。残存状況が悪く、時期比定困難であるが、脚端部を上下に肥厚させるような形態を呈することから、少なくとも TK10 型式並行期以降に属するものであると考える。

28 は甕体部片である。須恵器に施された叩き成形の痕跡については、叩き板への溝の刻み方により 3 種類 (A ~ C) に分類されている (田辺 1981)。このうち、28 については、木目に直行する方向に 1 ~ 2 mm 程度の溝を刻みつけたもの (B) を使用して成形していることがわかる。また、叩き成形後、二次調整である横方向のカキ目により叩き目が部分的に消失している。内面には同心円状の当て具痕が残されているが、二次調整によりナデ消された状況はみられない。小片であり時期比定は困難であるが、外面の平行叩き目をカキ目により部分的に消す一方で、内面には二次調整が施されない点から MT85 ~ TK209 型式並行期に属するものである可能性が高い。

30 も甕体部片である。外面には幅 2 mm 程度の平行叩き (B) がみられるものの、焼成時に溶融した窓体又は灰が広い範囲に付着しており、ナデ消しの有無等については観察できない。内面には同心円状の当て具痕が残されており、二次調整により部分的にナデ消されている。このような特徴から TK10 ~ 43 型式並行期に属するものである可能性が高い。

29 は須恵器であり、外面に把手が取り付けられた比較的小形の壺状の形態を呈する。外面は比較的緩やかに湾曲する形態を呈し、肩部が体部上位に位置する。体部最大径やや上位に把手が横向きに取り付けられている。外面はナデ調整により平滑化されている。一方、内面はやや凹凸が著しく、体部最大径付近が直線的に立ち上がり、その上下に屈曲部がみられる等、いびつな形態を呈する。ナデ調整が施されているものの、外面と比較して平滑化は達成されていない。29 はハソウに類似しているが、ハソウには通常把手が取りつかないことから疑問が残る。ここでは、

時期不明であるが、壺系の器種であるとしておく。

31 ~ 33 は石造物である。いずれも非常に軟質の凝灰岩を用いて製作された五輪塔とみられる石塔の部材であり、詳細は後述するが、高松平野南部等で産出する在地産の石材を用いて製作されたものであると考える。同様の軟質の凝灰岩片および摩耗により器種特定が困難な石造物は、特に集石墓北側から多量に出土している。また、集石墓を構成する 2 基の五輪塔地輪も同じ石材で製作されている。よって、軟質の凝灰岩は集石墓を構成する五輪塔の部材であった可能性が高い。集石墓を構成する 2 基の五輪塔地輪上部に本来組み上げられていた部材あるいは、同時期の別個体の石造物である可能性が考えられる。

31 は土留め石積み中から出土した五輪塔空輪である。下部には突出部が作り出されており、空輪と風輪が別作りされたものであると言える。なお、空輪・風輪を別作りする製作技法は、西讃地域を中心に分布する天露石を用いて製作された五輪塔に典型的にみられる特徴である。32・33 は五輪塔地輪である。32 は土留め石積み中から出土した。1 辺約 32 cm の平面方形を呈していたと考えられる。内部は割り抜かれており工具痕が明瞭に残る。地輪を地面に据えた際に安定させるために内部を割り抜き、接地面をできるだけ抑えようとしたと考えられる。33 は集石墓を構成する五輪塔地輪のうち東側に据えられたものである。1 辺約 50 cm の方形を呈する。内部は 31 同様割り抜かれており、工具痕が明瞭に残る。上部中央には直径 32 cm 程度の円形を呈する盛り上がりがみられる。上部へ組み上げる水輪を固定しやすくするために形成されたものであると考える。なお、33 は佐藤編年 (2000) II -5 に形成された集石墓に伴うものであり、少なくとも前述の土師質杯を含む簡状土器が設置される前に据えられていたものである。本遺跡で佐藤 (2000) II -5 をさかのぼる中世の遺物が出土していない点、及び簡状土器設置との大幅な時間差を想定し難い点から、当該期に属するものであると考える。他の同じ石材で製作された資料についても同様の時期に製作されたものであると考える。

なお、本遺跡では平成 23 年度の確認調査時にも数基の五輪塔空風輪や風輪、火輪、宝篋印塔相輪部が出土した (第 3・4 図)。石材は、今回出土したものと同様の軟質の凝灰岩、天露石、六甲花崗岩 (御影石)、国分寺産とみられる凝灰岩に分けられる。

#### 参考文献

川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌第 64 卷 第 2 号』

- 日本考古学会  
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 片桐孝浩 1992「古代から中世にかけての土器様相」『中小河川 大東川改修工事（津ノ郷橋・弘光橋間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津元結木遺跡』香川県教育委員会
- 佐藤竜馬 1995「楠井底土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第18冊 国分寺楠井遺跡』香川県教育委員会
- 佐藤竜馬 2000「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 空港跡地遺跡IV』香川県教育委員会
- 中世土器研究会（編）2004『概説 中世の土器・陶磁器』（有）真陽社

## 第4章 総括

### 第1節 検出遺構について

今回の調査によって、古墳時代～近世に至るまでの墓域の造成一区画一拡張に関わる変遷の履歴を確認することができた。以下、時期毎に遺構形成状況の概要を示す。

**古墳時代（6世紀中葉）**当該地における墓域造成行為の端緒として、古墳時代の版築盛土を擧げることができる。なお、調査当時は当該遺構を人為的な盛土であるとは認識していなかったが、調査後の整理作業時に現場写真（写真図版2-16～4-22）を基に再検討することで判断した。当該盛土は古墳の墳丘であると考えられる。当時、地形的に起伏があったことが想定される香東川・本津川間の微高地において、やや高まりを呈する部分を選択的に利用して古墳が築造されたと考えられる。古墳の形態は径約12m、高さ2.0m以上で3段築成の円墳であると考えられる。外表施設として葺石及び円筒埴輪が使用されたと考えられる。主体部は未調査であるため不明である。築造時期は、次節で詳細な分析を加えるが、TK10型式並行期であると考えられる。

**中世（14世紀前葉～16世紀）**当該期は集石墓が形成される段階（中世I）と基壇状石積みが形成される段階（中世II）に分けられる。

14世紀前葉に、想定される古墳墳丘の2段目テラスに由来すると考えられるやや平坦化した箇所に集石墓が形成される（中世I）。なお、後述する15世紀前葉の中世盛土IIや近世盛土中からも中世の遺物が出土しているが、いずれも上限は14世紀前葉のも

のである。このことも、当該地における中世段階の土地利用の開始時期が14世紀前葉であったことを傍証する。集石墓では在地産とみられる軟質の凝灰岩製地輪を2基確認したが、特に集石墓北側の斜面下方の近世盛土中において同様の石材を用いた五輪塔空輪や摩耗した石材が散乱した状態で包含されている状況を確認したことから、2基の五輪塔が建立されていたと考えられ、少なくとも近世の盛土施工直前期までは残存した可能性が考えられる。集石墓は、五輪塔建立後に円礎が敷かれ、2基の五輪塔南北に接して各1基ずつ藏骨器が埋納されている。また、2基の五輪塔間に土師質杯1点を含めた土師質の筒状土器が設置されており、供獻用土器であると考えられる。このように、2基の五輪塔及び供獻用土器1点を包括する集石の範囲を1連の「墓」として認識することが可能である。なお、前述のとおり他に軟質凝灰岩製石造物と筒状土器がセットとなり1～2基建立されていた可能性も考えられる。集石墓形成に先立ち、上面の起伏を平坦にならす程度の盛土（中世盛土I）がなされたと考えられる。中世盛土Iは、想定される古墳墳丘範囲の西側にまで施工されていたことが、平成23年度のトレンチ調査（5Tr）や本調査で判明している。また、塚東端据部付近で確認したように、長径20cm以下の砂岩円礎を部分的に中世盛土I上面に貼り付けていた可能性も考えられる。

15世紀前葉には、石垣状の積石による区画施設が構築され、積石構造と並行してさらに盛土（中世盛土II）がなされたと考えられる（中世II）。平成23年度調査時には、近世の土留め状石積み中や想定される古墳墳丘上面から天霧石・六甲花崗岩・国分寺産とみられる凝灰岩により製作された五輪塔空輪や空輪、風輪、火輪、地輪、宝鏡印塔相輪が出土している（第3-4図）。このうち、天霧石製五輪塔は空輪・風輪分割成形の14世紀代に属すると考えられるものと（第3図15、第4図50）、空輪・風輪一石成形の六甲花崗岩製五輪塔の影響を受けた15世紀前半～16世紀の資料（第3図16～18）が見られる。六甲花崗岩製品（第4図48・49）は15世紀前半段階に属するものである。また、国分寺産とみられる凝灰岩製品は時期不明であるが、地輪が小型化していることから、15世紀代のものである可能性が指摘できる。（第3図20、第4図51）天霧石製宝鏡印塔は天霧石製宝鏡印塔生産の最盛期となる16世紀以降に生産されたものである可能性が考えられる（第3図14）。よって、少なくとも、新相の天霧石製品と六甲花崗岩製品及

び国分寺産とみられる凝灰岩製品については基壇状石積み築造前後、15世紀前葉～16世紀にかけて順次建立されたものである可能性が高く、15世紀前葉における五輪塔の建立と前後する時期に基壇状石積み及び中世盛土Ⅱによる墓域の区画・再造も実施された可能性が高い。これらの五輪塔・宝篋印塔に対応すると考えられる墓壇は確認しておらず、藏骨器とみられる土器も皆無であることから、明確な墓壇や藏骨器等の主体部を伴わない可能性が高く、追善供養の累積として捉えることも可能である。中世Ⅱ以降に建立された石造物も出土状況から少なくとも近世の盛土形成直前までは残存した可能性が高い。

改めて中世の状況をまとめると、中世Ⅰに中世盛土Ⅰによる墓域造成及び五輪塔を伴う集石墓が形成される。中世Ⅱ以降、15～16世紀にかけて追善供養として前述の集石墓に伴う五輪塔に加えて、複数基の五輪塔が順次建立され、併せて15世紀前葉に中世盛土Ⅱによる墓域再造及び墓域を取り囲むような区画施設の構築がなされたと考えられる。

**近世（18世紀後葉～）**18世紀後葉には中世盛土を覆うように近世盛土が形成される。また、近世盛土の裾部付近を中心に人頭大の円錐を多用した石積みを形成し、土留めを行ったと考えられる。当該期に人为的に形成された地形が、一部の削平を伴いつつも、大部分は今まで残存していると言える。当該期の五輪塔をはじめとする石造物は確認していない。中世の五輪塔群がどの段階で崩壊したのか厳密に特定することは困難であるが、少なくとも近世の盛土形成前に既に崩壊していた、あるいは盛土形成時に崩壊した五輪塔を修繕した痕跡がうかがえないことから、当該期には15～16世紀まで続いた追善供養が途絶えたと考えられる。

## 第2節 相作馬塚出土円筒埴輪の位置付けと古墳築造時期の検討

### 1 はじめに

第3章第2節で詳説したとおり、本遺跡では川西編年V期に属する円筒埴輪が複数出土している。川西編年V期の円筒埴輪については畿内の事例をもとに、①M字形及び不定形の形転化したタガを有し、②外面はタテハケのみでありヨコハケを基調とする二次調整を欠く、③成形時の粘土紐巻き上げ方法の変化に起因する底部の歪を是正するために底部調整が加えられる、④最下段タガに断続ナデ技法の痕跡が

見られるものがある、⑤焼成は野焼きではなく須恵器窯等で行われたと考えられ、黒斑が見られず、土師質のものに加えて須恵質のものも見られる、といった属性が挙げられている。ただし、瀬戸内地域では底部調整を欠く資料や最下段タガへの断続ナデ技法が見られない資料が含まれる点が畿内との相違点として挙げられている（川西1978）。相作馬塚出土円筒埴輪の様相はこれらの属性と一致する。中世の遺構下位では古墳の埴丘とみられる盛土層を確認しており、当該期に属する古墳が築造されていた可能性が高いと言える。

一方、川西編年V期は暦年代では5世紀後半～6世紀後半までのおよそ100年の時間幅を指し、須恵器の型式編年では、TK23～TK209型式並行期までの時間幅が想定されている。同一地域又は他地域で築造された古墳と本遺跡で確認した古墳の築造時期の前後関係を整理することは、古墳時代の社会構造及び政治秩序等を再構築する上で不可欠な作業であると考えることから、なお一層の厳密な時期比定を行う必要があると考える。よってここでは、古墳時代中期後半以降の最も細かな「物差し」としての須恵器の型式編年に当てはめて、本遺跡で確認した古墳の築造時期をより明確化したい。

### 2 分析材料

古墳の築造時期を埴形や埋葬施設の構造から推定することははある程度可能であるが、終局的には当該古墳築造時又は遺骸埋葬時に近似する時期に製作されたと推測される遺物（伝世品等一部の例外を除く）の型式学的特徴から決定することとなる。代表例として埴丘外表面で原位置を保った状態で出土した埴輪類や埋葬施設に遺骸とともに納められる副葬品としての須恵器・土師器等が挙げられる。なお、埴輪については原位置を保った状態で出土した資料以外でも周溝埋土等から出土し、当該古墳に伴う可能性が極めて高いと判断されたものについては、時期比定の材料として採用される。

一方、本遺跡では複数の埴輪片や須恵器片を中世盛土・近世盛土・地表面で採取している。本遺跡では原位置を保った状態の埴輪は出土しておらず、埋葬施設も未調査であるため副葬品の内容も不明である。加えて、周溝も未検出であるため、周溝埋土出土遺物として位置付けられる資料も存在しない。本遺跡出土の古墳時代資料は、古墳の築造時期を決定する上での資料の信頼度に欠けるが、（外部からの持

ち込み、二次的混入の可能性)、その中でも比較的信頼度の高い資料として、中世盛土層出土遺物を挙げることができる。よって、ここでは、本調査及び平成23年度調査時に中世盛土層中から出土した古墳時代資料を時期比定の根拠資料とする。

### 3 分析手法

前述のように、本節における分析は、本遺跡で確認した古墳の築造時期を厳密化することを目的とするが、本遺跡出土の須恵器片は小片が多く、そのような情報量の少ない資料のみで時期比定することは慎重にならざるを得ない。よって、川西編年V期の埴輪と時期比定に堪え得る程度の残存状況及び出土状況を呈する須恵器が出土した県内の複数の遺跡を比較対象とする。具体的には、各古墳で出土した須恵器の形態的特徴から須恵器の型式編年に従って古墳築造時期の比定を行った上で、各時期におけるV期の円筒埴輪の特徴を整理し、本遺跡出土円筒埴輪との形態及び調整等の属性についての比較を通して、時期比定を試みる。

### 4 相作馬塚出土円筒埴輪・須恵器の特徴

ここでは、改めて本遺跡出土円筒埴輪及び須恵器の特徴を整理する。遺物実測図については、第2図1、第4図37・44・45・47、第16図21～25・27・29・30を参照されたい。

円筒埴輪について、タガの形状は低平化が進んだ断面M字形、またはM字に近い台形を呈する。タガ上・下・側面に明確な「面」を形成するとともにタガ上下基部を明確に屈曲した基部が明瞭な資料は皆無であり、タガの上下基部がナデ調整により押しつぶされたような状況、すなわち緩やかなスロープ状を呈し間延びした極めて不明瞭な基部を有する資料がみられる。本調査時及び平成23年度調査時の出土資料にはタガ上下基部付近を強く撫でることにより、わずかな隆起を形成するのみの資料もみられる。幅15mm、突出2mm程度の資料がみられる一方で、幅18mm、突出4mm程度の資料もみられる。図示していないが、口縁部が1点のみ出土しており、直線的に外方向へ延びる形態を呈する。底部は平成23年度調査時に数点出土しており、底部調整が加えられ、先細り気味で端部にわずかな面を有する資料とともに、無調整で成形時の素地の自重により肥厚した資料も見られる。外側調整は一次調整のタテハケのみであり、二次調整は見られない。

須恵器については、中世盛土中からの出土遺物が少量であるが、高杯・甕が出土している。高杯は脚端部のみ出土しており、脚端部を上下に肥厚させるような形態を呈する。甕は、体部外面に平行叩き目がみられ、内面に同心円状の当て具痕が明瞭に残る。なお、内面の当て具痕は一部ヨコナデにより消されている。時期比定を行う際の根拠としては、いささか不十分であるが、TK10～43型式並行期の中で収まるものと考えられる。なお、傍証資料として近世の盛土中からは脚基部が細く、長脚化した個体であると考えられる高杯片が出土しており、3方向透かしがみられる。これもTK10～43型式並行期に属するものであると考えられる(第4図38)。このように、本遺跡ではMT15型式並行期にさかのぼる須恵器資料は表採を含め見出していない。

### 5 県内の事例提示

前述のように、ここでは川西編年V期の埴輪と須恵器が出土した県内の古墳について、その事例を提示する。提示資料は、別宮北1・2号墳、大井1・4・6・8号墳、雄山4号墳、相作牛塚古墳、玉墓山古墳の出土資料である。

#### 【新宮北古墳群】

別宮北古墳群は、坂出市城山北麓に位置する。削平の著しい埴丘基底部及び周溝のみ残存する4基の円墳が確認されており、このうち、1号墳及び2号墳から多量の須恵器及び埴輪が出土した。

#### (1号墳)

径約13mの円墳である。埴丘周囲には幅0.5～2mの周溝が二重に巡らされており、埋土から須恵器甕・蓋杯や土師器甕、円筒埴輪、人形・盾形等の形象埴輪が出土していることから、外表施設として埴輪を使用したと考えられる。葺石はみられない。

出土した須恵器のうち蓋杯の蓋は天井部が丸みを帯びるとともに、口径が矮小化している。また、外側や口縁端部に明瞭な段を形成している。甕は口縁部付近のみの出土であるが、頭部から「く」字状に湾曲しながら大きく外反する口縁部を有し、口縁端部下位には断面三角形状の粘土帶が貼り付けられている。これら出土した須恵器の形態的特徴から、本墳はTK23～47型式並行期に築造されたものであると考える。

円筒埴輪では、土師質の資料のみ見られる。断面台形及びM字形に近い台形を呈するタガを有するものがみられる。その他、台形タガでは下端部の稜が崩れ、

三角形状を呈するものも見られる。タガ上面・下面・側面は丁寧に撫でられ明確な「面」を持ち、特に上端部稜が鋭く屈曲し強調された極めて立体的な形状を呈する資料が主となる。タガ基部は明確に屈曲し、基部が極めて明瞭な資料が大多数である。幅16mm、突出4mm程度のタガを有する資料がみられる一方で、幅20mm、突出10mm程度の比較的タガの突出度が高い資料も多くみられる。最下段タガに断続ナデ技法の痕跡は見られない。口縁部は外反気味の資料と直立気味の資料がみられる。また、底部は無調整で成形時の素地の自重により肥厚した資料のみである。外面調整は二次調整のヨコハケを欠く。透かしは円形のみである。

#### (2号墳)

径約20mの円墳であり、張り出し部を有する。墳丘周囲には幅2～5mの周溝が造らされており、埋土から須恵器甕・蓋杯や土師器甕、円筒埴輪、人形・馬形・家形等の形象埴輪が出土している。

出土した須恵器のうち蓋杯の蓋は1号墳出土資料よりも天井部が平板であり、口径もやや大きい資料が含まれる。また、身についても底部がやや平たく、短く張り出す蓋受け部に対し、口縁部が内傾もしくは直立気味に高く延びている。甕は外面に平行叩き目を明瞭に残す一方で、内の同心円状の当て具痕はナデ調整により完全に消されている。これら出土した須恵器の形態的特徴から、本墳はTK208～23型式並行期に築造されたものであると考える。

円筒埴輪では、土師質の資料のみ見られる。断面台形及びM字形に近い台形を呈するタガを有するものがみられる。その他、台形タガでは下端部の稜が崩れ、三角形状を呈するものも見られる。タガ上面・下面・側面は丁寧に撫でられ明確な「面」を持ち、特に上端部稜が鋭く屈曲し強調された極めて立体的な形状を呈する資料が主となる。タガ基部は明確に屈曲し、基部が極めて明瞭な資料が大多数である。幅16mm、突出4mm程度のタガを有する資料がみられる一方で、幅18mm、突出10mm程度の比較的タガの突出度が高い資料も多くみられる。最下段タガに断続ナデ技法の痕跡は見られない。口縁部は外反気味の資料と直立気味の資料がみられる。また、底部は無調整で成形時の素地の自重により肥厚した資料のみである。外面調整は二次調整のヨコハケを施す資料が少量みられるが、大多数は一次調整のみである。透かしは円形のみである。

#### 【大井七つ塚古墳群】

さぬき市大川町に位置する雨滝山西方に帯状に派生する丘陵上に形成された古墳群である。既に消滅した古墳も多く、現存するあるいは調査によりその存在が確認されたものは8基のみである。ここでは、既往のトレレンチ調査によって墳丘構造が判明し、須恵器・埴輪が出土している1・4・6・8号墳について記載する。

#### (1号墳)

径約15m、高さ約2.5mの円墳であるとされている。墳丘周囲には幅2～2.5mの周溝が開削されており、埋土下層を中心で円筒埴輪、須恵器、拳大の円鏡が少量出土している。外表施設として円筒埴輪及び葺石を使用した可能性が高いが、葺石に関しては明瞭ではない。しかしながら、同時期に築造されたと考えられる4・6号墳では葺石がみられることから、葺石が施されていた可能性は高いと言えよう。

須恵器蓋杯の蓋は天井部が丸みを帯びるとともに、口径が緩小化している。また、天井部・口縁部境の段が明瞭に残存している。一方、甕は口頭部付近のみの資料であるが、頸部から「く」字状に湾曲しながら外反する口縁部を有し、端部は拡張されナデ調整により面が形成されている。また、外面には櫛描きによる波状文がみられる。これら須恵器の形態的特徴から、TK23～47型式並行期に築造されたものである可能性が高い。

円筒埴輪では、断面台形及びM字形に近い台形を呈するタガを有するものがみられる。その他、台形タガでは明瞭に屈曲する上端部とは対照的に下端部の稜が崩れ、三角形状を呈するものも見られる。タガ上面・下面・側面は丁寧に撫でられ明確な「面」を持ち、特に上端部稜が鋭く屈曲し強調された極めて立体的な形状を呈する資料が主となる。タガ基部は明確に屈曲し、基部が極めて明瞭な資料が大多数である。幅16mm、突出4mm程度の資料がみられる一方で、幅18mm、突出8～10mm程度の比較的タガの突出度が高い資料も多くみられる。最下段タガに断続ナデ技法の痕跡は見られない。口縁部は直立気味のもののみみられる。底部は調整が加えられたと考えられる資料も含まれるが、器壁は厚く端部には面が形成されている。外面調整では、二次調整のヨコハケを施す資料が多く含まれる。透かしは円形のみである。

#### (4号墳)

径約20m、高さ約3m程度の円墳であり、低平な張り出し部が取りつく可能性があるとされている。墳丘

周囲には幅3～3.5mの周溝が開削されており、埋土下層を中心に円筒埴輪片及び拳大の円礫が少量出土している。基底部付近では、幅約1mにわたって、葺石が確認されたとされていることから、外表施設として円筒埴輪及び葺石を使用した可能性が高い。主体部は4基の堅穴式石槨であり、内部より鉄鏃や鉄鎌、鉄刀、馬具、ガラス製玉類、須恵器蓋杯、無蓋高杯等が出土している。このうち、須恵器蓋杯については、蓋及び身の天井部及び底部が丸みを帯びるとともに、口径が矮小化している。蓋外面の段も比較的明瞭である。蓋・身とともに口縁端部の段が明瞭に残存し、身口縁は短く張り出す蓋受け部に対し、直立又是内傾気味に高く延びる。加えて、無蓋高杯については長脚化傾向が未だ見られず、杯部は深く、杯部外面の棱や櫛描きによる沈線がみられる。これら須恵器の形態的特徴から、TK23～47型式並行期に属するものであると考える。

報告書掲載資料が少量であり、必ずしも傾向を正確に把握できていないが、円筒埴輪では、断面台形・扁平形状を呈する幅30mm、突出6mm程度のタガを有する資料がみられる。また、底部は無調整で成形時の素地の自重により肥厚した資料のみである。外面調整は一時調整のタテハケのみである。

#### (6号墳)

本墳からは須恵器が出土していないが、他の古墳とほぼ同時期であると考えられるとともに、円筒埴輪の良好な資料が検出されていることから概略をふれておく。

径約12.5m、高さ約2.5～3mの円墳であるとされている。墳丘周囲には幅1.2～2mの周溝が開削されており、埋土最下層を中心に多量の円筒埴輪及び拳大の円礫、安山岩板石が出土しており、一部の埴輪は縦上面で出土している。よって、外表施設として円筒埴輪及び葺石を使用した可能性が高い。

円筒埴輪では、断面台形及びM字形に近い台形を呈するタガを有するものがみられる。その他、台形タガでは明瞭に屈曲する上端部とは対照的に下端部の棱が崩れ、三角形状を呈するものも見られる。タガ上面・下面・側面は丁寧に撫でられ明確な「面」を持ち、特に上端部棱が鋭く屈曲し強調された極めて立体的な形状を呈する資料が主となる。タガ基部は明確に屈曲し、基部が極めて明瞭な資料が大多数である。幅16mm、突出4mm程度の資料がみられる一方で、幅16mm、突出6mm、幅10mm、突出6mm程度の比較的タガの突出度が高い資料も多くみられる。最下段タ

ガに断続ナデ技法の痕跡は見られない。口縁部はやや外反気味のものがみられる。また、底部は底部調整が加えられ、先細り気味で端部にわずかな面を形成するもののみみられる。二次調整のヨコハケを施す資料が含まれる。透かしは円形のみみられる。

#### (8号墳)

径約12mの墳丘が完全に削平された円墳であるとされている。墳丘周囲には幅約1.6mの周溝が開削されており、埋土中層を中心に円筒埴輪及びほぼ完形の須恵器ハソウが出土している。外表施設として円筒埴輪を使用した可能性が高いが、葺石に関しては明瞭ではない。須恵器ハソウは、口径が体部最大径とほぼ同じであるとともに、頭部の長大化が進行していない形態である。このようなハソウの形態的特徴からTK23～47型式並行期に築造されたものである可能性が高い。

円筒埴輪では、断面台形及びM字形に近い台形を呈するタガを有するものがみられる。タガ上面・下面・側面は丁寧に撫でられ明確な「面」を持ち、極めて立体的な形状を呈する資料が主となる。タガ基部は明確に屈曲し、基部が極めて明瞭な資料が大多数である。幅25～30mm、突出6mm程度の低平なタガを有する資料が多くみられる。また二次調整のヨコハケを施す資料が多く含まれる。透かしは円形のみみられる。

#### 【雄山4号墳】

雄山古墳群は綾川河口域東岸に形成された独立丘陵から東方向に延びる低い尾根の斜面部に形成された7基の円墳からなる古墳群である。このうち、道路整備工事に伴い4～7号墳の調査が実施され、初期的な横穴式石室を埋葬施設とする古墳が比較的短期間に累積的に築造された状況が確認された。このうち、須恵器及び円筒埴輪が多量に出土した雄山4号墳について概説する。

雄山4号墳は径約11.8mの円墳である。墳丘周囲には幅2.5m以上の周溝が開削されており、埋土下層を中心に円筒埴輪や人形・馬形・器財形の形象埴輪、須恵器、鉄製品等が出土していることから、外表施設として埴輪を使用した可能性が高い。一方、葺石は見られない。なお、埴輪や須恵器壺の出土状況から、墓道前面の前底部における埴輪・須恵器の樹立や墳丘上への須恵器壺の樹立の可能性が指摘されている。埋葬施設は前述のとおり横穴式石室であるが、墓道を欠き、堅穴式石槨を想起させる待ち送りのきつい小

形の玄室の一短側辺に開口部を設け、墓道を取り付けたものであり、讃岐地域における6世紀中葉段階の横穴式石室導入初期の形態として位置付けられる。玄室内からは鉄製工具や馬具、ガラス製玉類、須恵器蓋杯、無蓋高杯等が出土している。また、前述のように埴丘上面や周溝内から多量の須恵器蓋杯や甕、壺、各種埴輪等が出土している。

須恵器蓋杯は蓋・身とともに口径がやや拡大傾向にある。底部・天井部は平板な形態を示し、全体的に器高が低くなる。前段階まで明瞭に残存している蓋の稜はより一層退化傾向にあり、沈線化する資料も見られるが、口縁端部の段は未だ残存している。身は口縁部の立ち上がりがやや低くなるとともに、口縁端部の段が消滅した資料も見られる。無蓋高杯は長脚化傾向がみられるものの、TK10型式のものと比較して低脚である。また、透かしは方形一段透かしが主である。甕は頭部から「く」字状又は直立気味に立ち上がる口縁部を呈し、端部を拡張する資料、端部下位に粘土帯を貼り付ける資料等がみられる。また、口縁部外面に櫛書きによる粗雑な波状文がみられる資料も含まれる。調整痕が残る資料では、いずれも外面に平行叩き、内面に同心円状の当て具痕が存在するが、外面の平行叩き後、横方向のカキ目を施すものが多くみられるとともに、内面の当て具痕を丹念にナデ消す資料も見られる。上記のような須恵器の形態的特徴から、当該古墳はMT15型式並行期に築造されたものである可能性が高い。

円筒埴輪は須恵質・土師質のものがみられる。タガ断面は強いナデにより側面が大きく凹む明瞭なM字形状を呈するものが大多数であるが、M字に近い台形状を呈するものも少量含まれる。その他、台形タガでは下端部の棱が崩れ、三角形状を呈するものも見られる。明瞭なM字形状を呈するタガについては、強いナデにより側面が大きく凹むとともに、上面も内湾気味となる。加えて、M字タガについても上端部棱を強調する傾向がみられ、上端部が突出したような状況を呈する。概して、タガ上面・下面・側面は丁寧に撫でられ、明確な「面」を持ち、特に上端部棱が鋭く屈曲し強調された極めて立体的な形狀を呈する資料が主となる。タガ基部が明確に屈曲し、基部が極めて明瞭な資料が大半を占める一方で、上下基部がナデ調整により押し潰されたような状況、すなわち緩やかなスロープ状を呈し極めて不明瞭な間延びした基部を有する資料、及びその傾向が一層進行しタガ上下基部付近を強く撫でることにより、わざかな隆起を形成するのみの資料も一定数みられる。本古墳における出土円筒埴

輪は幅20mm、突出4mm程度の資料がみられる一方で、幅20mm、突出8mm程度の比較的タガの突出度が高い資料も多くみられる。最下段タガでは、断続ナデ技法の痕跡が見られる資料（無調整突帶）が含まれるが、大多数の資料では確認できない。口縁部は外反気味のものが主となるが、少量直立するものが混在する。また、底部は底部調整が加えられ、先細り気味で端部にわずかな面を有する資料とともに、無調整で成形時の素地の自重により肥厚した資料も混在する。外面調整は二次調整のヨコハケを欠く。透かしは円形のみみられる。

#### 【相作牛塚古墳】

相作牛塚は、本津川・香東川下流域、相作馬塚の北西約50mの地点に位置する。本古墳は全長14m以上の円墳であるとされ、主体部は堅穴式石槨であるとされているが、開発による破壊が著しく詳細は不明である。

出土遺物として、副葬品であると考えられる金銅製の馬具や挂甲の小札、須恵器蓋、甕、器台等がみられる。須恵器では、後述する王墓山古墳出土器台よりも口縁部形態において古相を示す器台が出土している。また、甕体部片では例外なく外面に平行叩き目、内面に同心円状の当て具痕が残されているが、叩き成形後の二次的な調整として内面に面上にナデ調整を施す資料が多くみられ、外面にカキ目やナデ調整を施す資料も少量みられる。各種須恵器の形態的特徴から、MT15型式並行期に築造されたものであると考えられる。

埴輪は円筒埴輪、家形埴輪、人物埴輪等が出土している。このうち、円筒埴輪では、須恵質・土師質のものがみられる。タガ断面はM字に近い台形状を呈するものが多いが、強いナデにより側面が大きく凹む明瞭なM字形状を呈するものも含まれる。概して、タガ上面・下面・側面は丁寧に撫でられ、明確な「面」を持ち、特に上端部棱が鋭く屈曲し強調された極めて立体的な形狀を呈する資料が多い。タガ基部が明確に屈曲し、基部が極めて明瞭な資料が大半を占める一方で、上下基部がナデ調整により押し潰されたような状況、すなわち緩やかなスロープ状を呈し極めて不明瞭な間延びした基部を有する資料、及びその傾向が一層進行しタガ上下基部付近を強く撫でることにより、わざかな隆起を形成するのみの資料も一定数みられる。本古墳における出土円筒埴

輪を実見した結果、基部の明確な資料は全体の約6割、基部がスロープ状を呈する資料は約1割、わずかな隆起を呈するのみの資料は約3割を占める。幅20mm、突出4mm程度の極めて低平化した資料がみられる一方で、幅18～20mm、突出8～10mm程度の比較的タガの突出度が高い資料も多くみられる。最下段タガでは、断続ナデ技法の痕跡が残存する資料が見られる。また、口縁部が直立気味のものとともに、端部をやや外反させる資料も含まれる。底部は底部調整が加えられ、先細り気味で端部にわずかな面を有する資料とともに、無調整で成形時の素地の自重により肥厚した資料がみられる。多くの場合、外面は一次調整のタテハケのみであるが、数点二次調整のヨコハケを施すものがみられる。最下段タガでは、断続ナデ技法の痕跡がみとめられない。ただし、ここでは、最下段タガが残存している資料に限りがあることも考慮する必要がある。透かしは円形のみみられる。

#### 【王墓山古墳】

王墓山古墳は、弘田川上流域、大麻山と我押師山・筆ノ山に挟まれた谷部に形成された独立丘陵上に位置する、全長約45mの前方後円墳である。主体部は横穴式石室であり、玄室内部に石星形を有する。本古墳の墳丘では円筒埴輪や形象埴輪が出土しており、外表施設として埴輪を使用していた可能性が高い。一方、葺石はみられない。本古墳の墳丘規模は同時期の他のものと比較して極端に大きく、前方後円墳という墳形を採用している一方で、玄室床面積は5m<sup>2</sup>程度と平均的のサイズである。墳丘形態及び規模、埴輪を使用している状況から、言わば「外見」を重視した古墳であると位置づけられ、当該期の松山平野から丸亀平野でみられる状況と一連の現象として捉えられる。

石室内出土遺物として、金銅製の冠帽や馬具、玉類、須恵器蓋杯や無蓋高杯、提瓶、器台等がみられる。特に須恵器では、口径が比較的大きい蓋杯が出土し、蓋外面の稜が沈線化している個体がみられる点、身の立ち上がりがやや低くなり、口縁端部の段が消滅している点、長脚化が進んだ無蓋高杯に一段透かしの脚部が多くみられる点等各種須恵器の形態的特徴から、TK10型式並行期に建築されたものであると考えられる。

なお、一段階遅れてMT85型式並行期に近接して建築される菊塚古墳も墳丘形態は前方後円形であり、石星形を有する横穴式石室が採用される点で王墓山古墳と類似する。しかしながら、円筒埴輪の使用は見

られず、以降讃岐地域で前方後円墳は築造されなくなる。よって讃岐地域では、王墓山古墳が埴輪を樹立した最後段階の古墳（前方後円墳）であると言える。

円筒埴輪は須恵質・土師質のものがみられる。断面M字形、台形のタガを有するものがみられる。その他、上端部突出気味の台形タガでは下端部の稜が崩れ、三角形状を呈するものも見られる。タガにおいては、上面・下面・側面が丁寧に撫でられ、明確な「面」を持つ、基部が極めて明瞭な資料は皆無となり、タガの上下基部がナデ調整により押しつぶされたような状況、すなわち緩やかなスロープ状を呈し極めて不明瞭な間延びした基部を有する資料及び、タガ上下基部付近を強く撫でることにより、わずかな隆起を形成するのみの資料に限られる。本古墳における出土円筒埴輪を実見した結果、基部がスロープ状を呈する資料は約6割弱、わずかな隆起を呈するのみの資料は約4割を占める。幅18mm、突出3mm程度の資料がみられる一方で、幅20mm、突出6mm程度の比較的突出度の高い資料もみられる。最下段タガでは、断続ナデ技法の痕跡が見られる資料（無調整突帯）が含まれる。口縁部は直立気味で端部をやや外反させる資料がみられる。底部は底部調整が加えられ、先細り気味で端部にわずかな面を有する資料とともに、無調整で成形時の素地の自重により肥厚した資料がみられる。外面調整は一次調整のタテハケのみであり、二次調整は見られない。透かしは円形のみみられる。

#### 6 川西編年V期における円筒埴輪諸要素の変化

前項では、V期に比定できる円筒埴輪が出土した古墳について、出土した須恵器をもとにTK208～TK10型式の順に並べ、それぞれの古墳から出土した円筒埴輪の形態・調整の概要を記載した。その結果、「タガの形状」「最下段タガにおける断続ナデ技法の痕跡の有無」「外面二次調整の有無」「底部調整の有無」において、時期的变化を比較的明瞭に読み取ることができた。以下、上記4項目の变化の方向性について概説する。

**タガ** 一貫した方向性として、タガは時間が下るにしたがって、全体的に低平化する傾向が指摘できる。TK208～MT15型式並行期では、幅に対し1/2前後の突出を有するタガが多く含まれる一方、TK10型式並行期は、それに満たない資料のみみられる。ただし、タガの全体的な低平化途上に明瞭な画期は認められず、むしろ漸移的な変化として捉えられる。後述する

|                        | TK208～TK23                           | TK23～TK47                          | MT15                                   | TK10                               |
|------------------------|--------------------------------------|------------------------------------|--|------------------------------------|
| タガ形状の変化<br>(S=1/4)     |                                      |                                    |  |                                    |
| タガ突出度<br>(突出 / 幅)      | 0.25～0.56<br>※突出度0.4～0.5前後の資料が大多数である | 0.20～0.60<br>※突出度0.4～0.5前後の資料が多数ある | 0.20～0.50<br>※突出度0.4～0.5前後の資料が半数程度を占める | 0.13～0.30<br>※突出度0.3前後の資料が半数程度を占める |
| 二次調整痕を確認できる資料の有無       | 有                                    | 有                                  | 有                                      | 無                                  |
| 底部調整痕を確認できる資料の有無       | 無                                    | 有                                  | 有                                      | 有                                  |
| 最下段タガにおける断続行「技法」の痕跡の有無 | 無                                    | 無                                  | 有                                      | 有                                  |
| 資料掲載遺跡名                | 別宮北2号墳                               | 別宮北1号墳<br>大井七つ塚1・4・6・8号墳           | 雄山4号墳<br>相作牛塚古墳                        | 王墓山古墳<br>相作馬塚                      |

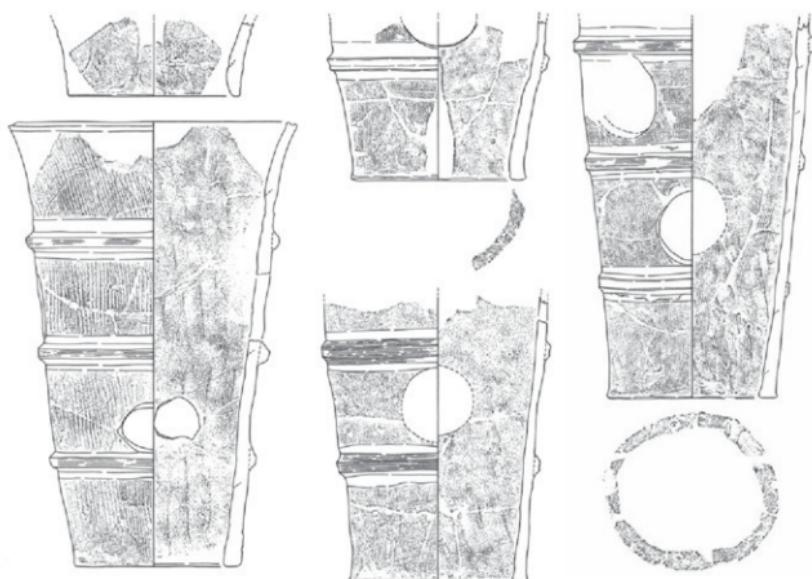
第5表 円筒埴輪変遷表

断面台形タガのM字化とタガ基部の鈍化の結果として理解できよう。敢えて画期を設定するならば、幅に対する突出度が1/2を下回るもののみとなるTK10型式とすることが妥当であろう。

統いて、断面台形タガと断面M字タガの関係についても時期的変化を読み取ることができる。TK208～47型式並行期には、IV期の円筒埴輪の延長として断面台形及びM字に近い台形を呈するタガが主体となるが、タガ上面・下面・側面を丁寧なナデ調整により整形し、明確な「面」が形成され、極めて立体的なタガが形成される。特に上端部稜を強調する意図が読み取れ、そのために上面及び側面には特に丁寧なナデ調整が加えられたと考えられる。このタガ側面におけるナデの強弱によって、当該期のタガ断面は台形又はM字に近い台形を呈することになると考える。なお、タガ下側基部にはしばしば粘土帶貼り付け時の接合痕がナデ調整により消失しきれていない状態で残存するとともに、少なくともMT15型式並行期の相作牛塚古墳の資料やTK10型式併行期の王墓山古墳、相作馬塚の資料では、タガ下面及び下端部

稜において粘土のたわみや歪みが修正されずに残存する場合が見られる。加えて、V期全体を通して台形タガでは下端部の稜が崩れ、三角形状を呈するものも含まれる。これらの点からも特にタガ上端部稜を強調するために、上面及び側面に重点的にナデ調整を行った傾向を指摘できよう。

その後、MT15型式並行期には状況が一変する。タガ上端部稜が鋭く屈曲し強調される傾向は前段階と軌を一にするが、タガ側面が大きく躍む典型的な断面M字形状を呈する資料がみられるようになる。これは、タガ上面・下面・側面に明確な「面」を形成すると同時に、上端部稜を強調するための作業工程として施されたタガ側面への丁寧なナデ調整が、その目的を達するには不必要的程度に強く施されたことに起因する現象であると考える。この段階に至って、タガ側面へのナデ調整の目的が、当初の目的から断面M字形状を形成することに変異したと考えられよう。また、MT15型式並行期には、タガ基部が明確に屈曲し基部が極めて明瞭な資料が未だ主体である一方、上端部基部がナデ調整により押し潰されたような状況、



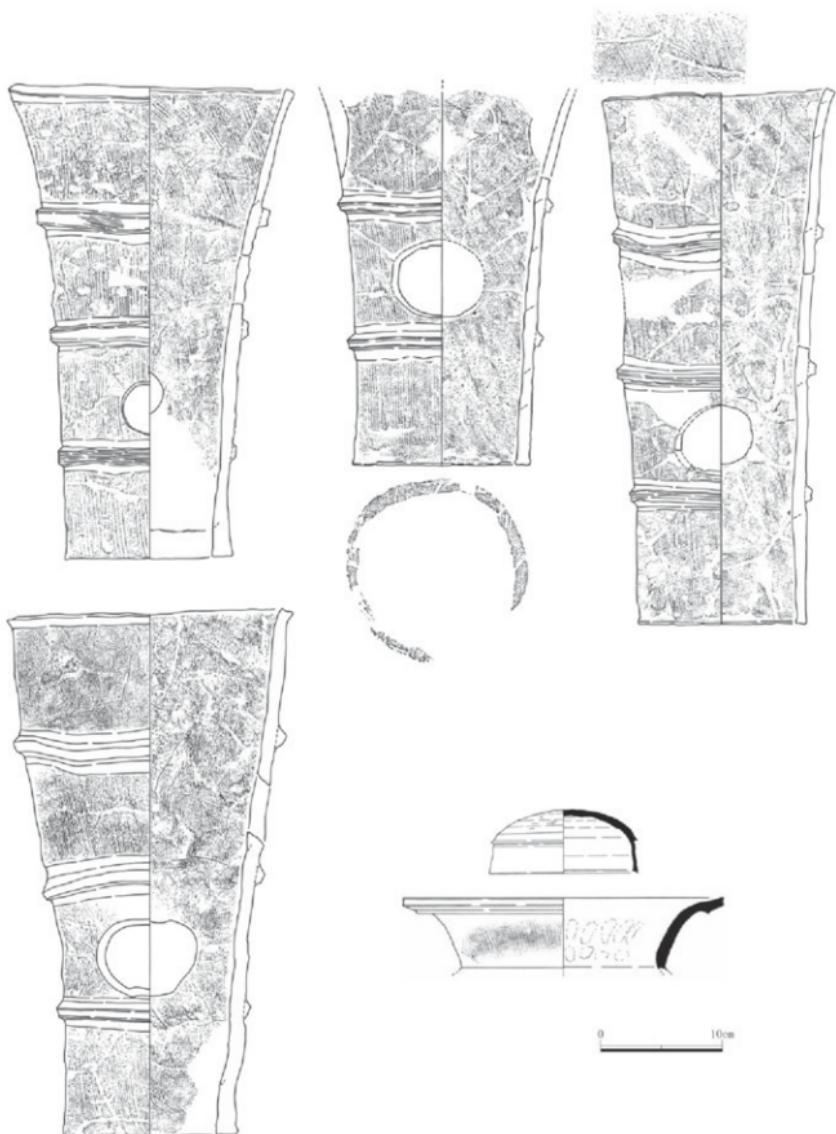
別宮北 2号墳

0 10cm



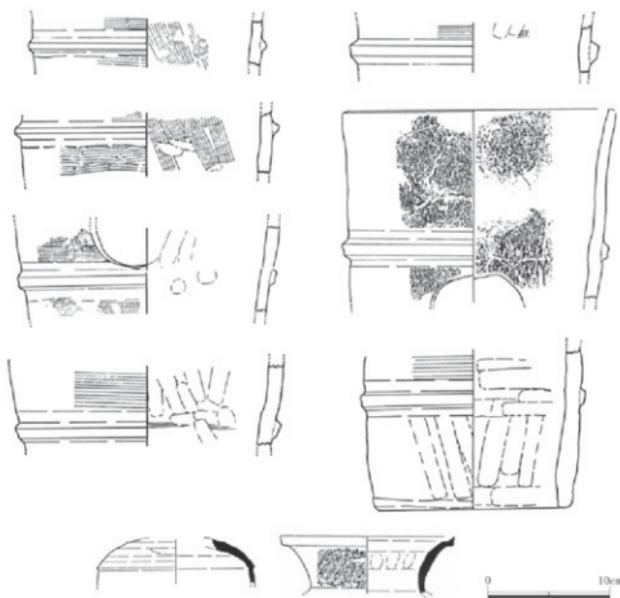
0 20cm

第18図 県内出土円筒埴輪事例①

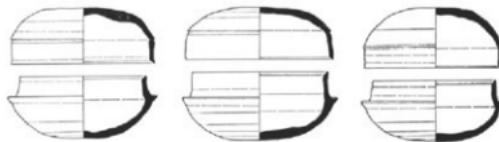
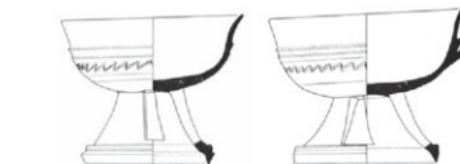
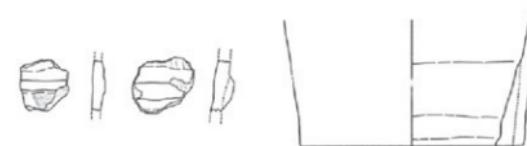


別宮北1号墳

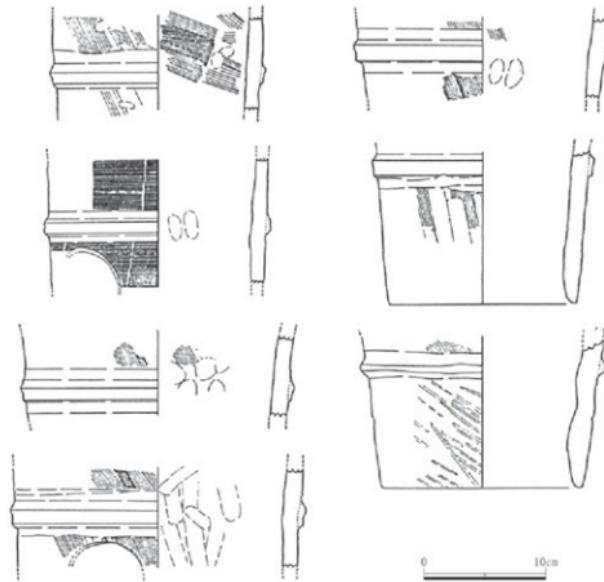
第19図 県内出土円筒埴輪事例②



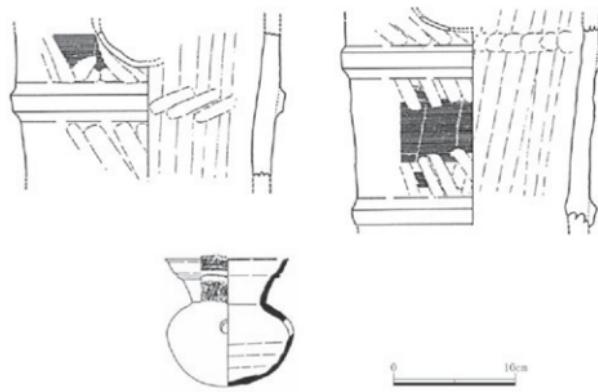
大井七つ塚1号墳



第20図 県内出土円筒埴輪事例③

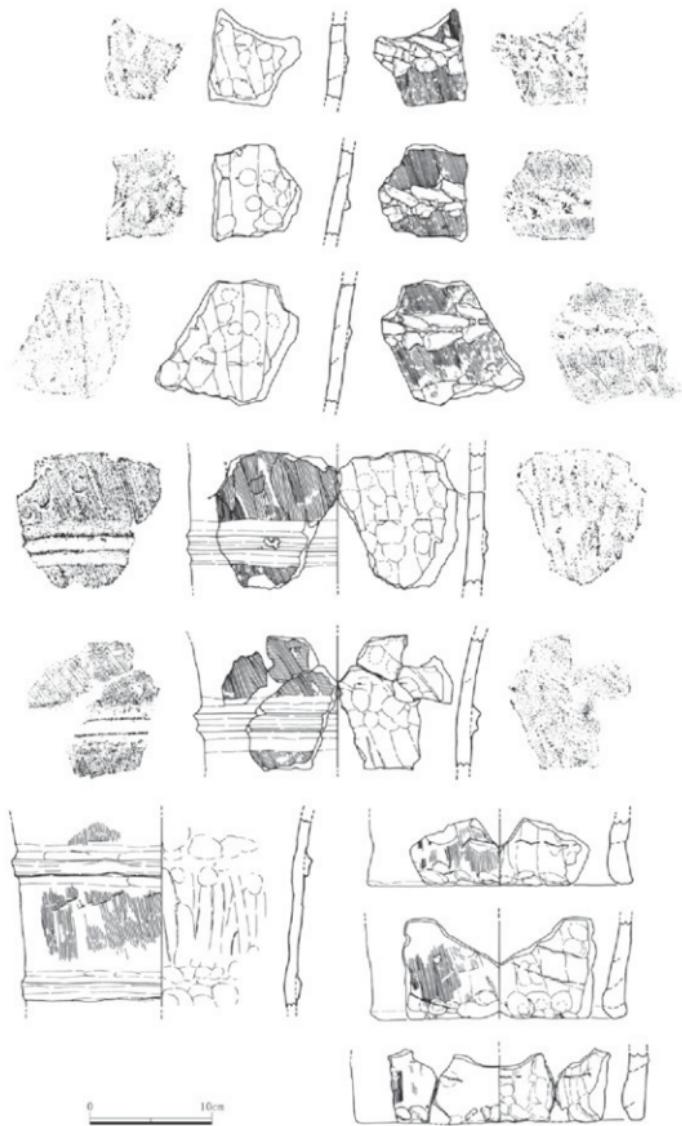


大井七つ塚 6号墳



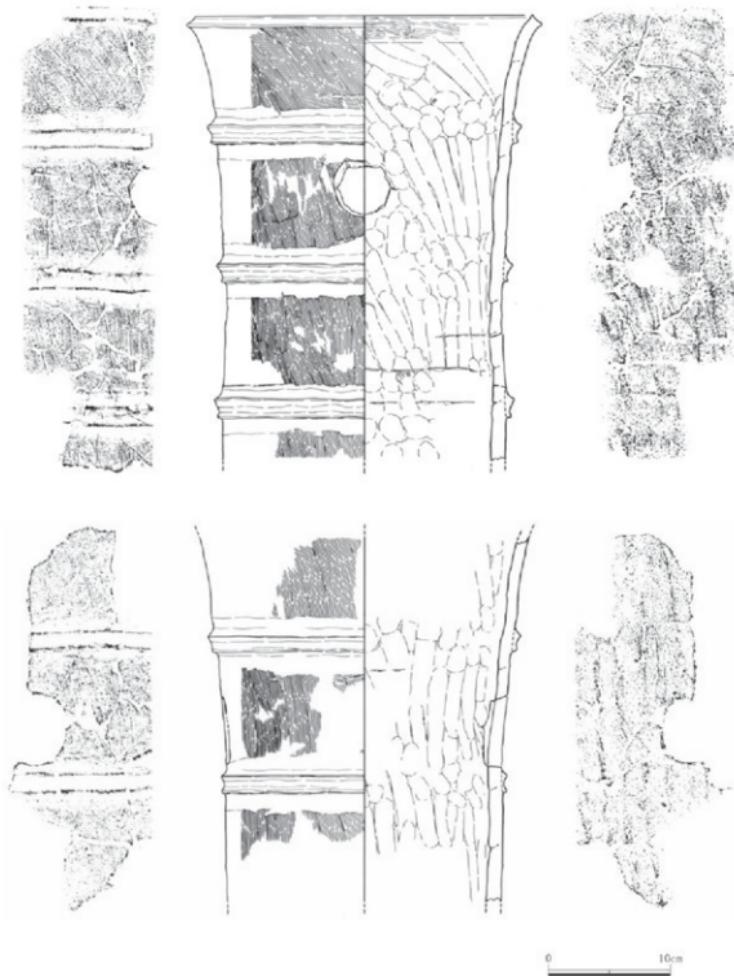
大井七つ塚 8号墳

第21図 県内出土円筒埴輪事例④



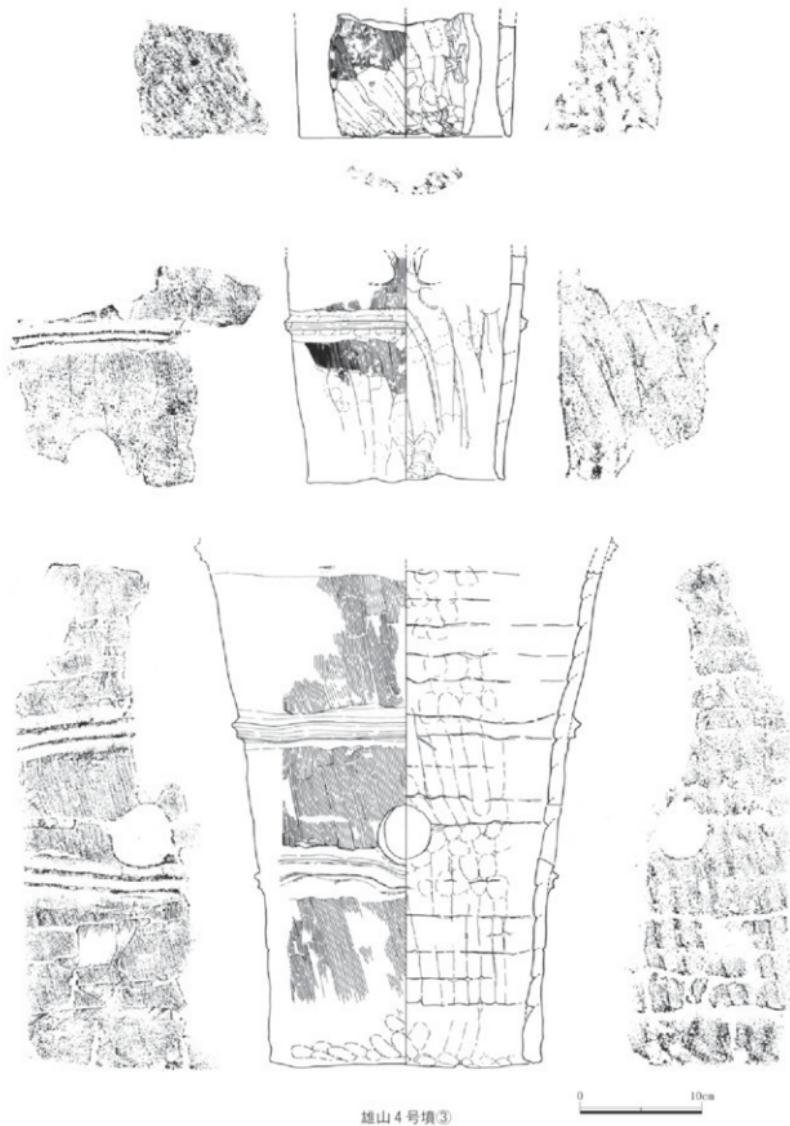
雄山4号墳①

第22図 県内出土円筒埴輪事例⑤



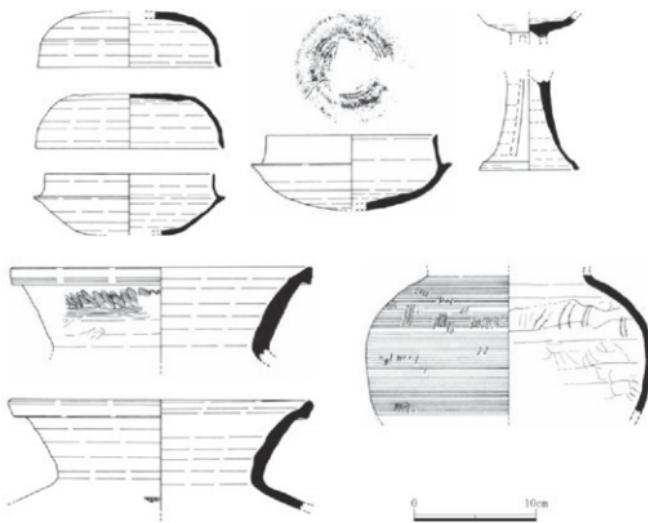
雄山4号墳(②)

第23図 県内出土円筒埴輪事例⑥

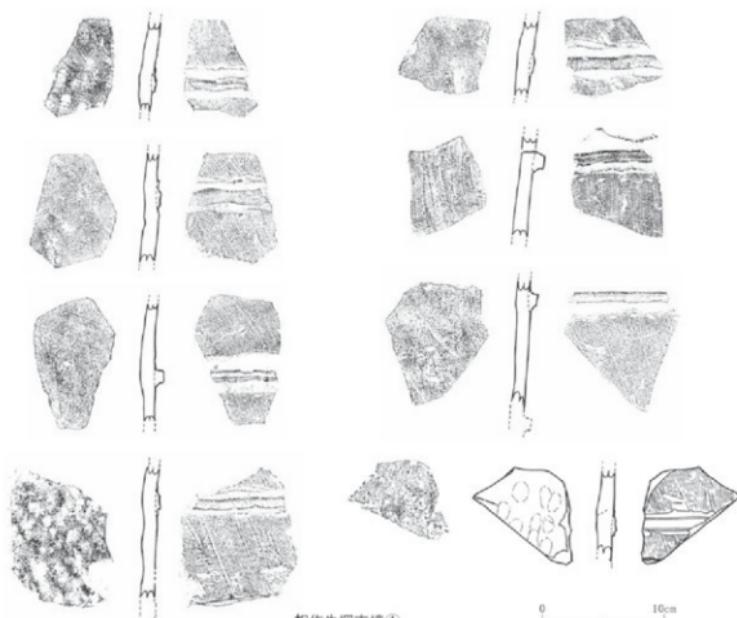


雄山4号墳③

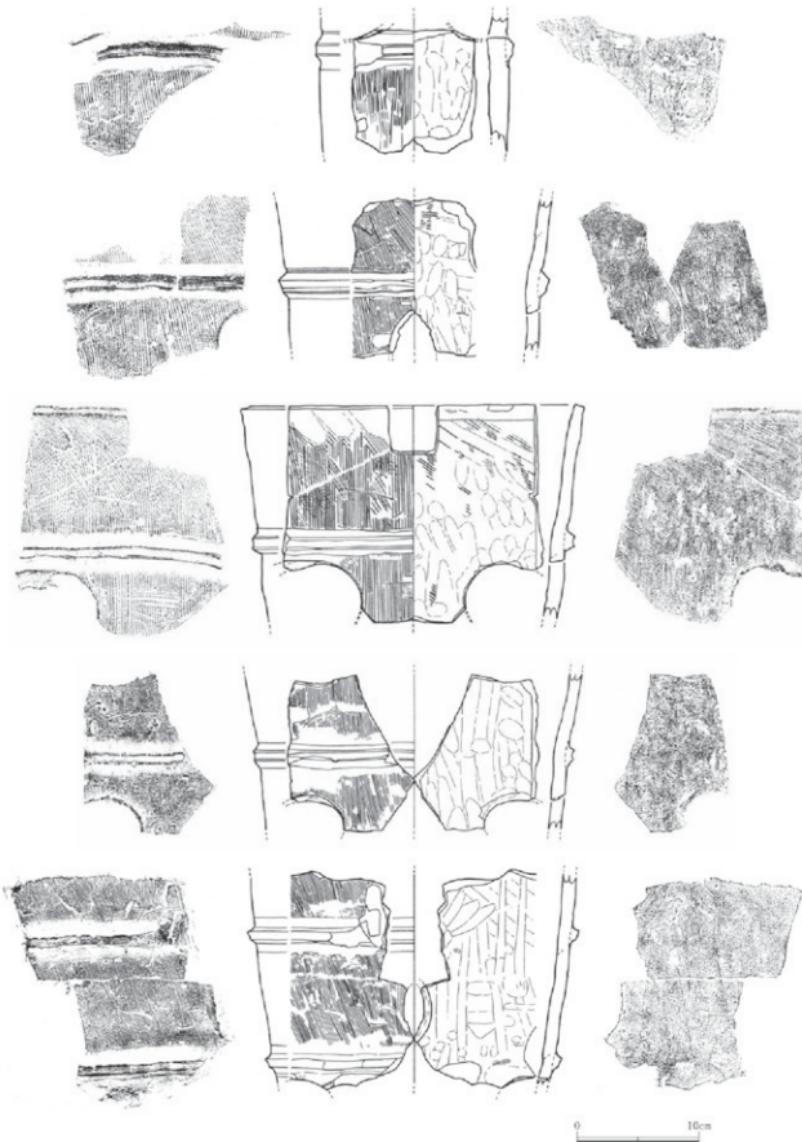
第24図 県内出土円筒埴輪事例⑦



第28図 雄山4号填④

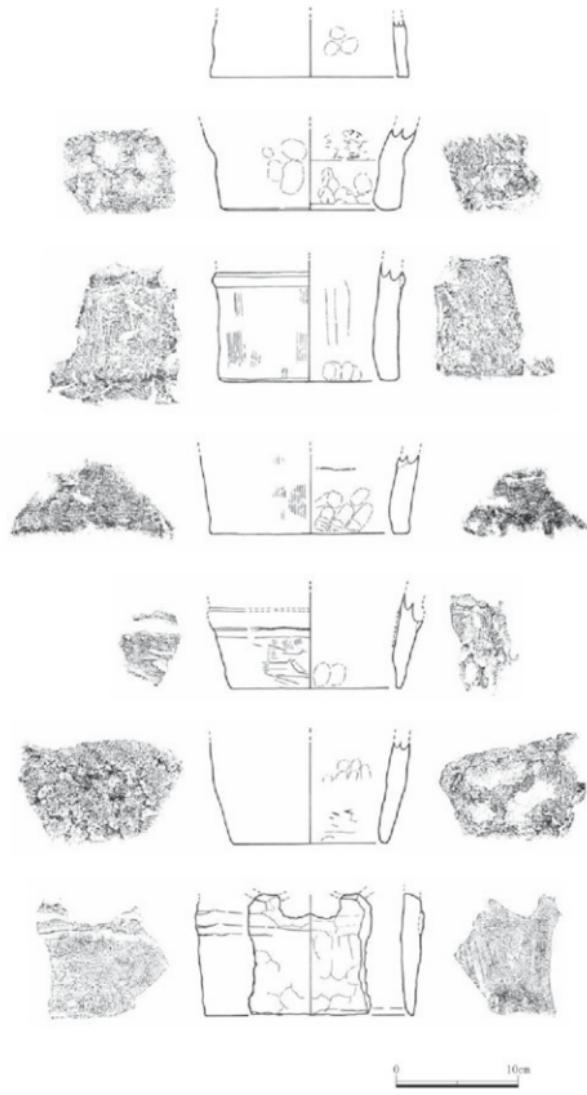


第25図 県内出土円筒埴輪事例⑧



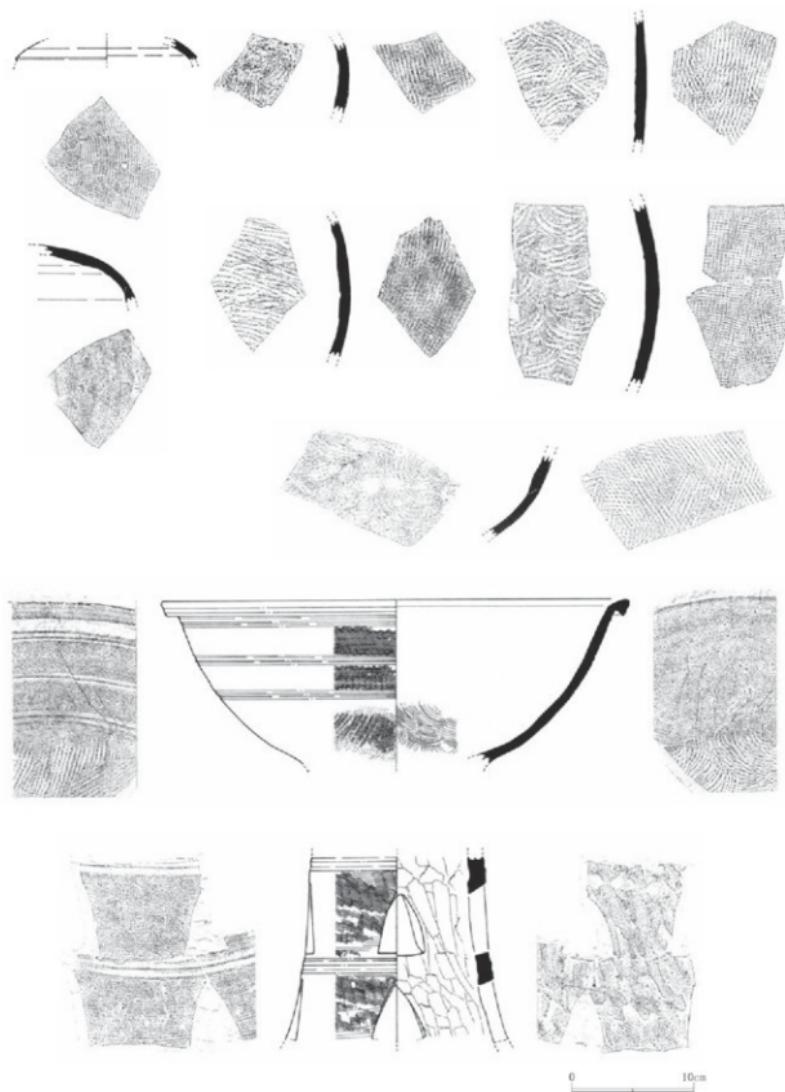
相牛塚古墳②

第26図 県内出土円筒埴輪事例⑨



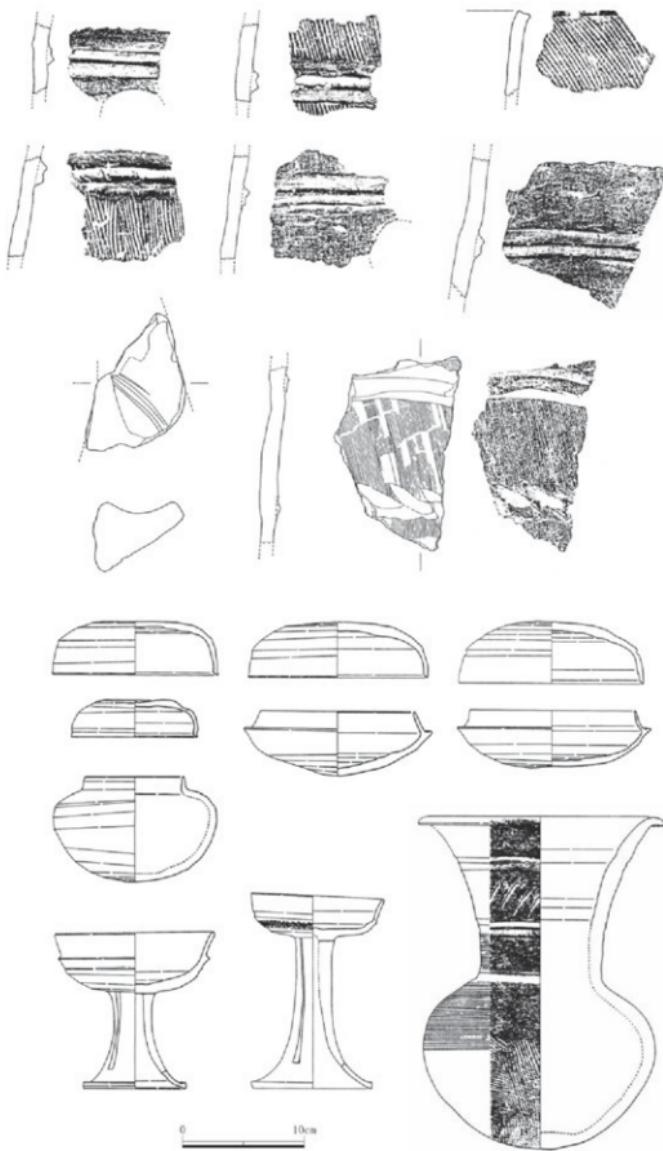
相作牛塚古墳③

第27図 県内出土円筒埴輪事例⑩

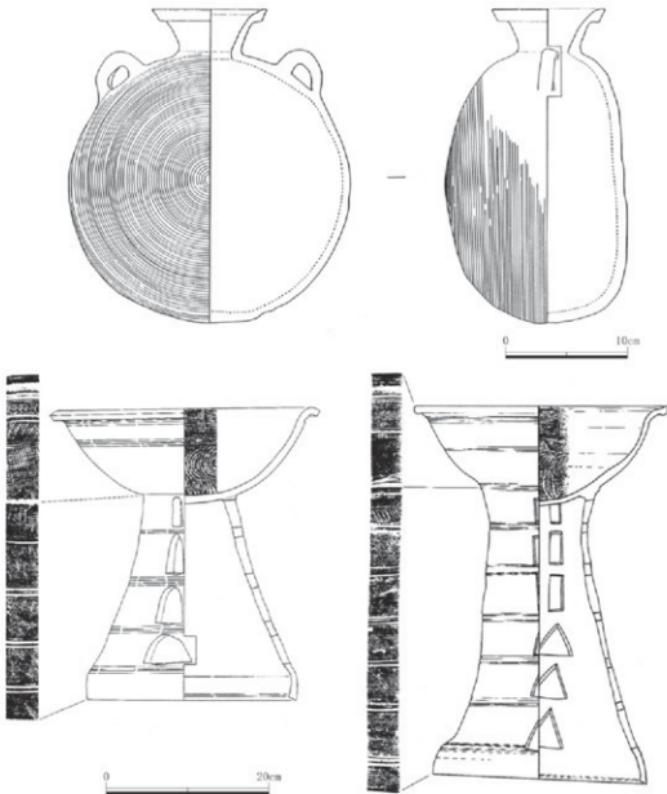


相作牛塚古墳④

第28図 県内出土円筒埴輪事例①



王墓山古墳①  
第29図 県内出土円筒埴輪事例②



王墓山古墳(2)

第30図 県内出土円筒埴輪事例⑩

すなわち緩やかなスロープ状を呈し極めて不明瞭な間延びした基部を有する資料、及びその傾向が一層進行しタガ上下基部付近を強く撫することにより、わずかな隆起を形成するのみの資料も一定数みられる。

TK10型式並行期には、MT15型式並行期まで見られた上面・下面・側面に明確な「面」を有し、タガ基部が明確に屈曲する、基部が極めて明瞭な資料は皆無となる。一方で、基部が間延びしたスロープ状を呈する資料が大多数を占め、わずかな隆起を形成するのみの資料の割合もやや上昇する。この段階に、タガの低平化が極限に達したと言えよう。

以上、改めてまとめると MT15型式並行期のタガ形

状は、側面が大きく回む典型的なM字状を呈する資料がみられるとともに、タガ基部への強いナガ調整により基部が間延びしたスロープ状を呈する資料やわずかな隆起を呈するのみの資料が加わる。この点で、TK17型式並行期以前の資料とは明確に区別可能である。続く、TK10型式並行期には、タガ基部が強く且つ明確に屈曲する資料は皆無となり、間延びしたスロープ状を呈する資料及びわずかな隆起を呈する資料のみとなり、タガの幅に対する突出度は1/3以下となる。これらの点で、MT15型式並行期以前の資料との間に明確な差異を指摘できると考える。

**最下段タガにおける断続ナデ技法** 前述のとおり、最下段タガに断続ナデ技法の痕跡が残存する資料が含まれることが、畿内における川西編年V期の特徴の1つとして挙げられているが、県内では現状では、V期後半段階に位置するMT15型式並行期以降の資料にみられる。ただし、同一時期・同一古墳に樹立された円筒埴輪相互においても、当該調整技法の痕跡が残存するものと、残存しないものがみられる。

**外面二次調整** タガ貼り付け後の外面調整である二次調整については、一次調整である縱方向のハケ調整を切る横方向のハケ調整として捉えられる。TK208～MT15型式並行期までの資料では二次調整を行なうものが見られるが、TK10型式並行期の資料では皆無である。しかしながら、同一時期においても二次調整を伴うものと伴わないものを見られる。例えば、TK208～23型式並行期に属する別宮北2号墳の資料では二次調整を欠くが、TK23～47型式並行期の別宮北1号墳及び大井1・6・8号墳では二次調整が見られる。また、MT15型式並行期の雄山4号墳の資料は二次調整を欠くが、相作牛塚古墳の資料では二次調整が認められる。

**底部調整** 底部調整はV期における成形時の粘土帶積み上げ方法の変化に伴い生じた素地の自重による歪み・肥厚を是正する必要性から採用された技法であるとされる。県内では、TK208型式並行期の資料ではみられない。TK23～MT15型式並行期では、大井6号墳や雄山5号墳、相作牛塚古墳で見られるが、大多数は無調整のものである。TK10型式並行期については、王墓山古墳の資料を実見した結果、底部調整を行なったものと無調整のものが混在している状況が読み取れる。

## 7 相作馬塚出土円筒埴輪との比較

川西編年V期の円筒埴輪において上記のような変化の方向性が指摘できた。ここで、相作馬塚出土遺物との比較を行い、相作馬塚で確認した古墳の築造時期の比定を試みる。

まず、タガについて本遺跡出土資料にみられるタガの形状は断面M字形及び台形であるが、上・下・側面に明確な「面」を形成し基部が強く屈曲する資料は皆無であり、基部がスロープ状に間延びした資料及びわずかな隆起を呈する資料のみみられる。加えて、本遺跡で出土した資料については、タガの幅に対して1/3を超える突出を有するタガは見られず、扁平化の著しさが読み取れる。

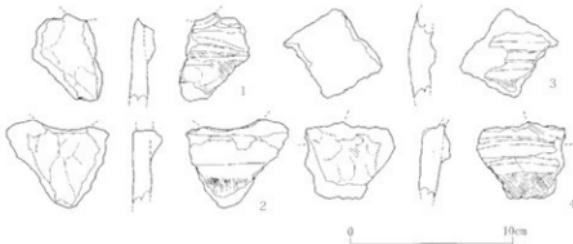
次に、本遺跡出土資料は外面二次調整を欠く。底部資料は1点のみであるが、調整が加えられ、先細り気味で端部にわずかな面を有する資料が見られる。最下段タガの連続ナデ技法については、出土資料が皆無であり不明である。

以上のような特徴から、本遺跡出土円筒埴輪はTK10型式並行期に属するものであると考える。このことは、本遺跡で出土した須恵器が、いずれもTK10型式以降に位置付け得る特徴を有している点とも整合する。

## 8 弦打王墓古墳・青木1号塚の時期比定と本津川下流域における後期前葉～中葉の古墳築造状況について

### (1)はじめに

弦打王墓古墳及び青木1号塚は本津川下流域東岸部に、相作馬塚や相作牛塚古墳と比較的近接して築造されている。両遺跡とも詳細な調査が行われておらず、時期・規模とともに不明であるが、弦打王墓古墳は現状で長径約25mの長楕円形、青木1号塚は現状で径約4.0mの円形を呈し、上面で少量の埴輪片



第31図 弦打王墓古墳出土円筒埴輪実測図(S=1/3)



第32図 中期後葉～後期後葉の古墳築造状況の動態



第33図 青木1号塚出土円筒埴輪実測図(S=1/4)

(円筒埴輪・形象埴輪)や須恵器片が採取されていることから古墳であるとされている。ここでは当該資料のうち円筒埴輪から時期比定を行い、現状で時期・構造等がある程度判明している相作牛塚古墳及び相作馬塚との前後関係を整理する。なお、弦打王墓古墳の資料は2008年12月に、青木1号塚の資料は昭和49年1~2月に採取されたものである。

### (2) 弦打王墓古墳・青木1号塚出土円筒埴輪の時期比定

弦打王墓古墳採取円筒埴輪はいずれも土師質である(第31図)。断面M字形のタガを有するもの、三角形状を呈するものがみられる。タガ基部はナデ調整によりスロープ状に間延びした状況を呈し、タガ上下に強いナデ調整を加えることでわずかに隆起させた資料もみられる。タガは、幅15mm、突出4mm程度のものから幅18mm、突出6mm程度のものまでみられる。残存状況の不良な資料ばかりであるが、外面は一次調整のタテハケのみみられる。透かしは円形である。

上記のような特徴は、前項で詳説した通りTK10型式並行期における円筒埴輪の特徴と合致する。よって、弦打王墓古墳採取資料はTK10型式並行期に属するものであると考える。表採資料であり本古墳に伴う遺物であるか厳密には断定しかねるとともに、資料数が少量であるが、本遺跡はTK10型式並行期に築造された古墳である可能性が高い。

一方、青木1号塚採取円筒埴輪はいずれも土師質である(第33図)。タガ断面はM字に近い台形状を呈するもののみである。タガ基部に着目すると、概して緩やかなスロープ状を呈し極めて不明瞭な間延びした資料が目立つが、比較的鋭く屈曲し、上・下面に「面」を持ち、比較的立体的な形状を呈する資料も含まれる。幅20mm、突出6mm程度の低平化した資料がみられる一方で、幅20mm、突出8~10mm程度の比較的タガの突出度が高い資料もみられる。外面調整はいずれも一次調整のタテハケのみであり、幅2

~3mm程度のやや粗いハケ目が見られる資料も含まれる。

上記のような特徴は、MT15型式並行期における円筒埴輪の特徴に近似する。同時に採取された須恵器甕体部片は外面に平行叩き、内面に同心円状當て具痕が残存するが、内面の當て具痕は丁寧なナデ調整により消滅している。当該須恵器甕の調整痕を見られる特徴は、上記の年代観を傍証する。弦打王墓古墳同様、資料数及び出土状況の制約から積極的根拠に欠けるが、本遺跡はMT15型式並行期に築造された古墳である可能性が高い。

### (3) 本津川下流域における後期前葉~中葉の古墳築造状況(第32図)

前述のとおり、本津川下流域の東岸部、香東川までの間には現状で判明している範囲で径1km圏内に相作牛塚古墳、相作馬塚、弦打王墓古墳、青木1号塚の4基の古墳及び古墳の可能性が高い塚が存在する。築造時期は相作牛塚古墳及び青木1号塚がMT15型式並行期、相作馬塚及び弦打王墓古墳がTK10型式並行期であると考えられる。いずれも後世の改変や調査範囲の狭小さから規模や墳形を特定しがたいが、相作牛塚古墳は径約14mの円墳であるとされており、相作馬塚は第2章で詳説した通り径12mの円墳である可能性がある。弦打王墓古墳は現状では径25m程度の長楕円形を呈するが、相作馬塚のような後世の盛土等の存在も想定しうることから、規模・墳形ともに不明である。あえて推測するならば、相作馬塚同様、現状は後世の盛土により改変された姿であり、当初は円墳であった可能性も考えられる。青木1号塚は現状で径4m程度の円形を呈することから、円墳である可能性が高い。いずれにしても、本津川下流域の平地部において比較的近接した範囲に少なくとも4基の古墳が連続して築造されたと推測できる。なお、青木1号塚周辺では、青木5号塚をはじめと

るする比較的規模の大きな塚が複数存在する。これらについては、調査が行われておらず築造時期・性格ともに不明であるが古墳である可能性も考えられよう。現段階では可能性にとどめ、判断は今後の調査を待ちたい。

本津川流域では、上記4基の古墳に先行する古墳として、川西編年IV期の埴輪が出土した御厩天神社古墳が、上記古墳群の南方約3kmの地点、伽藍山の東麓付近に存在する。全長約35mの帆立貝式古墳であると考えられており、外周に整地帯が形成されていた可能性が指摘されている。また、六ツ目山北東麓の尾根上に位置する中間西井坪遺跡では箱式石棺を埋葬主体とするものを含む円丘部径10~15mの規模を有する3基の円墳又は前方後円墳が確認されている。さらに、詳細な調査が行われておらず出土遺物や築造時期も不明であるが、石清尾山塊南端部に位置するがめ塚古墳も全長25m程の帆立貝式古墳であるとされており、同様の時期に属する可能性が指摘されている（高松市教育委員会・徳島文理大学文学部文化財学科2004）。これらは、先の本津川下流域の平地部に形成された4基の古墳とは時期的に隔たりがある。

一方、先の4古墳築造後のTK43型式段階には、本津川下流域の平地部における古墳築造が終了し、東方に位置する石清尾山塊において横穴式石室を埋葬施設とする古墳群が形成される（石清尾山13号墳等）。石清尾山塊ではこれ以降、峰山頂部や山麓付近の谷部、浄願寺山山頂部においてTK209~217型式並行期まで古墳築造が継続する。また、本津川西岸部では、勝賀山山麓においてTK209~217型式並行期にかけて横穴式石室を埋葬主体とする古墳が多数築造される（古宮古墳・鬼無大塚古墳等）。

ここで、本津川流域における中期後葉以降の古墳築造状況の概要を整理しておきたい。中期中葉～後葉には、本津川をさかのぼった伽藍山や六ツ目山山麓付近の尾根上、石清尾山塊南端付近の尾根上に円墳や帆立貝式古墳が築造される。その後、一定期間の空白期を経て、MT15~TK10型式並行期に本津川下流域の平地部において4基の円墳が連続して築造されたと考えられる。詳細は不明であるが、本津川河口西岸の丘陵上においても現状で径約12mの規模を有する円墳である住吉神社古墳が築造される。当該期の古墳については埋葬施設の構造の詳細が不明であるが、少なくとも相馬塚や青木1号塚では横穴式石室に見られる羨道や玄室を構成するような構造物は検出されていない。また、相馬牛塚古墳では堅穴

式石槨状の埋葬施設が確認されている。よって、堅穴系埋葬施設が採用された可能性も考えられる。一方で、MT15型式並行期には前述の雄山古墳群等で羨道を欠き、開口部と簡易な墓道のみを有する初期的な横穴式石室が既に採用されていることから、本津川流域に築造された先の4古墳についても同様に初期的な横穴式石室が導入されていた可能性は否定できない。ここでは、少なくとも羨道と玄室を有するTK10型式並行期以降に県内で採用され、後に一般化するような形態の横穴式石室を埋葬主体とする古墳は未だ築造されていないと言える。続くTK43型式並行期には、平地部における古墳築造が停止し、東方の石清尾山塊において羨道及び玄室を有する横穴式石室墳の築造が開始され、TK209型式並行期には西方の勝賀山東麓部においても同様の横穴式石室を埋葬主体とする古墳の築造が開始される。

本津川流域では、相馬馬塚又は弦打王墓古墳築造後に埋葬施設として羨道及び玄室を備えた横穴式石室が採用されるようになり、立地も大きく変化する。本津川下流域の平地部に形成された4基の古墳は言わば「転換期」に位置すると言えよう。前述したとおり青木1号塚周辺には古墳の可能性がある比較的規模の大きい盛土が複数見られることから、これらも含めて古墳か否かを判断した上で、当該エリアでの古墳築造過程を復元していく必要があると考える。

#### 参考文献

- 川西宏幸 1978『円筒埴輪論』『考古学雑誌第64巻 第2号』  
日本考古学会  
善通寺市教育委員会(編)1983『王墓山古墳調査概報』善通寺市教育委員会  
大川町教育委員会(編)1992『大井七つ塚古墳群発掘調査報告書』大川町教育委員会  
善通寺市教育委員会(編)1994『史跡有岡古墳群(王墓山古墳)保存整備事業報告書』善通寺市教育委員会  
国木健司(編)1994『香川考古 第3号』香川考古刊行会  
香川県教育委員会(編)1996『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第25冊 中間西井坪遺跡I』香川県教育委員会  
香川県教育委員会(編)2000『県道高松・坂越出線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 雄山古墳群』香川県教育委員会  
高松市教育委員会・徳島文理大学文学部文化財学科(編)2004『石ヶ鼻古墳・御厩天神社古墳』高松市教育委員会・徳島文理大学文学部文化財学科  
香川県教育委員会(編)2010『一般国道11号道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 別宮北遺跡・別宮北古墳群』

第6表 香川県内中世墓形成状況模式図

| 暦年代  | ①類 | ②類  | ①/②混合                       |
|------|----|---|-----------------------------|
| 12世紀 | 前葉 |   |                             |
|      | 中葉 |   |                             |
|      | 後葉 | 下川津(5T11~22)<br>奥白方南原(5T01・02)<br>西村(N2-ST01、N17-ST01他) |                             |
| 13世紀 | 前葉 |   |                             |
|      | 中葉 |   |                             |
|      | 後葉 | 延命(森3・5号塚)・鬼無藤井(5D-A5-01)                               |                             |
| 14世紀 | 前葉 | 西町(5T07-11・12他)   | 桃貸塚? 支則古墳西脇墳墓?<br>相作馬塚● 大木塚 |
|      | 中葉 | 宮西・一角(5T01)   |                             |
|      | 後葉 |   |                             |
| 15世紀 | 前葉 | 高松城東ノ丸下層(1~14号墓)●                                       |                             |
|      | 中葉 | ●   |                             |
|      | 後葉 | 昼夜城跡集石墓群?○  |                             |
| 16世紀 | 前葉 | 川南・西(5T01)●   |                             |
|      | 中葉 |   |                             |
|      | 後葉 |   |                             |

● 火葬であるもの  
○ 火葬である可能性の高いもの

香川県教育委員会  
高松市教育委員会(編)2010『相作牛塚古墳』高松市教育委員会  
高松市教育委員会(編)2012『高松市内遺跡发掘調査概報－平成23年度国庫補助事業－』高松市教育委員会

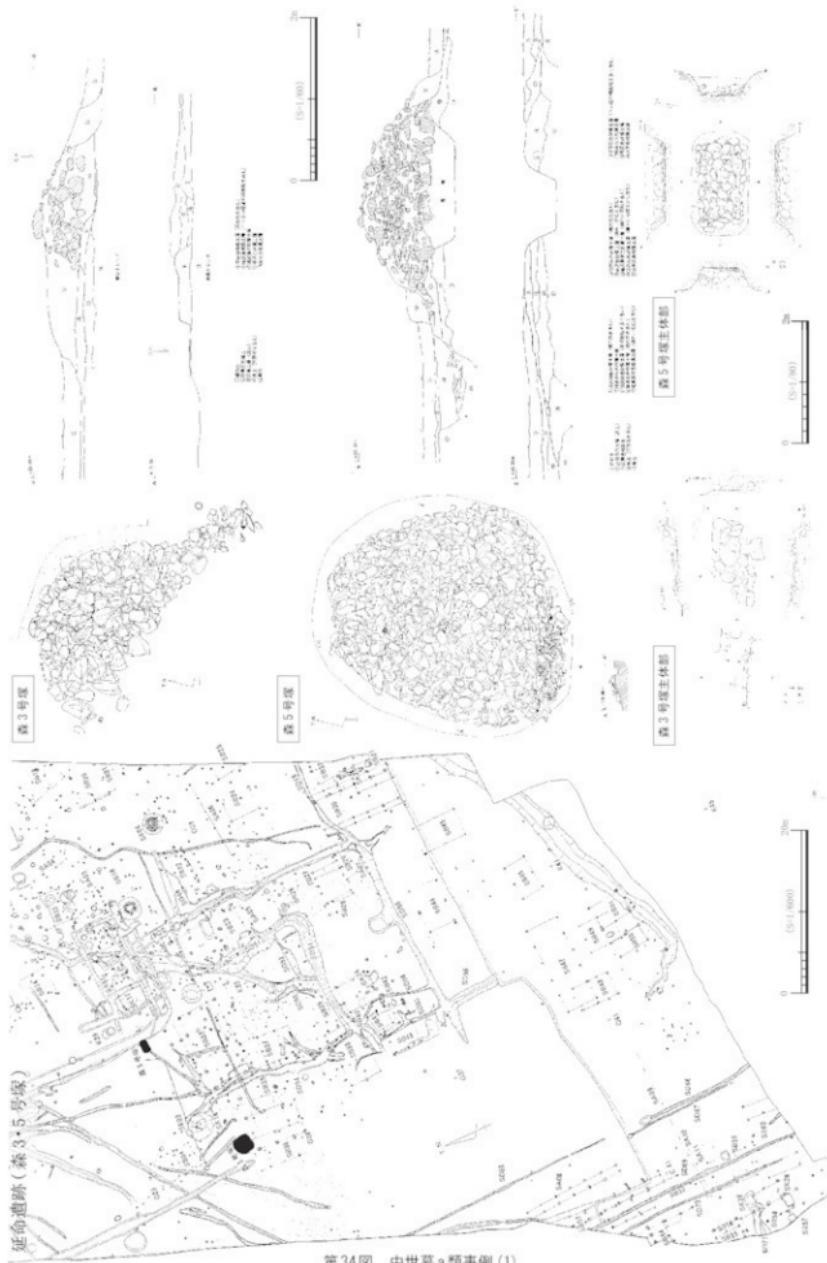
### 第3節 相作馬塚の中世墓としての評価

#### 1はじめに

本遺跡で確認した遺構のうち最も残存状況がよく、構造や構築過程を詳細に観察できたものは、中世の埋葬遺構である。中世墓は地域ごとに多様な在り方を示す。形態や導入時期、規模等において地域的差異がみられる。これは、古墳のように墳丘・埋葬施設の形態や規模、副葬品等に被葬者の社会的地位や政治秩序の在り方が投影された状況とは異なり、中世墓が専ら地縁的・血縁的関係の在り方を反映していることに起因すると考えられる。中世墓についていは、墓群としての在り方や主体部の形態、棺の有無、埋葬形態(土葬、火葬等)、埋葬体位(屈葬、伸展葬、座葬、頭位方向、顔面方向)等に基づく分類・類型化、傾向の把握が試みられている。

また、埋葬施設を伴う厳密な意味での「墓」と間違するものとして、五輪塔や宝篋印塔、板碑をはじめとする石造物を挙げることができる。石造物も使用石材や形態的特徴等において地域ごとに多様な在り方を示すが、これは石材調達の可否や石工集団の存否、物流ルートの存否等に起因する差異であると考えられている。石造物はその使用石材の特徴を観察することにより、およそその産地判定を行うことが可能であるとともに、製作者集団によりその製作技法・形態的特徴に差異がみられる。これらの情報を手掛かりに各種石造物の展開の状況が把握されつつある。

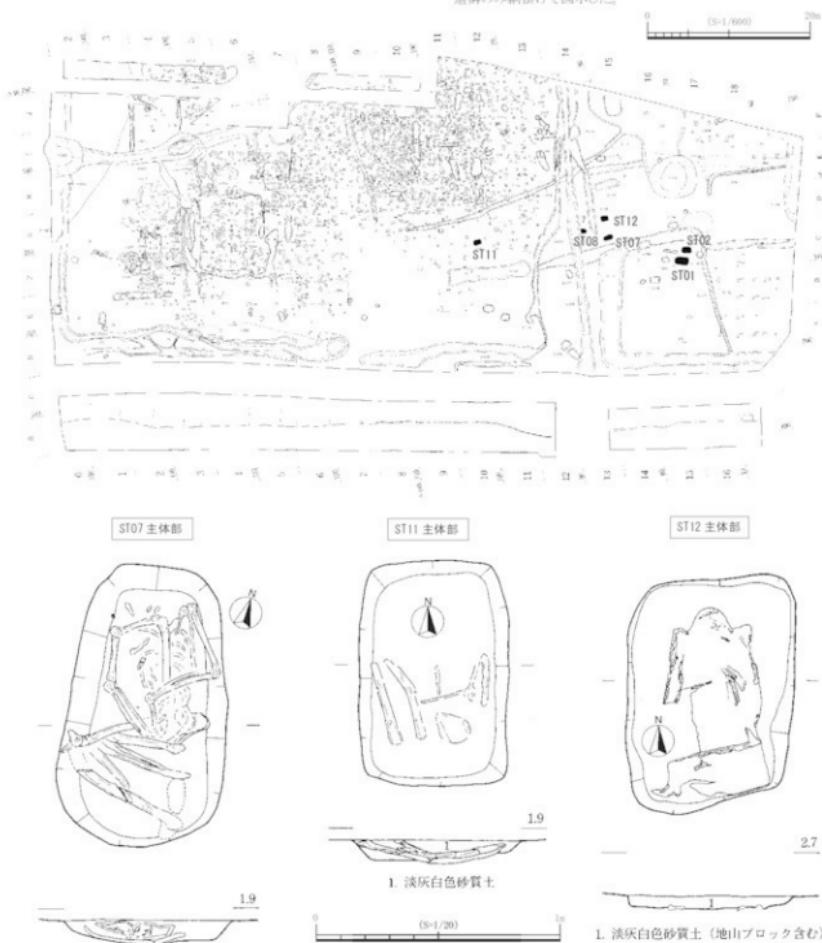
香川県内に目を転じると、中世墓・石造物の調査事例は蓄積されつつあるものの、やはりその在り方は多様である。主体部の形態、埋葬形態(土葬、火葬等)、棺の有無、埋葬体位、石造物の有無等、着目点により多様な分類が可能であるが、複雑な類型化は不用意に議論を複雑化させる恐れがある。よって、本論では主体部を取り囲む周縁施設の有無や盛土等の程度に着目して分類を行い、若干の考察を行う。また、相作馬塚出土石造物について使用石材・産地・製作技法等に基づきその位置付けを行なう。



第34図 中世墓a類事例(1)

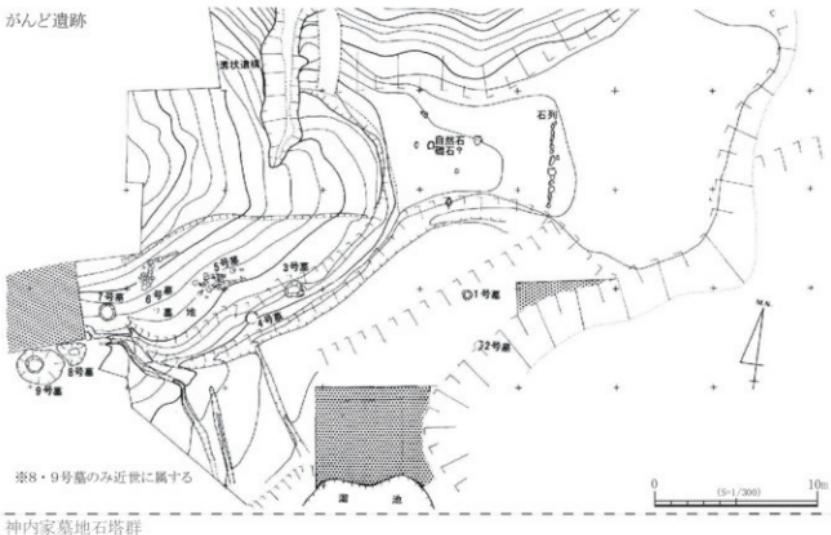
西打遺跡

壺入骨片が出土しており、中世墓である確実性の高い  
遺構のみ網掛けで図示した。

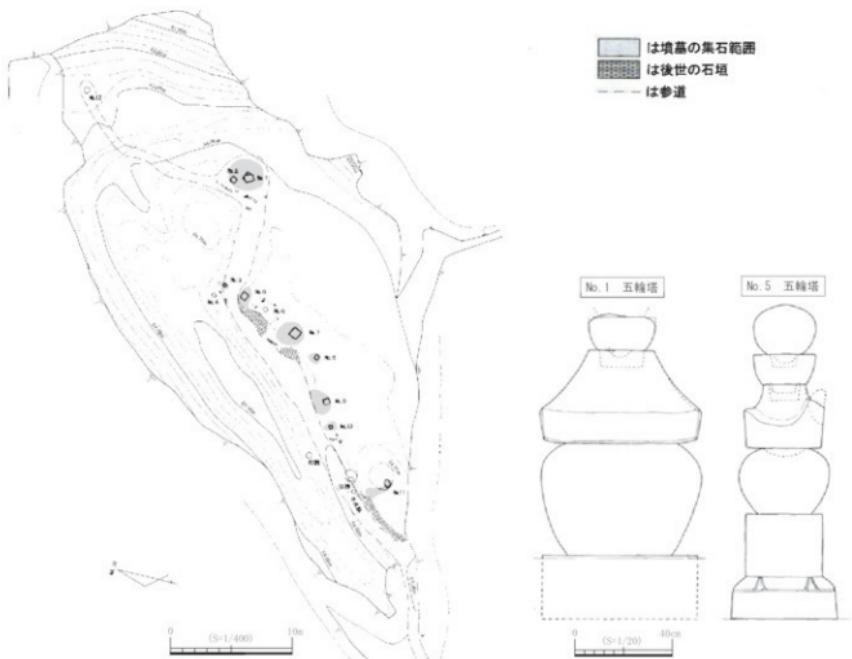


第35図 中世墓a類事例 (2)

がんど遺跡

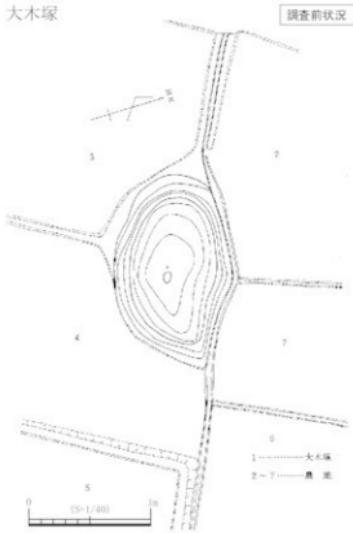


神内家墓地石塔群



第36図 中世墓 a類・b類混合事例

大木塚



調査前状況

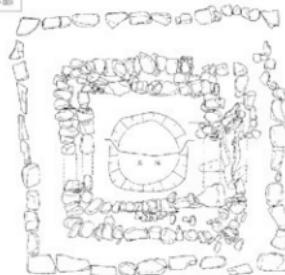
基壇及び集石



基壇及び主体部



主 体 部



未則古墳西據中世墓



主 体 部 上 面



主 体 部



第 37 図 中世墓 b 類事例

## 2 香川県内中世墓の概要と考察

### (1) 県内中世墓の分類

ここでは、上記の視点に基づき県内で確認された中世墓を2類型に分類する。一方は墓壇、石敷の石榔等埋葬施設のみ確認されたもの、及び埋葬施設上部に埋葬施設を被覆する程度の小規模な盛土ないしは集石を伴うものである(①類)。なお、埋葬施設のみ確認されている事例についても上部の削平が想定できる点、同時期の墓壇に重複関係が見られず一定の間隔が保たれている点から、盛土ないしは集石を伴っていた可能性が極めて高いと考える。他方は、埋葬施設周囲に石列・積石・周溝等の周縁施設を伴うもの、及び埋葬施設を被覆するには不必要的程度に大規模な盛土を有するものである(②類)。なお、①・②類の両者が混在する場合も見られる。

### (2) 県内における中世墓展開の概要

第5表は、県内で確認された中世墓を類型及び時系列毎に並列させたものである。この表を参考に、まずは各類型の特徴を整理し考察の前提とする。

県内で最も主流となる類型は①類である。絶対数が最も多く、かつ12世紀～16世紀まで一貫して見られる。形成状況を詳細に見ると、屋敷地・居住空間間に隣接して一時期に2～4基程度の規模で形成される場合が大多数である。居住空間を取り囲む溝の外側、やや遺構密度の低いエリアに形成される傾向を指摘できる事例もあるものの、墓域と居住空間を明確に分離した状況は認めがたい。下川津遺跡や西打遺跡では、建物形成範囲と墓群造営範囲に一部重複がみられる。墓域と居住空間が未分離な状況として捉える方が妥当であろう。

このようなく、15世紀には高松城跡東ノ丸下層において石組みの茶罈をそのまま埋葬施設とした墓群が形成される。海岸線に東西に延びる砂州上に位置し、東西40m程の範囲内に少なくとも14基の中世墓が形成されている。この事例では、居住空間が隣接して確認されておらず、周辺部における既往調査の成果から、居住空間はやや南寄りの安定した砂州上に形成されたと考えられる。よって、ここでは居住空間と墓域が明確に分離された状況を指摘できる。15世紀の高松城跡東ノ丸下層でみられた上記の状況を中世墓造営における1つの画期とみなすか、海岸線に近接した集落立地の特異性に起因する現象とみるか、現段階では判断を保留せざるを得ない。今後の類例の蓄積を待ちたい。

次に、①・②類が混在する墓群の事例が見られる。がんどう遺跡は寺院跡であり、櫃石島から東へ延びる尾根線上から南の谷部に面した斜面部にかけて展開する。尾根上では建物跡が存在した可能性が高く、斜面部に少なくとも14基の中世墓が形成されている。多くは、盛土等を伴わない土壌墓や石組墓であるが、1基のみ周縁施設を伴う可能性のあるものが見られる。火葬骨を納めた蔵骨器を埋納後、上部に石塔を建立し、周囲に石列を巡らして方形に区画された状況が読み取れる。神内家墓地石塔群においても、最も古い五輪塔No.1・2周囲に石列が設計されていた可能性が指摘されている。これらは、寺院跡や中世城館に伴う墓域において確認される特殊な事例であると考える。

②類は①類に比べて極端に少数である。断片的な出土遺物の状況から推測されるものも含むため積極的な根拠に欠けるが、およそ13世紀末～14世紀前半階に形成時期は集中している。相作馬塚も②類に分類可能である。末則古墳西側裾部で確認された中世墓は南北約7.2m、東西約5.6mの長方形の墳丘を持ち、西側を除く3辺に幅約0.4mの周溝が巡らされる形態を呈する。なお、時期は不明であるが、後に墳丘が北側へ拡張され、南北約10mの規模となる。墳丘上面には砂岩円礫による貼石が施され、頂部で五輪塔地輪2基が確認されている。五輪塔地輪下位には石組みによる主体部が1基設けられており、鉄釘が出土していることから、遺骸を木棺に納めて埋葬したと考えられる。大木塚では、三重に巡らされた列石による周縁施設がみられ、最も外側で1辺5m内外の規模を有する。石組内側には礫が多量に盛り上げられる。列石及び集石下位では玉砂利が検出され、玉砂利を除去した段階ではほぼ中央から墓壇が確認されている。なお、16世紀以降の段階で上部に大規模な盛土が施されている。碗貸塚については、詳細が不明であるが1辺10m内外の隅丸方形を呈する墳丘周囲に幅1～1.5mの周溝が巡らされている。相作馬塚同様、近世段階に盛土及び石積みが構築されており、下位の状況は不明であるが、頂部に15世紀代のものと考えられる小型化した五輪塔等が多数建立されている。このように、②類の特徴として、埋葬施設が1～2基のみである点、後世に五輪塔の建立や盛土による墓域造成がなされる点を挙げができる。なお、②類の中世墓に設けられた埋葬施設の構造や副葬品の種類・数量は①類と大差ない。

### (3) 中世墓造當主体に基づく分析

前項で主体部を取り囲む周辺施設の有無や盛土等の程度による分類に基づき、香川県内における中世墓の概要を確認したが、ここではさらに踏み込んで、各墓群の造當期間及び造當主体について検討を加える。

まず、①類については第5表で示した通り、墓群形成期間が十数年程度で終了する事例から50～100年近くに及ぶ事例まで見られ、遺跡によりばらつきが見られる。これは、墓群の造當期間が隣接する屋敷・集落の存続期間、及び城館や城館形成主体である「氏族」の存続期間と連動することに起因する。①・②類が混在するパターンについても同様の指摘が可能であり、城館や城館形成主体である「氏族」の存続期間、及び寺院の存続期間との連動性を看取できる。このような状況から、①類及び④・⑤類が混在する墓群については、一「氏族」や一「家」、一寺院が造當主体であったと考えられる。

一方、②類については外見上の隔絶性にとどまらず、埋葬施設が1～2基に限られており、「氏族」や「家」、身分・役職等に基づく庶民的な墓域として捉えることは適切ではなく、むしろ特定人のための記念物的な在り方を読み取ることができる。また、相作馬塚のように時期を隔てて墓域の拡大・造成、石塔建立がなされる場合が多い。柳賀塚の墳丘上部に建立された複数基の石塔も同様の位置付けが可能である。これらの石塔は埋葬施設を伴わないことから、建立意図は不明であるが、ここでは、追善供養の累積としておきたい。物理的・視覚的にも、現実の精神活動の面でも長期にわたる連続性をたどることができる。以上の状況から、②類については①類と同様な造當主体を想定するよりはむしろ、「家」や「氏族」等の単位を超えた造當主体を想定することが妥当であると考える。

### (4) 中世墓②類の造當主体に関する一考察

前項で、県内検出中世墓のうち、②類にあたるものは①類や④・⑤類の混在する墓群とは造當主体に特異性が見られる可能性がある点を指摘した。ここでは、可能性の1つとして地縁的結合に基づく単位による造當墓を想定したい。

14世紀以降、近畿圏を中心に「惣村」が、その他の地域においては「郷村」が形成される。いずれも、居住城が比較的密集することにより強化された地縁的関係に基づき形成された、自然発生的な村落であ

ると考えられており、「宮座」や「寄合」、「地下検断」等の内部組織を持ち合わせるとともに、村の規定である「惣旋」が制定されたとされる。また、一揆を結び、愁訴や強訴等を行う単位としても機能していたとされる。「惣村」「郷村」は一定の自治機能を有していると言える。

上記のような典型的な「惣村」「郷村」と言える地縁的結合体が、当時の高松平野で形成されていたか否かの状況については、文献・考古資料とともに具体的な資料に欠けるが、中世墓②類の造當主体として想定した地縁的結合に基づく単位として、上記の「惣村」「郷村」のような村落が候補の1つとして挙げられるよう、中世墓②類で見られたような墓域の拡大・区画造成、石塔の建立を伴う追善供養、また想定される日常的な維持管理作業といった、村落の共同作業を通して、村落構成員の結束を強化する装置として働いた可能性が考えられる。

なお、被葬者について、今回の分析作業の中で類推することは困難であったことから、今後の課題として提示するにとどめる。

### 3 相作馬塚出土石造物の検討

#### (1)はじめに

相作馬塚では、中世の集石墓や近世の盛土中等から複数個体分の五輪塔及び宝篋印塔が出土している。これらの使用石材は、天霧石、六甲花崗岩、産地不明軟質凝灰岩、国分寺産とみられる凝灰岩に分類することが可能である。ここでは、使用石材及び形態・製作技法から各石造物の製作・建立時期の特定を行ふとともに、本遺跡における中世の墓域景観の復元を行う。

#### (2)香川県内の中世石造物の概要

香川県内の石造物は凝灰岩製である「天霧石系」と「火山石系」に分かれ、概ね「天霧石系」が中讃以西、「火山石系」が中讃以東に分布する。なお、両系統の石造物分布圏の境界域に位置する中讃地域の宇多津町及び坂出市沿岸地域では、前述の凝灰岩製石造物よりも遅れて花崗岩製石造物が見られる。また、時期によりその分布範囲等に若干の変動が見られ、15～16世紀には分布圏が高松平野東部、旧山田郡と三木郡の境界付近に設定できるとされている。香川県内における中世石造物の展開については、松田氏及び海澄氏により詳細に状況が把握されている（松田2009・2013、海澄2012）。







# 写 真 図 版



1 調査地遠景（北東から）

写真図版 1



2 土留め状石積み検出状況(1)(北西から)



6 基壇状石積み検出状況(3)(西から)



3 土留め状石積み検出状況(2)(東から)



7 基壇状石積み検出状況(4)(北から)



4 基壇状石積み検出状況(1)(北から)



8 基壇状石積み検出状況(5)(東から)



5 基壇状石積み検出状況(2)(北西から)



9 基壇状石積み断面(北東から)



10 集石墓検出状況(1)(北西から)



14 藏骨器完掘状況(1)(北から)



11 集石墓検出状況(2)(北から)



15 藏骨器完掘状況(2)(北から)



12 藏骨器検出状況(1)(北から)



16 古墳填丘検出状況(1)(北から)



13 藏骨器検出状況(2)(北から)



17 古墳填丘検出状況(2)(北西から)



18 古墳墳丘検出状況(3)(東から)



19 調査区南壁断面(1)(北西から)



20 調査区南壁断面(2)(北から)



21 古墳墳丘断面(1)(北東から)



22 古墳墳丘版築状況(北から)

写真図版 5



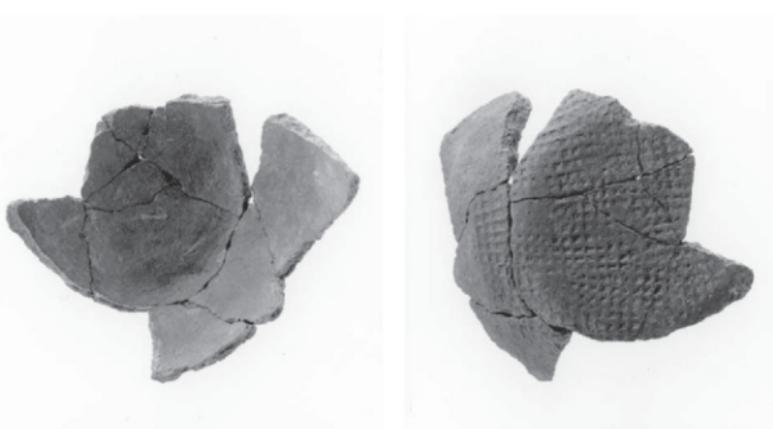
23 平成 23 年度調査時出土石造物



24 軟質凝灰岩製五輪塔



25 集石墓出土藏骨器(1)



26 集石墓出土藏骨器(2)(内面)

27 集石墓出土藏骨器(2)(外面)



28 出土円筒埴輪



29 出土須恵器



30 出土土師質土器



31 出土近世遺物

## 報 告 書 抄 錄

高松市内遺跡発掘調査報告書

## 相作馬塚

平成 27 年 3 月 20 日

編 集 / 発 行 高松市教育委員会

高松市番町一丁目 8 番 15 号

印 刷 有限会社 中央ファイリング